0000664000

0000664-000

302. 22－Ko433s

支那

小林橘川・著

教育思潮研究会

1943

AAB

小林橘川著

隨筆 支那

教育思潮研究會版

302.22
K0433r

序

支那は、私にとつて、長い間の、人生課題であつた。それは私にとつて、不思議な、むしろ神秘な人生の題目であつた、まだ小學校へ入らない六七歳の頃から、私は家で大學や、中庸を讀み習はせられた。八九歳ごろには、十八史略だの、文章規範だの、文選などといふ漢籍を讀ませられた。私はこれらに少しも親しみを感じたのではなく、たゞ當時の寺小屋式に、素讀を强制されたのに過ぎなかつた。中學に入つてからは、その反動として漢文の時間は、もつとも嫌忌すべき怠惰な時間になつてしまつた。私達の學生青年時代は、かくして全く支那といふものを念頭から閑却させられた。これは私たちにとつて不幸なばかりではなく、發展しつゝある當時の日本にとつても、大きな不幸であつた。支那に對する青年學生の無關心さから、あらゆる日支の不幸がその後續々と發生し、增大しつゝあつたからである。今日もまだこの不幸が發展し、繼續してゐるのである。

31232

眞に支那を愛し、支那を理解すべき大切な時代において、日本は支那を閉却したと同時に、支那もまた日本を閉却した、米英ソのごとき外力が、この間支那に滲透してしまつた。これを拂ひのけなければ、日支の本然の姿は現はれない。そのため大きなナヤミを、今われらは眼前に戰つてゐるのである。これが日支の運命である。これは何といふ日支の悲劇であらう。

私たちは、かゝる人生の課題を背負うて、この時代を苦しむでゐるのである。このくるしみを克服するためには、ほんとうに支那を知らねばならない。私の乏しい『隨筆支那』はこの課題に答へるための、一つの手がかりでありたいと念願する。そのために私はいささか支那の根本思想に直接、肉薄することに努力した。

てうど、ことしの夏から初秋の頃へかけて、三十二年の記者生活を托した私の『名古屋新聞』が、解消され、新愛知と合併して『中部日本新聞』が創刊されることとなつた。その思ひ出として、友人橋本越南君の教育思潮社から、この書を出版して貰うことにした。これはある時代における私の人生の記念塔である。黄河、揚子江、その他、支那の現地報告に關する記事は、もう古臭くなつてはゐるが、今、讀みかへして見ても、捨てるに忍びないものがあり、事變の側面をもの語る記錄として、本書に採錄することとした。

永久に滅びざるものと、永久に滅びうせるものとの二つが、支那にある。それを私はこの書の中から讀者諸君に讀みとつて貰ひたい。

昭和十七年十二月

著　者

隨筆 支那

目次

支那とは何ぞや……一
天壇を祭るもの……一二
天、性、道……二二
支那の國家形成理念……二三
孔子と日本……二八
社會から國家へ……三二

揚子江

揚子江デルタ……四一
長江の無言の意志……四五
沒落する繁榮……四九

うす汚れた群集……五二
上海郊外の戰場……五六
軍工路を往く……六〇
號泣と怒號……六四
最高至純な感情……六八
上海北部戰線……七二
二十二階から……七六
三義里の戰跡……八〇
ゼスフイールド……八四
揚州は昔の上海……八八
落ついた南京……九三
明孝陵……九七
玄武湖の朝……一〇〇
中山陵所感……一〇四
偶像となつた孫文……一〇八
春は土嚢から……一一一
光華門外の春……一一五
雨花臺の雨……一一九
隋煬帝と運河……一二二
資治通鑑……一二六
江都離宮の悲劇……一三〇
水鄕蘇州……一三四
寒山寺の鐘聲……一三七
寒山寺の鐘……一四一
蘇州城門の敬禮……一四四
マルコポーロ……一四八

浙江の海塘……一五一
梅の林和靖……一五五
盡忠報國……一五九
大地の母……一六三

黃河

支那の大地……一六七
天命者……一七〇
個人主義者……一七四
白河の歸化……一七七
黃河氾濫史……一八一
ドイツ人植林……一八四
支那の治水……一八七

支那に政治なし……一九一
民族の悲劇……一九四
砂中の寶庫……一九七
濟南附近……二〇一
井戸中心の社會……二〇四
支那は國家に非ず……二〇七
共同思想の起原……二一一
支那の部落構成……二一四
老子『無爲』哲學……二一七
孔子と老子……二二〇
民族性の改造……二二四
唐俑胡人像……二二八
中原の鹿……二三一

北支那の斷面

南苑の閲兵式……二三五
孟子の正心篇……二三八
愛すべき宋哲元……二四一
萬壽山と天壇……二四四
冀東政府……二四七
幸運の殷汝耕……二五一
蔣介石と北支問題……二五四
阿片と排日……二五七
濟南の小鳥市……二六〇
山東苦力の氾濫……二六三
支那民族の特質……二六七

察北一綏東……二七〇

事變直前の蒙古

蒙古支那に非ず……二七四
滿蒙一体の認識……二七八
コソ〳〵主義をやめよ……二八一
夢の國ではない……二八三
當面の蒙古問題……二八八
錫林郭勒盟……二九二
ラマ教改革問題……二九五
露蒙の關係……三九九
蒙古の資源……三〇二

題字　小林橘川
裝幀　橋本越南

隨筆

支那

支那とは何ぞや

一、天壇を祭るもの

北京の前門（チエンメン）から、その雑踏を潜り抜けて、坦々たる大道を南に走ると、やがて道の左側に沿うて高い土塁をめぐらした一廓がずつと續いてゐる。鬱蒼たる樹林が、土塁を超えて、廣い園内に展開してゐるのが、その大道からも見渡されるのである。こゝには北京をおとづれる旅人の誰もが必らず尋ねるであらう、有名な天壇がある。私は、その天壇の、靜かな、もの寂びた景觀がすきだ。いつ來て見ても、こゝはるかなる異鄕の旅人のたましゐを慰めて呉れるものがある。北京にも、まだ、こんなにも深い樹林をもつた靜寂の一境が殘されてゐるのは、何としても有り難

いことである。壯大ないかめしい門前には、わが歩哨が、儼然と立つて居り、門内にはわが衞兵が詰めてゐて、この一廓を保護してゐるのである。北京の文化が、かうして皇軍保護の下に、破壞されないであることは、私たちに心強く、たのもしいものを感ぜしめるのである。

園内は、廣々としてゐて、それが一面、荒れ果てたまゝの雜草の野原になつてゐる。私は、三度こゝを訪づれたのであるが、それがいつでも秋から初冬の頃へかけての季節であるためか、園内の雜草が、枯れ衰へて、その間から、燃えるような櫨紅葉の美しさが、落日に照り映えてゐるのが、アテもない荒涼たる感じを私にひき起させ、てうど深い秋の山路に分け入つたやうな印象が、今でも私に殘つてゐる。尾花、薄の穗が、房々と銀色に打ち靡く景色も淋しく、チヽとなく野鳥の聲も哀れである。さうした野趣にみちた荒野のさきには、眞柏の樹林が、日光もさゝぬ暗い木の下道を縱橫にもつてゐてそれを突き拔けると、白大理石で疊みあげた天壇が、神祕の壯嚴さをもつて、いとさむ〴〵と高く立つてゐるのである。

支那には、都城を建設する場合に、「左祖右社」といふ制度がある。天壇は、その左祖に當るものである。

天子は、南面して朝政を見る。北京ではその王城の南に面する前門を出はづれた左側に祖先をまつるための「天壇」があり、その右側には五穀の豐饒をいのるための「農壇」がある。天壇と農壇とが、前門を南へ走る大道の左右に、相對して、いふところの「左祖右社」をなしてゐるのである。左祖右社は、支那における神社崇拜、祖先崇拜の一定の形式をなしてゐるのであつて、すべての縣城、都邑、村落の末にいたるまでが、必らず左祖右祖の形式を整然と形づくつてゐるのだ。北京の天壇、農壇は、そのもつとも雄大な代表的のものであり、かつ典型的のものなのである。

朝鮮の京城にも、支那のこの左祖右社の形式が取り容れられてゐたのであらう。朝鮮ホテルの庭園内に、白大理石の天壇があつて、その規模はもとより北京の天壇のこれに比ぶべくもない。こゝのホテルの泊り客は、朝夕の散策に、園内のこの堂々たる大理石づくめの、天壇のわたりを徘徊して、驚異の眼をみはるのである。もとよりこれがどうした意味をもつものであるかについて、一般旅客は別段、深くセンサクをするのではない。しかしながら、天壇こそは、東洋の神祕を語る唯一のものであり、支那の思想をものがたる絶對の聖壇なのである。

私は北京を訪づれて、この白大理石の天壇に立つ毎に、いつでも支那の國家の荒廢を痛ましく感ぜざるを得ないのである。今日の支那には、天壇をまつるものがない。天壇をまつるべき資格を備へたものがない。天壇をまつるものは、古來支那では、唯、天子あるのみとされてゐる。天子は天の子である。從つて天の子たる天子のみが、たゞ「天」を祭る資格をもつのである。しかるに今日の支那には天壇をまつるべき天子がない。かくして天壇が衰へ、農壇がさびれて、荒草離々たる廢園は、たゞ徒らに荒れるがまゝに委せてゐるのである。こゝに支那の悲哀があり、こゝに支那國家の悲哀がある。

古來、支那の天子は、德あれば立ち、德なければ亡びるとされたものである。從つて有德の君子は、天の命を受けて、天子となり、よりてもつて社稷を全うすることに努めたものであるが、一旦、德を失へば、この社稷は亡び去るのが支那である。今日は、支那には有德の天子がなく、天の命を受けたところの受命の天子といふものがない。たゞ三民主義革命によつて、國民政府なるものが支那を支配してゐるが、それは支那本來の國家形成の理念とは、はるかに隔絕した思想の上に立つてゐるものなのである。革命以來の支那は、孫文も、蔣介石も、汪精衛も、激しい革命の波にもてあそばれて、支邦本來の國家形成の理念をふりかへつて見る餘裕がないのであらう。

もとより三民主義は、支那本來の主權在民の思想の上に立つものではあるが、三民主義が三民主義だけに止まつてゐては、支那の國家は形成されないし、支那國家の成長、發展も望まれはしない。支那はこの意味で、支那本來の國家形成の理念たる王道國家の思想に立ちかへらねばならぬ。それには受命の天子が出でて、天壇をまつり、農壇をまつり、嚴肅に左祖右社の崇拜形式が、實質をもつて恢復されなくてはならぬ。

試みに「禮記」月令第六をみると、

立春の日天子親ら三公、九卿、諸侯大夫を帥ひて、以て春を東郊に迎ふ、還りて、公卿大夫を朝に賞し、相に命じて德を布き、令を和らげ、慶を行ひ、惠を施して下、兆民に及ぼし、慶賜遂げ行はれて當らざることとなかれ。乃ち大史に命じて、典を守り、法を奉じ、天の日月星晨の行を司どりて、宿離たがはず、經紀を失ふことなく、初めて以て常となす。

とある。「禮記月令第六」は、天子たるべきもの〻年中行事を仔細に規定したものである。こゝでは元旦の日、天子親ら三公、九卿、諸侯、太夫を率ゐて、春を東郊に迎ふる一節を拔粹したの

である。東郊とは、北京にありてはまさしくこの天壇をさすのであらう。天子は即位のはじめ、郊祭をとり行ふが、それは天子一代の盛儀であつた。毎年、歳のはじめにも、やはりこゝにて春を迎へるのであらう。さらに禮記には、元旦の迎春祭についで、五穀を上帝に祈るの儀が述べられてゐるのである。

この月（正月）天子、乃ち元日をもつて、穀を上帝に祈る。乃ち元辰を擇むで、天子親ら、耒耜を載せてこれを參と保介との御間に措き、三公、九卿、諸侯、大夫を帥ゐて、みづから帝籍を耕やす。天子三たび推す、三公五たび推す、卿諸侯九たび推す、反つて爵を大寢に執る。三公九卿諸侯大夫みな御す、なづけて勞酒といふ。

この穀を上帝に祈り、耒耜をとつて三たび帝籍を耕やしたのは、恐らく右社の農壇においてせられるのであらう。すなはち左祖の天壇に於ては、天をまつり、右社の農壇においては、穀を祈る。これが社稷を全うすべき天子たるものゝ、年初における行事の重要な一つである。

支那における天子の、天子としてなすべき一年行事中、もつとも重要な仕事は、天をまつり、

地をまつることである。春には春のまつりがある、禮記には「鸞路に乘りて、蒼龍に駕し、青旂をかゝげ、青衣をきて、蒼玉を服し、麥と羊とを食ふ」とある。春は陽氣の發するところであるから、乘馬も蒼く、青い旗と、青い衣をつけて、青陽に居ることを示すのである。夏には夏のまつりがある。夏は盛德、火にあり、天子みづから三公、九卿、大夫、諸侯を率ゐて、夏を南郊に迎へるのであるが、その行裝は「朱路に乘り、赤馬に駕し、赤旂をかゝげ、朱衣をきて、赤玉を服し、菽と鷄とを食ふ」のである。赤馬、朱衣、赤玉など、いかにも、太陽のはげしい夏の光りを表象するところの赤色づくめの裝ひであることが、私には興味ふかく思はれることである。

立秋の日には、同じく天子親から、三公九卿諸侯大夫を帥ゐて、秋を西郊に迎へるのであるが天子は「大路に乘り、黄驪に駕し、黄旂をかゝげ、黄衣を衣て、黄玉を服し、稷と牛とを食ふ」とある。初秋らしい黄色の色彩づくめである。仲秋には白路に駕し、白旂をかゝげ、白衣を衣て白玉を服し、麻と犬とを食ひ」、白露金風の仲秋を思はせる白い色彩を用ゐ、立冬には天子親から、三公九卿大夫を帥ゐて冬を北郊に迎へるのであるが、それには「玄路にのり、鐵驪に駕し、玄旂をかゝげ、黑衣を衣て、黑玉を服し、黍と彘を食う」すべてが冬らしい黑づくめの色彩である

正月は天氣下降し、地氣の上騰する時で、すなはち天地和同し、草木萌動するの季節であるから、農事を布いて、民を教へて五穀の宜しきに從はしめ、樂師に命じて、舞を習ひ、祭典を修めしめるなどのことがあり、春、夏、秋、冬、四季にかけてそれ〴〵の行事がある。

冬は、天氣の上騰し、地氣の下降する時で、いはゆる「天地通ぜず、閉塞して冬を成す」のであるから、一國の政治も、また冬らしく密藏されたる政治となり、城廓を修め、門閭を戒め、鍵閉を修め、管籥を愼み、封彊を固うし、邊彊に備へ、要塞を完うし、關梁を謹み、徯徑を塞ぐ、喪紀を飾のへ、衣裳を辨じ、棺槨の厚薄、墳丘の、大小高卑、厚薄の度、貴賤の等級を審にす」るなどのことが行はる、そして歲末には「天子、來年を天宗に祈り、大に公社及び門閭に禮祠し先祖の五祀を臘す」るのである。

凡そ、かうした儀式、典禮、行事が、そのまゝ古來、支那の朝廷では行はれて來たのであらう中にも天を祀り、地を祭るの行事は、いと嚴肅に行はれて來たと思はれる。そして一般民衆にありては「天」をまつることを許されないが、祖先をまつり、土地の豐饒をまつる祭儀は行はれた。それが「左祖右社」である。すなはち「左」に祖先をまつり、「右」に五穀の神を祀るのである。だから、支那の各縣城、都邑、村落をたづねて、その都城の設計を見る場合に、「左祖右社」の形式に從つて、社廟の位置をほゞ推定することが出來るのである。

支那都城設計は、王城を中心として「面朝後市」をなしてゐる。すなはち王城は南面してゐる朝廷の政治むきの役所は、王城内の南方に位するが、市場は王城の北方にある。蓋し政治は「陽」性のものであるから南面し、市場は「陰」のものであるから、王城外の北方にあるとされる。そして市場の稅收入は、陰性であるところの后宮の掌どるところとなつて居り、これを「面朝後市」とよぶのである。支那のこの都城建設の設計は、古き時代にわが國にも移入されたと思はれるがそれは必らずしも、支那そのまゝの形式で移植されたのではなかつた。少くとも支那における「面朝後市」の制度が、わが國に入つて來る場合むしろ「面朝前市」の形に變つてしまつたかに思はれるのである。藤原京や、平城京の都城設計が、そのまゝ支那の模倣であるかどうかは研究を要するのであらうが、平安京においては、明かに、「面朝前市」の制度になつてゐるものゝごとくである。京都には東寺、西寺があり、東寺の附近には「東の屋」と稱する公設市場があり、西

寺の附近には「西の屋」と稱する公設市場があつた。その東西兩寺とも、王都の前面にあるので
あり、附近に市場があつたとすれば、わが國では「面朝前市」の制度になつてゐたと思はれるの
である。奈良には今日、東大寺があり、西大寺があつて、それに附屬近接して、もし市場があつ
たとすれば、これはヤハリ「面朝前市」の形式になつてゐたのである。かゝる日支文化の交流は
三千年の久しきにわたつて不斷に行はれて來たのであるが、歲月の久しき、支那では古代の文化
形式が、すでに傳承を絶つてしまつてゐるのに、それが日本においては、形を變へて遺されて
るるのであらう。さうした文化的交涉の研究は、もとより今後にまつべきものが多いと思はれる
だが、われ〳〵が、「禮記」の月令第六を讀んで、もつとも興味ぶかく感ずることは、支那の
天子のなすところは、天地を祭祀するところにあり、祭祀に關する儀式典例の備はつてゐること
に驚歎するとゝもに、これらの四季の郊祭には、それ〴〵の政治的行儀の附隨してゐることで
ある。すなはち、祭事と政治とが、緊密に、一致してゐることである。たとへば正月には、正月
の祭典を執行するとともに、伐木を禁止したり、大衆の集合を禁じたり、春は日夜の均分する時
であるから、度量衡を正したり、季春には舟を準備させて、天子始めて舟に乘つて鮪を漁り、そ

れを寢廟に獻じ、「麥のために實を祈つた」りすることなどがある。また春は陽氣の發する時で
あるから、天子は內に內藏するところ德を布き、惠を行ふために、有司に命じて、倉廩を發いて
貧窮者に賜ひ、府庫を開いて、天下を救うなどの行事が行はれるのである。これらを通觀すると
支那もまた祭政一致の國であり、祖先崇拜の國であることが明らかである。もし今日の支那が、
久しく忘れられたる王道國家の道に立ち歸るならば、そこに日本と共通し、共鳴し、共感すると
ころの大道を發見するに難くはないであらう。すなはち支那も、本來、祭政一致の國であり、祖
先崇拜の國であつたのである。從つて支那が、本來の古道に立ち歸つて來るならば、そこにわが
日本とおのづから結びつくべきたましゐの一致がある。いふまでもなく、わが日本は古來、祭政
一致の國柄であり、祖先崇拜の國柄である。從つて支那が、報本反始、王道國家の理想に立ちか
へるならば、皇道國家に立てるわが日本との間に、はじめて大同歸一の結合が成り立つのであら
う。

支那では、民國革命以來三十有餘年、天壇を祭るものがなくなつた。天壇の荒廢は、すなはち
支那國家の荒廢である。三民主義の革命を成就するためには、今日まで過渡的な役割をつとめて

來たのであらうが、三民主義では、支那の國家民生の幸福は充足されないのである。私は、この意味で支那には、天の命を受けたる有德の君子が推されて、「天壇をまつる」ものとして登場するのでなければ、支那の國家建設は行はれないと信ずるものである。

あゝ「天壇をまつるもの」は、果して誰ぞや。

二、天、性、道

茫々、漠々たる無際の廣野に立つて、いとはるかなる蒼穹を仰ぐものは、坐ろに天地の悠久、無邊に、心を打たれざるはないであらう。支那は、國土の廣きが上に、土地は概ね平面的な擴がりをもつて展開してゐるので、目路のつづく限りは、荒漠、はてしなき廣野の觀を呈する。もと〳〵人間が地上に立つて展望し得られる眼界には限りがあつて、一眸の下に集まる視界の範圍は日本にありても、支那にありても同一である筈なのに、支那に行つてみると、特にこれが廣々とした展望の開豁さを感ずるのは、どういうものであらうか。思ふに、これは支那の大地が、平面的であつて、それを遮ぎる丘陵の起伏が少ないために、天空一際のはるかなる彼方まで、展望をほしいまゝにすることが出來るので、それが實際以上にひろ〳〵とした廣さを感ずるのであらうさうした廣野の展望に接するたびに、支那の廣さ、大きさが、特にふかくわれ〳〵の心を打つのである。

中庸には、「天の命、これを性といひ、性に率がう、これを道といふ」とある。こゝにいふ「天」なるものは、單に蒼穹を意味する自然界の天空そのまゝを指してゐるものではないが、しかしながら自然界の天空を離れた全くの抽象的な概念的な「天」でないこともまた明らかであらう支那人が天を仰いで、天命を觀じ、天道を信ずるのは、空虛なる虛空の世界の底に、あをぞら以外に、何ものか、それを實體づける實在世界の存在することを信じてゐたものであらう。南宋の蔡沈は「書集傳序」において、

「二帝三五の治は道に本づく。二帝三王の道は心に本づく。其の心を得ば、すなはち道と治とは、固より得て言ふべし」

といひ、さらに「德といひ、仁といひ、敬といひ、誠といふも、言は殊なりといへども、理はすなはち一なり、この心の妙を明かにする所以にあらざるなし」と論じてゐる。すなはち治は

道に本づき、道は心に本づく。そしてかゝる至妙のはたらきを持つところの「心」なるものは、「天」より出づるとなすのである。

「天をいふに至つては、すなはちその心の自つて出るところを嚴にす」

といふ表現をもつてしてゐるのである。「天をいふは、心の自出を嚴にする」とあるのは、いかにも興味がふかい。こゝではいふところの「天」はもはや「心」と一つであり、「道」と同一である。かゝる至妙なる「心」の自出するところを「天」なりとした。かくしてかれらの嚴肅なる倫理道德の意識は、「天」と相通じ、そこに天の至上命令として、敬虔なる態度をもつてひたすら「天の命」に耳を傾けるのである。すなはち、天命と、人性と、人道とは、こゝに至つて三者一體の關係をもつて儼存すると見た。

支那にありては、「天」は、實に人間道德の最高にして至大なる自出の依據するところである。これをあるひは「上帝」といひ、「昊天」とよび「皇天」とよび、やゝ人格的な具象的な表現形式をかりて云ひ現はされる場合もあるが、しかしながら多くは、たゞ漠然として「天」といふ一字をもつて、敬虔なる感情を表出し盡してゐるのである。尙書堯典には「乃ち、羲和に命じて、欽しんで昊天にしたがひ」とあるのが、「天」に關する文獻の最古のものであらう。同じく「舜典」には、舜が位を受けて帝位に即いた時、「つゝに上帝に類し、六宗を禮し、山川に望し、群神を偏ねくすとある。天地山川を祀つて、類、禮、望なぞ、それ〴〵の祭典をあげたのであるがそこにはじめて「上帝」といふコトバが出て來るのである。さらにこれに次いで、「尙書大禹謨」には

「帥の德、廣運、乃ち聖、乃ち神、乃ち武、乃ち文、皇天眷みて命じて、奄く四海を有て、天下の君となる」

といふ一節がある、こゝに天が「皇天」といふ文字で呼ばれてゐるのを見出すのである。かくのごとく支那の古代では昊天、上帝、皇天などといふコトバによつて、「天」を表現してゐるのであるが、それが、不思議なことには、「天」といふ漠然たる稱呼を用ひはじめる以前に、これに先立つて、すでに昊天、上帝、皇天などといふコトバが先行してゐることである。少くとも文獻上では、「天」といふコトバは、上帝や、昊天や、皇天などよりも、後から生れて來てゐるのである。これは人格的な具象表現がまづ發生して、これが次第に年序を經て、遂に「天」といふ抽

象的な、そしてさらに一般的な觀念として成熟歸結されて來たことを物語るもののごとくである從つて支那における天の觀念や、天命に關する觀念は、太古草蒙時代の原始的發生ではなくして人文發達以後、相當の年處を經た時代の産物であつたと考へられるのである。

これを人文發達の段階からいつても、太古蒙昧の時代における原始民族は、風雨、雷霆、山川草木、禽獸、蟲魚、すべての自然物に、そのまゝ「神」を見た。自然の風物、萬象に人格的な神の存在を見た。從つて支那においても、太古草昧の時代には、「天」を具象的な、人格的な存在形式をもつて崇拜したであらうことは疑うべくもない。これが堯、舜の時代にありては「上帝」となり、「昊天」となり、「皇天」といふがごときコトバとなつて表現せられて來たのであらうこの時代には、「天」はまだ抽象的な自然的現象として認識されるには、人文はあまりに素撲であり、幼稚であつた。從つて支那の古文獻に現はれて來る「天」に關する最初の思想は、自然的な抽象觀念ではなくて、人格的表現をもつた「上帝」思想であつた。堯舜の時代が、まさしくこれであつた。

しかるに堯、舜の時代を過ぎて、次ぎの禹の時代になると、「天」に關する支那の思想は、道德的な、倫理觀念と結びついて。一種の「天命思想」ともいふべき形をとつて現はれて來た。禹が、舜の命をうけて有苗を征するとき、彼は、群后（諸侯）を會して、軍卒に一場の訓示をしたこのコトバにいはく。

「濟々たる有皇の諸君、みな、わが命を聽け、かの蠢たる有苗は、昏迷にして恭しからず、侮慢してみづからを賢なりとし。道に反いて、德を敗るものである。かくの如き情勢をそのまゝにせんか。君子は野にあり、小人、位にあるの矛盾を生じ、民は棄てられて保んせざることにならう。天、これに咎を降す、かるがゆへに予は、汝衆士を率ゐて、命を奉じて、罪を伐つのである、汝、尙くば、乃ち心力を一にして、それよく勳を有て」

禹のこの出師の訓示中に、「天、之に咎を降す」といふ一句がある。これは恐らく、天が、道德的、倫理的な意味をもつて表現された最初のコトバであると思はれる。

この禹の出師の訓示に答へて、「益」なるものがあつて、禹を贊していはく。

「惟、德、天を動かす、遠しとして至らざることなし。滿は損を招き、謙は益を受く、これ乃

はち天道なり」

と、いつてゐる。すなはち、こゝでは、「徳、天を動かす」といひ、滿損謙益は「乃はち道」といふ。いづれも「天」が道徳的、倫理的な意味をもつて、人間に答を與へたり、滿損謙益といふがごとき、功利的な打算的観念をもつて、天道を規範したりする考へ方が、すでに現はれてゐるのである。滿損謙益は、今日でも、支那人の好むで用ゐる日常生活の教訓語であつて、それが二千四百年前に編纂された「尚書」の中に、すでにこの典據をもつてゐることも、私には面白いことに思はれるのである。以上のごとく、「天」が、人間の行動を、その背後から規制するといふがごとき思想は、人類の原始生活の中にも、すでにその萌芽をもつてゐたのではあるが、支那における「天」といふ抽象的な、そして實在的なヒビキをもつたかくのごとき観念が、嚴肅な意義をもつて、人間行動の背後に存在するといふ考へ方は、決して原始的な、太古のものではない。これは支那の文化が、相當な高次的發展段階に到達した時代の所產であるといつてよいであらう

茫々漠々たる無際の廣野に立つて、はるかなる蒼穹を仰いだ時、ことに支那大陸の、渺々無限

の廣野に立つた時、何人も、悠久なる天地の生命に、心を打たれざるはないであらう。支那人の天に關する思想、信仰は、そこから發生した。

しかしながら、天に關する支那の思想は、單純な自然の景觀としての「天」ではない。天体現象の一つとしての日月星晨を宿すところの「天」でもない。それは人性に率がひ、人心に深く根を下し、人道とともにあるところの「天」である。從つてこれは倫理、道徳の根本的に依據するところの敬虔にして、嚴肅な「天」である。それはまた小さき人間の行動を監視して、罪には答を與へ、善には賞美を與へられるところの絶對な「天」である。この限りにおいて、それは最早神とよばるべきものではあるが、支那では、これが完全なる神格として發展しないで、依然として抽象的な「天」をもつて今日にまで及んで來た。これは東洋倫理の根抵的基礎をなすものであつて、實に支那人の思想生活を左右するところの、偉大な宿命觀を生み出す基本的觀念である。

そこで、文献的には、かゝる天に關する支那の思想は、堯舜禹の三代の、最後に屬する禹の時代に來て、始めて發生したであらうと考へられるのである。堯舜の時代には、まだハッキリと、「天」を抽象的な倫理的な純粹觀念に籠ひあげるところまで來てゐなかつたと思はれる。しかる

にこれが禹の時代になると、「天」が一種の純粋道徳理念の依據する根抵として、倫理的實在觀念にまで高められて來た。蓋し、これまでに、天の思想が純化するには、非常に長い歳月を要しその文化的進歩の發展段階が相當なところまで來てゐたことを物語るものなのである。もとより今日の學者は、堯舜禹の三代時代は、まだ傳説時代に屬するのであつて、歴史時代に入つてゐないといひ、堯、舜、禹の禪讓も、後世になつてからつくり上げた傳説であつて、歴史の事實でないと見るのであるから、「天」の思想の發生を、文献的に唐虞三代に求めるのは、甚だ根據に乏しいことになる。しかしながら少くとも、支那最古の文献たる「尚書」の編纂された時代には、モハヤ天に關する思想が、一種の渾然たる思想系列をもつて、その時代に物語られてゐたと考へるのは、決して妥當を失するものではあるまい。從つて尚書の編纂時代、すなはち今から二千四百年前の孔子時代に至つて、天に關する敬虔、純粋な思想が大成されたと見るのは、もつともあぶなげのない所論である。けれども、かうした「天」に關する宿命的な支配觀や、さらに倫理的、宗教的な、無上命法を包含するところの純粋意識をもつた「天」の思想が、一朝一夕で、漢民族を支配的に風靡するといふようなことは考へられないことである。これは幾代、幾十代にわ

たる徐々たる文化の集積、發展にまたなければならない。さうした意味では、支那における「天」の思想の發生起原を、遠く唐虞三代の古へに置いても、決して無理だとは思はれない。

支那の「天」に關する思想は、著るしく抽象的で、概念的ではあつて、しかもその「天」たるや、きはめて倫理的な、道徳的なひゞきをもつて、われ〳〵人類の生活を規範し、左右し、支配するところの最高、至上な實在らしく受け取られてゐるのである。かゝる倫理道徳のよつてもつて依據する最高眞理の「天」は、一轉すれば「神」となるべきものであるが、支那では、これが具体的な人格神として發展しないで、あくまで抽象的な「天」にとゞまつてゐるところに漢民族の特殊の性格があると思はれるのである。しかも甚だ興味ぶかいことは、すでに上來、迷べ來つたように、堯、舜の時代には、昊天とよび、上帝といひ、皇天といひ、やゝ具体的な人格神らしい表現をもつて「天」を稱讃してゐたのが、禹の時代になると、これが全く抽象的な、かつ倫理道徳觀の自出する「天」にまで變形してしまつたことである。すなはち、こゝでは「天」が人格神的觀念から、純粋道徳意識の自出的根元としての「天」にまで發展したのである。漢民族の形

而上學的發展の、いかに古くして、かつ早きかに私は驚かざるを得ないのである。爾來三千年、東洋の倫理、道德は、「天」と離るゝことなく、「天」と共にあつた。中庸における「天の命、これを性といひ、性に率がう、これを道といふ」に至つて、天、性、道の三者は一体一位となつて儒教道德の根幹をなし、それが今日に至るも、いさゝかの搖ぎもなく、變化もないものとなつてしまつた。支那の思想、文化、生活は、すべてこの源泉から滾々として流れ出て來るのである。

三、支那の國家形成理念

「大學」章句の序を讀んで、私は、慨然として支那の國家建設の、甚だ至難にして、支那統一事業の極めて難事なるに想到し、支那が今日のごとき混亂をくりかへしつゝある事實の不可避的運命であることを、つく〴〵と考へざるを得なかつた。「大學章句の序」にいはく。

「蓋し、天の生民を降すより、則ちすでに之に與ふるに、仁義禮智の性を以てせずといふことなし」

さらに轉じて、いはく、

「一も、聰明睿智にして、よく其の性を盡すものゝ、其の間に出づることあれば、則ち天、必らず之に命じて、もつて億兆の君師となし、之をして治めてこれを教へ、もつて其の性に復らしむ」

とある。こゝに支那の恐るべき國家革命の理論がある。禪讓放伐を合理づけるところの易性革命の理論がある。すなはち有德の君子が世に出づるあらば、天は必らず之に命じて、億兆の君師となし、これをして國家を治めしめるのだといふのである、受命の天子は、聰明睿知にして、よくその性を盡すものでなくてはならぬといふ道德的條件はあるにはあるが、これは禪讓、放伐を是認したものであり、易性革命を承認したものであつて、支那の國家が、古來、混亂をくりかへして、統一するところなき理由を、率直にこゝで說明したことにもなるのである。だから、「大學章句序」は引つゞいて、左のごとく叙述せざるを得なかつた。いはく

「此れ伏義、神農、黃帝、堯舜の天に繼ぎ、極を立てし所以にして、而して司徒の職、典樂の官の、由て設けられし所なり」

と、見るべし、伏義、神農、黃帝、堯舜が登極して、天位を繼いだのは聰明睿知であつて、命

を天にうけて、億兆の君師となつたのであり、從つて天子は司徒の職、典樂の官を設けて、人民をしてその性に復らしむべく教育しなければならぬと說くのである。しかしながら、そこに支那國家の運命的な悲哀がある。蕩々たる王道をもつてしても、支那の天子はその世運を萬代に傳へることは出來ぬ。周の衰へるに及んで、賢聖の君おこらず、すなはちこのゆゑに周室は、遂に衰亡せざるを得なかつたのである。時に、孔子のごとき聖人の世に出づることもあつたが、「君師の位を得て、もつてその政教を行うことを得なかつた」。そこで孔子は先王の法を說いて、これを後世に詔げたのが「大學」であるといふのである。從つて孔子が說くところの「先王の道」もその政教も、要するに易性革命の支那思想を承認し、これを倫理づけ、それに道義的說明を加へるにどまなつて、すこしも支那國家の創造、建設を積極的に可能ならしめるものがない。

かくのごとく支那の國家は、德治國である。德あれば興り、德なければ亡びる。從つて有德の君子あれば、立つて受命の天子として民衆に臨むことが許されてゐる。しかるに孔子のごとき賢聖にして、なほかつ君師の地位を得て、政教を行ふことが出來なかつた。そこに矛盾がある。堯、舜、禹の三代は、トニカク有德をもつて有德に傳へて、いはゆる禪讓の美を發揮したが、その後の歷代は、有德をもつて不德の君を放伐することとなつた。「周」はその代表的なものであつた。しかし周室の衰へるに及んでは、もう有德をもつて不德に代るのではなく、不德をもつて不德に代り、有力をもつて無力を伐つことゝなり、どこにもモハヤ「先王の道」は支那に行はれなくなつた。そこに支那立國の悲哀がある。

しかしながら、支那立國の運命的悲哀を、今さら慨いてみても、それはどうすることも出來ない問題である。そこで、われ〳〵は、支那のために謀るに、支那は今日をもつて、過去五千年の歷史を清算して、新たに支那の國家を建設、創成すべき新理想を樹立することである。秦始皇帝が、かつて二千三百年前に、一たび試みて失敗した萬世不易の理想を、今日において立派に建設することである。始皇帝より始めて萬世に至らんとしたところの、かれの理想を、新たに支那において樹立することである。儒教における最高理想であるところの、天、性、道の三位一體觀を貫いて、そこに動きなき王道國家を建設し、一たび建設し終らば、再び動かすべからざる不易の基礎を設定し、發展せしむべきである。

濟南から、津浦線によつて南下すること四時間にして、兗州驛につく。それよりさらに自動車で約一時間にして孔子廟のある曲阜につく。曲阜には、孔子廟があり、孔子が詩、書を講じたといふ杏壇があり、孔宅の古井があり、故宅の壁には、今もなほ書を藏してゐる。その昔、魯の恭王が、その壁中より尚書その他を得たといはれる「魯壁」が、すなはちそれであつて、之はまさしく孔子の宅趾である。孔子逝いて二千四百二十年、今もそこには孔子の嫡流が儼然として、大名のような生活を營むでゐるのである。孔子、世にある時は、天下に道をのべて、しかも道は遂に行はれなかつたけれども、その子孫は數百代ののち、なほ支那において、冥々默々の裡に、ひろく世人の尊敬を集めてゐるのである。まことに祖先の餘德といふべきである。

曲阜城外にある孔子の塋域は「孔子林」とよばれ、廣袤實に五十三萬坪、世界最大の塋林である。孔子の宅跡もさうであるが孔子廟は松、柏、杉その他の老樹古木が亭々として聳えて居り、それらの老樹が鬱々たる並木道をなし、その左右には古建築と、古碑とが林立して、その奥に孔子の墓がある。孔子の歿後、多くの弟子達は、各々本國の異樹を家上に植えて、三年の喪に服したといはれる。それらの記念樹の名殘が、今日の鬱蒼たる樹林をなしたのであらうと思ふと、大聖孔

子は今、なほ生きてあるかのごとき思ひがする。歴代の王朝もこの孔子の墓と、孔家のみには、特別の尊崇を拂つて、これが顯彰につとめて來た。いかなる罪人も、孔家の門内にとびこめば、捕吏も手を下すことが出來ないとされたものである。まことに孔子は、生前、億兆の君師となつて、支那を治めることは出來なかつたが、その君師としての德は、二千四百年後の今日においても、侵すことなき尊信をもつて、子孫の上に及び、それが儼然、世の風塵の外に立つてゐるのである。もし、天が必らず有德の君子に命を下して 天下國家を治めしめることが事實であり、それが支那における王道國家建設の理想であるならば、孔家のごときは、たしかに天の命を受くべき資格をもつたものでなくてはならぬ。さうした夢のごとき空想を描いてみても、今日の支那には、さうした理想の實現される見込みはあるまいが、しかしながら支那が、眞に王道國家建設の理想を生かし、それを中心として、積極的な近代國家を建造するためには、この根本にまで溯つて、その道を正さねばならぬのではないか、孔子以來、二千五百年、一系不斷の血統をもつて連綿として今日まで流れて來たこの事實は何としても尊い。孔家をもつて支那の國家を建設するといふことには、今日の支那にとりては、いさゝか大聲俚耳に入らずの感もあらうが、理想としては、何人も異論はあるまいと思はれる。

四。孔子と日本

論語公冶長第五に、

「子曰く、道行はれず、桴に乘つて海に浮ばむに、我に從うものは、それ由か」。

といふ一節がある。これは孔子が、支那にありて、道の行はれざるを慨き、桴に乘つて、海に浮むで、海外に出たいといふ考へのあつたことを示すものである。この場合、孔子につき從ふものは、勇氣のある子路(由)だらうといつたのである。孔子は海に浮むで、果してどこの國へ渡らうと目ざしてゐたのであらうか。私は、これを、わが日本であると考へたい。東海に君子國があつて、その民の禮義に敦きを聞き傳へて、竊かに日本に渡來したいと考へてゐたのであらう。論語子罕第九に、

「子、九夷に居らんと欲す、あるひと曰く、陋なり、これを如何、子曰く、君子これに居る、何の陋かこれあらん」。

と、辨明これ努めてゐるのである。

「漢書地理志」の樂浪郡の項下には、論語の右の二節を綜合して、左のごとき記述を試みてゐるのである。すなはち

「東夷は天性、柔順にして、三方之外に異なる。故に孔子は道の行はれざるを悼み、海に桴を設けて、九夷に居らんと欲す、以あるなり」。

とある。茲に「三方之外」とは何か、「漢書地理志」は顏師古の說を注釋として採用してゐる。

「師古曰く、三方とは南西北をいふなり」と。從つて「三方之外」とは東を指してゐるのである。孔子が東夷は、南、西、北のごとき地方とは違つて、天性柔順なることを說いてゐるのである。孔子が桴を浮べて、九夷に居らんと欲したのは、明かにわが日本を指してゐるもののごとくである「漢書」の記者班固は、樂浪郡の項下において、以上のごとく、東夷の說明を試みた直後、

「夫、樂浪海中に倭人あり、分れて百餘國をなす。歲時をもつて來り獻見す」

といふ例の有名な日本に關する記事をもつて、日本を說いてゐるのである。

孔子の時代に、わが日本が、いかに孔子の心に映じてゐたか。もとよりそれをハッキリと認知すべき何物もない。たが、すでに論語には上に述べたように、二ケ所まで、海を渡つて日本にや

つて來たかつたことを暗示してゐるのである。しかも論語子罕第九には、可なり強い意思をもつて、「子、九夷に居らんと欲す」と述べられてゐる。それは單なる一朝一夕の思念ではなく、始終、孔子の心から離れ得ない中心の欲望であつたごとくに思はれるのである。それを孔子は、折にふれて門人にも語り、周圍にも話してゐたものと思はれる。

もちろん、九夷は、東方各地の未開住民に關する總稱である。孔子の故郷曲阜から見て、その東方に當る山東半島の海角や、島嶼に居住する住民を、一般に東夷とよんでゐたものであらう、尙書「禹貢」には「島夷皮服」とある。この島夷は、冀州方面で、今日の河北省のある地方の住民をさしたものであり、「萊夷作牧」とあるのは山東省東部、今日の青島附近の東夷をさしたものであり、徐州附近には、淮河に沿うて『淮夷』があり、楊子江北岸の楊州地方には「島夷卉服」といはれる島夷があつたもの〳〵ごとくである。いづれも支那の中央部からは、東方に當る支那內地の住民を呼んでゐるので、それら東方の文化が中央のごとく進歩してゐなかつた地方を一般には「島夷」だの。「萊夷」だの、「淮夷」だのとよんでゐたものらしい。だから孔子が「九夷に居らんと欲す」といつた九夷を以て、直ちにわが「日本」に措定することは、もとより多少、行き過ぎた感じのないでもないが。しかしながら東夷の觀念は、禹貢時代から、次第に時代を下るに從つて、地理的には擴大、延長せられて、孔子の時代には支那內部の東夷觀が、さらに朝鮮半島にものび、ひいてわが日本にまで延長されて居たであらうと推測することは、必らずしも不當であるとは思はれぬね。ことに支那には「道の行はれぬ」を慨いて、この道の行はるべき地を求めて、三方の外にある東方の君子國たるわが日本に憧憬したのは、切實なる孔子の心情としては、ありうべき當然のことであつたと考へられるのである。しかしながら孔子は遂に桴に乘り、海に浮んで、あこがれの日本に渡來することは出來なかつた。そして支那は、今もなほ「道は行はれず」、支那自身のもつ國家形成の根本理念は成熟するに至らずして、徒らに動搖、混亂をくりかへしてゐるのである。今において、支那は、わが日本の雄大にして、崇嚴なる國家形成の理念に觸れて、みづからの國家生命を復活、蘇生せしむべき時に來てゐると思はれる。まことに偉大なる生命は、他の眠れる生命をよびさますのである。支那はまさに、みづからの眠れる國家的生命を、わが日本によりてよびさますべき時に來てゐる。これは實に、五千年にわたる支那の歷史的生命を革めるべき時代に立つてゐることを意味

する。支那における王道國家の建設は、わが日本帝國の肇國的理想に觸れ、それに感應し、それに刺激されたとき、始めてほんとうの芽生を見ることであらう。私がこゝで孔子を說き、孔家の存在をものがたり、孔子の日本憧憬を述べた所以のものは、支那國家の創設、建造に關する根本理念の確立に一種の示唆を與へたいために外ならない。

五、社會から國家へ

漢民族が、黃河の中邊に群居して、所在に部落をつくり、いはゆる萬邦を形成してゐたのは、隨分、古い太古の時代のことで、今から五千年以前のことであらうと考へられてゐる。三十餘年前北京の西南三十キロ、周口店で發見された北京人骨は今から七萬年前のものであるといはれ、その人骨の發見された洞窟には火に焦げた燒土が殘つてゐるので、すでにその北京人骨は火食生活をやつてゐたことが明らかにされた。しかしそれが今日の漢民族の祖先であつたか、あるひは漢民族移住以前の先住民族であつたかは明らかでない。一般西洋の支那學者は、漢民族をもつて、支那の西北方、黃河の上流から、次第に支那內地に入つて來たものだと說き、漢民族の故鄕が、トルコ、イラン、裏海周邊にあつたと考へたがるのである。支那の古代傳說が、つねに支那西北方と關係があり、西王母の傳說にしても、女媧氏の「天柱挫け、地維拆け」五色の土を練つて修繕したといふ傳說にしても、つねに西北地方と結ばれてゐるので、漢民族の起原を支那の西北にありとするの說は、まんざら、根據のないわけではないが、それを今日、立證すべき學問的手がかりは、きはめて稀薄である。黃帝時代にすでに種々の氏姓、系統を異にした漢民族が、部落社會を形成しゐたのを、「百姓」とよび、「萬邦」とよんだのであらうが、その百姓の百を「バク」と讀んで、それをバクトリア、バクダットなどと關聯せしめて、「バク族」なるものがあり、それが中央アジアやイランなどから支那へ移住して來たのだと說くがごときは、西洋人一流の牽强附會に過ぎないであらう。たゞ今日において確かに云ひ得るところは、支那において最初の人文生活の始まつた時には、そこに今日の漢民族が、すでに黃河の中邊に定住してゐたといふ事實だけである。それがすでに「百姓」をなして、「萬邦」をなしてゐたといふ事實だけである。もとよりそこにはこれを統一、支配するところの支配者の統一的理念かなく、だゝ群居、對立のまゝの部落が無數に存在してゐたといふ事實だけである。尙書の堯典に

「四表に光被し、上下に格る、克く俊德を明かにして、以て九族を親んず、九族既に睦うして百姓を平章にす、百姓昭明にして萬邦を協和す」

といふ一節がある。これは堯の帝德を禮讃したコトバであるが、支那の帝王は、こゝにあるように、まづ九族を安んずることから始めて、百姓、萬邦の協和に至ることを明かにしたものであるそこには帝王の一族の安定を謀ることを中心とし、その德が次第に百姓および萬邦に及んでゆくことを理想とした。これはわが國のごとき君民一体觀念を以てしては、とうてい理解し得られないところである。支那の國家形式の歷史はかくして本來、對立的で、分散的で、しつくりと統合しないことを物語る。堯のごとき支那第一の聖君にして、すでにかくのごとくである。それは支那が統一國家としての理想を、かつてもたない國柄であるといへるであらう。

かくのごとく、支那は、「百姓、萬邦」の群落的存在から、その國家的生活が始められた。すなはち百姓中の有力なものが次第に大きくなり、萬邦中の强大なるものが、その他の弱少部落を支配するようになつて來た。これはわが國におけるがごとき君臣一家の關係ではなく、百姓、萬邦の對立の中から競爭に打ち勝つて支配者的優位の地位につくものが生れて來た。從つて有力をもつて無力を併合して、征服、被征服の關係で、支那を治めて來たのであらうが、それを繰りかへしてゐるうちに、さうした權力的、强力的手段のみを以てしては、安全に天下を保持していくことが困難となり、次第に有德をもつて、有德に讓るといふ禪讓の方法が發見されたのであらう。從つて黃帝から堯舜の時代に至る間、幾多の激烈な競爭を潛つて來て、つゐに德治立國主義ともいふべき倫理的な性格が、支那國家に生れて來たのだと思はれる。

けれども、漢民族のいはゆる百姓、萬邦に屬する被支配階級の側では、さうした國家生活の中に、必らずしも渾然として融けこむで行けないものをもつてゐた。それがまづ一身一家を中心とする家族的社會の建設を、サキにして、九族を安んずることとなつた。堯典にいふところの九族親睦主義が、部落社會存立の根本要件として發達しつゝあつたからである。堯、舜、禹、湯、文武、周公のごとき聖王、聖人が出て、しきりに德治的支配の立場から、倫理主義的國家建設にいそしむだけれども、歷代多數の君主は、必ずしも、倫理的な德治主義にのみ忠實ではなかつた。自己の佚樂のために、人民を犧牲にし、百姓を誅求する君主が多かつた。從つて一般民衆は、進むで國家生活の中に自己を融け込ませることに協力するよりも、むしろ國家生活から離れて、一

家、一族を中心とする部落社會の中に、自己保存の安定を希望した。これが支那社會の現實である。かうして支那は五千年の歴史を通じて、ます〳〵統一國家形成の理想から離れて、ます〳〵自己保存の部落社會を維持することにのみ、支那民衆の努力は傾注されたのである。これが今日の支那である。

およそ漢民族ほど、國家といふものに對して無關心であり、政治といふものに對して、消極的な態度をとる民族は珍らしい。國家も、政治も、彼等の生活には、何等の關係がないばかりか、むしろこれらをもつて、止むを得ざる社會の存在としか考へてゐない。從つて彼等民衆の政治に對する希望は、消極的なものであつて、たゞ善政を布いて貰ひたいといふに盡きるのである。彼等のいふ「善政」とは、「安居樂業」である。安居樂業のためには、政府は民衆に成るべく厄介をかけないようにして貰ひたいといふ消極的な希望をしかもつてゐない。すなはち租稅の輕減が何よりも彼等にとつての善政なのである。かうした國家生活に對する消極的な觀念は、一面に、支那の家族主義をます〳〵鞏固にし、部落社會の結合をます〳〵發展せしめ、そこに血緣關係と

地緣關係との握手、提携による地域主義的な同族社會が發生していつた。從つて支那は、國家に先立つて社會が存在し、また國家の發生したのちにおいても、社會が健全に國家の外において發展をつづけ、政治に無關係で、支那社會が存在していつたのである。近世になつて、西洋の支那に對する經濟的、政治的壓迫が加はり、これが次第に強化されていくに從つて、支那にも國民主義による國家統一運動が發生し、これが民國革命となつて結實し、民族主義的統一の機運は、漸次、濃厚になりつゝあつたのであるが、しかも舊來の支那社會は、これらに關係なく、堅實に維持されつゝあつたのである。從つて支那事變によつて、あれだけ重慶政府が、わが日本軍に叩きつけられたけれども、支那社會はこの戰亂の渦中にあつて、自己の存在を維持することが出來たそこに支那社會の特殊な强靱性がある。これは支那古來の百姓、萬邦主義がそのまゝ發展して、群小部落をなし、それが自立、自存の强固な社會をなしてゐるので、全体の支那國家が、弱小、微弱であつても、それを支えていく力が、社會の中に深く殘されてゐることを意味するのである支那の社會はてうど、船の構造と同じく、龍骨を中心として、左右に隔壁をもつて小室を區劃してゐるので、海水が一部に侵入しても、全體の沈沒を免がれるように設計されてゐるのである。

すなはち國家としては脆弱ではあるが、社會としては非常に堅實に構造されてゐるのである。かゝる支那社會の堅實性が、また、そのための故に、支那國家の鞏固な統一的形成を、この内部において妨げつゝあることを見逃してはならぬ。そこに支那の現實がある。この現實は、古來から今日に至るまで、いかなる支那の帝王にも、完全に克服することは出來なかつた。われらは、こゝに「天壇を祭るもの」の果して唯なるやを論じ、支那の「天、性、道」の根本理念を說明し、あるひは儒教の王道國家論と、それを支那に確立せしめた聖人孔子と、孔家一門の存在とを說いて、支那國家の健全なる統一的形成に、一種の示唆を與へることに努力して來たのではあるが、果して、支那に、さような統一國家が建設されるであらうか、否かについては、こゝに私は、確信をもつて斷言することを躊躇せざるを得ないのである。それは支那は社會であつて、國家ではないからである。支那は自己統一的國家を形成するの方向に進むよりもそれに先き立つてすでに堅實な社會をもつてゐるからである。

かゝる堅實なる支那社會は、五千年の歷史の動搖、混亂を潛つて、ます〳〵自立、自存の存在を確實にして來たのである。從つて支那はこの支那社會を基礎として、その上に支那國家を建設

すべきであつて、支那社會を崩壞、分散せしめて、その上に支那國家を建設すべきではない。このこともまた自明の道理である。もし支那が、戰亂の結果、共產主義化して、堅實な支那社會が根本的に崩壞するがごとき事體が生じたとすれば、それは支那社會の滅亡と同時に、支那國家の永遠の滅亡となるのである。これを私は、中心から恐れるものである。この意味で、支那における防共の問題は、きはめて重要な問題なのである。東亞共榮圈の確立といひ、東亞新秩序の建設といひ、わが日本の指導的精神と、その方向は、きはめて明瞭であつて、現に皇軍の占據地域における支那社會の自立、自存的經營に全力をあげてゐるのは、支那社會の健全性を保持するために外ならない。これを基礎として、これを足場として、强大なる支那の國家統一を完成しなければならぬとする努力が、わが國において爲されてゐるのである。從つてたとひ過去から現在へかけて支那は「社會であつて、國家でない」とする傾向があつたとしても、新らしく更生すべき支那は社會であるとともに、國家であらねばならないのである。わが國が南京における國民政府の健全なる育成、發展に、希望をかけてゐるのは、そのためである。

もとより、南京の國民政府は、その前途に多くの困難をもつてゐるであらう。しかしながら、

この困難は、あくまで克服されねばならない。支那は今實に五千年の歴史を、根本的に革めるべき時に來てゐるのだ。日本も、支那も、一大勇猛心を奮ひ起して、新たなる支那國家の建設を成就し、完遂しなければならない。

揚子江

滅びるものと、滅ざるびものと二つを、上海に來て眺めてゐる。成長するものと、沒落するものとの二つを、こゝで凝視してゐる。廢墟の戰場から、何が生れるであらうか。壯大な、華麗な英佛租界の繁榮が、いつまで續くであらうが。（昭和一四、一、二九　上海にて）

揚子江デルタ

南京を頂點として、杭州、上海の二邊三角形の地域は、いふところの『揚子江デルタ』である私はその地域を普通の觀光客のごとく、あはただしく、平凡に見て廻つた。その間、私にはとり立てて、感慨といふべきほどのものはなかつた。ただ淡々として歸つて來た。もし强ひてこの老

記者の感想を求められるならば、それは前文にかゝげた友人へのハガキの、短い文句をもつて答へよう。

上海は、平凡な表現ではあるが近代支那の縮圖といふべきであらう。

北京や、南京は、支那的性格のあるものを代表する大都市には違ひない。しかしそれは上海のごとく、近代支那の縮圖とはいへない。もとより南京は、北京と同じく、一つの古典的な美しさをもつた都會である。しかし南京の美しさは、北京のそれとは違つた美しさを有つてゐる。南京は山と水との美しさに、歴史的な文化の匂ひを加へた都會であり、北京は平野の中に、古い歴史と、古い林樹の豊富さで知られた都會である。

山と水との美しさは、管に、南京ばかりの特有ではない。杭州も蘇州ですらも、山と水との美しさをもつてをり、ことに豊かな、變化に富んだ水の趣きに活かされた街である。いふところの揚子江デルタの地域一帶は、長江の濁流が生んだ水の都なのである。

しかるにたゞ、上海のみは、廣々とした平野のはてに何の變化もなく、何の美しさもなく、揚子江と、黄浦江との二つの大きな濁流にとりかこまれ、それを縦横に貫ぬく大小のクリークの中にごたごたとこみあつてゐる都會である。上海には決して自然の風光美といふものはない。たゞ人間の努力で積み重ねられた石と、煉瓦の、幾何學的な構造美があるばかりである。

とにかく、一千三百マイルの長江が悠々として日夜、不斷に流れ來り流れ去つたそのアトに南京が生れ、蘇州が生れ、杭州が生れ、上海が生れたのである。そしてこの恐ろしく長い長江の濁流は、今も無限の泥土を、はげしい勢ひで、日夜支那海に押し流しつゝあるのである。

中部支那の領土は、この揚子江の水流にすり減らされて、日々夜々、粉末となり、汚泥となつて、その國土の一部が支那海に向つて流れつゝあるのである。

揚子江の海に向つて放出する泥土は、もとより人間の想像を超えてゐる。しかしそれを數字的に算出することに興味をもつたジョン・リットルは、漢口における沙泥量を、一ケ年五十億立方フイトと推定したものである。その半分の二十五億立方フイトが、途中の河床に沈澱し、のこりの二十五億立方フイルが海中に放流されるものと假定すれば揚子江の江口には、毎年廣サ一平方

マイル、高サ九十フイトの泥沙塔を形成するであらうといふのである。これはもとより想像である。ごこまでそれが揚子江にとりて實際であるかは分らない。

さらにもし、ハスデン・タイムスによれば、彼は、蕪湖における水量、水速、泥沙の流下量を測定して、一ケ年に揚子江が江口附近に排出する泥沙量は、四百平方マイルの面積を、一フイトの厚さに數き詰めることができると計算してゐるのである。

とにかく四百平方マイルの面積を、毎年一フイトづゝの厚さで、支那海を埋めていくといつてもよし、また一平方マイルの面積を、毎年九十フイトづゝの高さで泥砂の塔を築き上げていくといつてもよい。

いづれにしても揚子江の押流す流砂が、支那海を日夜、不斷に埋立てるための干拓作業にいそしむでゐるといふ事實には變りがない。

上海から南京までの鐵路は百九十五マイルだから、ザット二百マイルと考へてよい。その二百マイルを急行列車で走つて六時間を要するのであるが、ハスデン・タイムスの計算によれば、上

海、南京間の距離に二倍するところの四百マイル平方の海中に、年々一フイトづゝの流砂を押流すといふのである。だから四百マイルの泥海に、もし急行列車を走らせるならば、十二時間を要するわけである。

揚子江の大きさは、この數字によつても想像されるであらう。

長江の無言の意義

だが、私たちの太洋丸に乘つた經驗によれば、上海の郵船碼頭を午前八時に解纜して、十八ノットの速力で走つて、午後三時ごろ、やつと黄濁した泥海からのがれることができた。そして午後四時になると、さゝ濁りにうすくなつた海水が、全く本來の碧色に歸つた。

すなはち黄色から、褐色に、そして綠色になるまでには、船の速度にして、前後八時間を要した。すなはち一時間十八ノットの速力で、八時間を走れば、百二十四マイルである。揚子江の押し流す泥土の海は要するに百二十四マイル平方の範圍でしかない。だからハスデン・タイムスが四百マイル平方に一フイトの厚さで、泥土を押し流してゐるといふのは、一つの假定された數字

上の計算であつて、必ずしも事實ではない。揚子江の流泥沙は、もつと多いかも知れないし、もつと少ないかも知れない。

しかしながら、揚子江の押し流す泥沙は、次第に支那海を埋めて舟山列島を陸つゞきに連接してしまふのは、あまり遠い將來のことではあるまい。そして、幾萬、幾十萬年の後には支那大陸は次第に海中にのびて、日本と陸つゞきになつてしまふであらう。

揚子江は默々として、新らしい支那の國土建設の工作を支那海に向つてつゞけてゐるのである。そしてこれは結局、支那が日本と一つになるための工作だといつてよい。

今、われ〳〵日本民族は、怒濤の勢ひをもつて、東から西へ向つて、大陸發展のいとなみをふみ出したばかりであるが、支那はその長大な揚子江の水流をもつて、支那大陸を日本にまで延長しようとする自然のいとなみをつゞけてゐるのである。これは人間の想像を超越したところの、大きな自然の埋立工事であり、千拓作業なのである。これが無始以來、揚子江の負うてゐる自然の運命なのではなからうか。

揚子江の海中に放出する泥沙が支那海を埋めつして、日本と支那とが陸つゞきで接觸することになるであらうことは、地理學的に實現される確實な事實である。しかし、それがこゝ百年や、千年や、一萬年の歳月で實現される見込みのないことも事實である。

しかるに私は上海から神戸へ歸る太洋丸の船上で、泥土に濁された泥海を走りながら、やがてこの支那海が干上つてしまつて、陸上になるであらう日のことを想像した。これは實に人間ばなれのした愉快な想像である。しかしそれは想像であつて、空想ではない。この想像は、幾萬年かの後には必ず現實するに間違ひのない事實なのだ。その日には私たちは、この支那海を船で航行する代りに、急行列車の窓から移りいく沿道の美しい風光を、あかず眺めながら旅行することであらう。至るところにクリークがあり、水流があり湖水が湛へられ、帆船が走るなどてうご今日、われらが南京や、杭州や、蘇州あたりの風景を美しいと賞でるやうに、その日の支那海はさらに大きな揚子江デルタの豐饒な土地となつてゐるであらう。

そしてその時代には、上海は、モハヤ揚子江口に近い港ではなくなつて、今日の漢口のやうにずつと何百マイルも遠い奥地の、不便なクラシカルな都會になつてゐるであらう。

揚子江は、日々夜々、不斷に東流して、恐ろしく多量の泥土を支那海に吐きつゞけてゐる。これは支那海を埋めつくして、陸地つゞきで日本と接觸しようとする長江の無言の意思なのである。

黄河か東流して黄海に注ぎ、揚子江が東流して支那海を黄いろい泥海となし、支那の河流がすべて東流することを原則とすることは單なる一つの自然地理學的現象に過ぎないであらう。けれども、それらの自然地理學的現象の變化とともに、そこには人文地理學的な變化が伴うて生起することを忘れてはならない。

すなはち、そこには自然現象の變化に伴ふ人文地理學的な變化と影響とがある。これはまさしく自然の儼然たる意思である。私は、それをこゝでは『長江の無言の意思』とよびたい。

『長江の無言の意思』なるものが、どんな姿で、その結果を事實の上に表現するであらうかは想像することができぬ。しかし、支那の新らしい國土が、支那海に發展して、日本と一つにならうとするうごきの方向をとりつゝあることだけは事實である。

かゝる『長江の無言の意思』なるものが、現在、支那人によりて大きな反撥をうけてゐる。自

然の意思と、人類の意思とが、反撥し對立し、抗爭するところに人類歴史の悲劇が發生する。支那事變はこの悲劇の發生に外ならぬ。

沒落する繁榮

長江の無言の意思と、それに對する支那側の甲斐なき人間的反撥それが今度の支那事變となつた。これは大きくいへば、人類歴史の避け難い悲劇であり、また直接には上海といふ都會のもつ近代支那の破綻でもある。

その破綻が、中支方面では昭和十三年八月十三日にバクハツし、八月二十三日にわが皇軍の敵前上陸によつて、いよ〳〵運命的なものとなつた。

私が『滅びるものと、滅びざるもの』との二つを上海において、交々凝視してきたといひ『成長するものと、沒落するもの』との二つの對照を、つく〴〵と深く考へ味はされてきたといふのは、歴史のこの悲劇に對する總評なのである。

しからば、滅びるものとは何か、滅びざるものとは何か。成長するものと、沒落するものとが

どんな姿で、上海に展開されてゐるのであらうか。あさましい廢墟の戰場から、何が生れるのであらうか。あらうか壯大華麗をきはめた英佛租界の生活が、いつまでその繁榮をもち續けるのであらうか。私は上海において何を悲觀し、何を樂觀したであらうか。

私は默々として流れる長江の濁流に、無言の意思の流れてゐることを感じながらも、一方においては、私は眼前に出頭し、沒頭する小さき人間的意思と、勢力とがお互ひにチグハグな形をもつて、不斷に錯綜してゐる狀態を痛ましい心で眺めて來た。

要するに、近代支那のもつ複雜な性格は遺憾なく上海に表はれてゐると私には思はれる。

私たちは、北京や、南京を見て歩いても、決して上海におけるやうな混迷な、複雜さを發見することはない。

上海には微塵も、支那らしい本來の落ちつきがない。たゞ激しい近代的な都市生活の競爭が、物質萬能、黃金萬能のすがたで、すべてを支配してゐるかに見えるのである。これは上海が、嚴密の意味において、支那であつて支那ではないからである。

賭博と、富籤と、ダンスと賣淫との上海。競馬と、ハイアライと犬の競走（今はない）と、ノミの競技の上海（ノミを訓練して、それの競爭するのを、蟲めがねで覗きこむといふ遊び）白晝强盜と殺人との不斷にくりかへされてゐる上海。人力車夫が多勢の勢ひでいつでも追剝ぎとなつて乘客をホールド・アップさせる上海。治安がなく安定らしく見えて不安の底にある上海。さうした惡魔の都會をゆつたりと抱きかゝへて、花やかな豪華な生活をつゞけてゐる共同租界と佛租界をもつた上海。それは濁流滔々たる黃浦江のごとく、揚子江のごとく、まことに底の知れない無氣味な存在である。これが輝やく上海の姿である。

自由、享樂、官能のあらゆる人間的欲望が、何等の妨げられるところなく、自恣放縱のまゝで展開され、それが爛熟し、廢亂して、とゞまるところを知らぬ姿が、上海なのである。それがおよそ上海の文化なるものなのである。これは骸骨が錦を裝ふて亂舞するにも等しい、あさましい光景ではないか。

さうした『魔都上海』に、一昨年八月十三日の事件が起り、八・一三のサンタシたる事變が發生した。これは上海の運命にとつて、早晩發生すべかりしものが發生したとみるべきであらう。けれども、靡亂したる上海の心臟は、まだこの事件の意義を正しく理解してゐないもの、やう

である。上海の壯大な支那街が戰亂の劫火に燒き滅ぼされ、炸裂する無數の砲彈に、それらの石造建築は骸骨のみをとゞめて、骨と皮とのまゝで、死の行列の如く並むでゐるにもかゝはらず、何ゆゑにかかる破壞が發生しなければならなかつたかの認識や、省察や、反省が、かつて一度も彼らによつて試みられたことがないのである。

人間的な理性と、その理性にともなふ省察の麻痺してしまつた上海は、今も、事變發生以前のままの生活を、そのまゝ持續し、躍進させて行かうと努力してゐるのである。かうした繁榮が、果していつまで續くであらうか。結局舊英租界、フランス租界を根據として繁榮しつゝある半植民地的搾取形態の國際都市なるものが、やがて沒落すべき運命にあることは明かな事實であらう彼らの繁榮には、モウ弔鐘がなり渡つてゐるのである。いふところの蘇州河の河向ふの繁華はひつきよう、永遠性なき沒落前の、一瞬の花やかさである。

うす汚れた群衆

私の上海に行つたころは、てうど舊正月前の、花やかな賣り出しのシーズンであつた。

街は無數の夥しい人間が、もりあがるように雜踏した。その人混みの混雜さは、東京の銀座通り、大阪の道頓堀筋、名古屋の廣小路などの、日本的な混雜さに幾倍する幅の廣さと、奥行きの深さをもつて密集してゐる。

舊英租界。フランス租界など、日本人がいはゆる『河向ふ』といつてゐるそれら租界地には、三百五十萬乃至四百萬の人間が、人の流れをなして動き、流れ、淀み、溢れつゝ、渦巻いてゐるのである。

何等のシゴトをもたぬ、何の用事もなささうな、見すぼらしい貧乏臭い無數の游閑人が、たゞ散歩するための目的のみをもつて、人の流れを泳いでゐるように見える。

それはてうど揚子江の濁流が、すばらしい幅さと、深さとで流れてゐるように、この街は、人間の濁流が、はて知らぬ深さと、幅さとで、悠々として流れてゐるのである。

揚子江の濁流が、一切の醜惡なるものを隱して、たゞ黃一色の泥土をもつて流れてゐるように上流の街は、どろ〳〵の泥土ににごつた人間の大き流れが、一切の人間的醜惡なるものを押隱し

て、悠然として流れてゐるのである。

これはおよそ無氣味きはまる人間の流れなのである。人、人、人をもつて街頭を埋めつくしてゐるこの人の流れは、すべて一樣に、うすよごれた支那服と、着古した洋服とに包まれてゐる有樣は、まさに古着屋の行列そのものである。しかもこの古着をまとつた支那人は、間のぬけた遲鈍な神經を顏面一杯に擴げたうすのろい風貌の中に、ふて〳〵しい太い、無關心さと、殘忍さといつた愚痴の獰猛さの相貌を湛へながら、默々として街頭に混雜してゐる。

かゝる『乞食の祭禮』ともいふべき、うすよごれた人間の巨大なる群集をもつた上海をみてゐるとハツラツとした明朗な人間の社會といふものを少しも感ずることができない。

上海の三百五十萬乃至四百萬といふ支那人が、すべてが難民ではあるまい。すべてが貧乏人ばかりではあるまい。すべてが乞食と、泥棒ばかりではあるまい。

しかしながら、街上に群集する人々は、みんなうすよごれてゐる。彼等のポケットに所持する小額紙幣が、もみくちやにされた、ぼろぼろの紙幣であるように、彼等自身も、もみくちやにされた、ぼろぼろの屑人形のようである。

私はさつぱりとした、氣持のよささうな身裝をした人間を、かつて一度も街上では發見しなかつた。すべてが乞食の祭禮であり、乞食の行列であつた。

街頭では、乞食の行列のようなうすよごれた、きたない人間の群でありながら、それが一步、明るい家の中の電燈の下では、彼等は見ちがへるように美しく、光り輝いて來るのである。

そこでは、人生が眞に樂しい生活であるように見える。街頭における重苦しい、憂鬱な、陰慘な群集に引きかへて、家の中における彼等は、みんなが金もちらしく、裕福さうに見える。およそ街頭を流れる群集と、店內に吸ひこまれていく群集とは、明かに異なつた二つの人種の對照であるかに見えるのである。

そこで結局、金のないものは、たゞ街頭を散步するだけの享樂で我慢し、少しく金のあるものは、デパートに入り、戲場に入り、飯店に入り、買ひものをするがごとく、買ひものをせざるがごとく、たゞ店內を散步することを享樂するのであらう。そして彼ら支那人は、一切が感覺上の享樂生活に盡きてゐる。そのほかに彼らの人生はない。

南京路の大通りは、東京の銀座、名古屋の廣小路であるが、そこに軒をならべる堂々たる百貨店の大建築には、街頭からなだれこむ一群の『店內散步享樂者』の流れがある。

その一つの新々公司といふデパートの四階には戲場があり、五階にはダンスホールがあり、六階はホテルである。いづれも滿員。ただし六階のホテルは、つれこみ專門のホテルで、それでなければデパートのホテルは經營ができぬといはれる。上海らしい光景ではないか。そしてまた、あくまで支那らしい生活ではないか。

上海郊外の戰場

支那といふ國土は、たゞの旅行者に過ぎない私たちの眼には、無限に連續するところの、はてしを知らぬ農地の展開であるかにみえる。

藪のある小さな村落、土饅頭の堆土をなした墓地の無數の起伏、それを包んで、茫々として無際限にひろがるよく耕された豐饒な農地。そこには麥の芽が、もう一、二寸にのび、大豆の青い葉が、まだ葉をもたぬ楊柳が、針のやうに細い枯枝をひ

ろげ、その間にクリークが應接に遑まなく泥水を湛へてをり、小舟が趣きのある風景でそれらの村から村を漕ぎわたるといつた景色である。

もし三、四月ごろの、楊柳の若葉がみどりに煙り、桃の花がそこ、の離落に咲き出で、には とりが高い藁塚の間に鳴き、水牛と犬ころとが、廣いそれらの農地を走りまわつてゐるころにでも、このあたりを眺めたならば、いかに美しく平和な景色であらうか。

さうした風景が、大上海をとりまく郊外から、ずつと南京、杭州まで、揚子江デルタを點綴してゐるのである。

これは凡そ、魔都上海といふ巨大な怪物都市の中では、想像することもできない、靜かな平和な光景である。そこに支那農村社會の實景がある。

私は、早春の、風のない、日光の溫かい日を選むで、上海郊外の、さうした平和な農村部落をたづねて、そこはかとなく戰跡を見學した。できるだけ上海戰の面影を偲びたいといふ氣持ちでそれらの廣々とした郊外を歩いたのである。だがしかし、そこにはもう一昨年の、あのありし日のサンタンたる戰場の姿は、ごこにも發見されなかつた。それほどもう戰場は、全く整理されて

もとの靜かな平和な郊外に歸りつゝあるのである。

白い綿雲が、幾重にも層々として揚子江上に簇がつてゐる。その遠い彼方のはてから、太陽はさん〳〵として、柔かい春の光りを投げかけてゐる。枯草の芝生。枯葦の切りとられた濕地の沼土露頭の墓場、壞れた白壁に黑い煉瓦の家々。それを蔽ふように、高く天空に直立する枯れた樹立の森。それらを、まつすぐに突き切つて、坦々たる鋪裝された大道が、上海から郊外の村々を繋いでゐるのである。

このわたりの沿道の一木、一草ごとに、こゝに傷ついた幾千、幾萬の、尊い勇士の、日日の激戰苦鬪のアトが、こゝに戰ひ、こゝに倒れ、これわが忠勇なる戰士の戰ひの跡ならぬはない。この靜かに默々として大地に展開されてゐるのである。

偉大なる揚子江のつくつたデルタの上に、これらの大地はしつかりとその存在を保つてゐる。その上に人間が生れ、人間が戰ひ、人間が死ぬる。さうした爭ひを、この大地の上で幾回、幾十回となく過去にくりかへして來たことであらう。その中のもつとも大きな戰ひが、現實に、ついこ二年前、こゝで戰はれたのである。

私は、郊外に建てられた上海市政府の、青い屋根瓦から吹き出す暖房用の煤煙の、もく〳〵と流れるその建物を見て、それから八方に放射する美しい鋪裝道路の一つを選んで、黃浦江岸へと走つた。

松井通りだの、長谷川通りだの上海戰を記念するために命名された指揮官の名をもつたこれらのメーン・ストリートや、金澤通りだの、廣島通りだの、名古屋通りだのといふ、內地の都會の名の移植したと思はれる大小の道路が、市政府を中心に放射されてゐるのである。

これらの道路の、ある一點に湊會する中心に『五條ケ辻』といふのがあつて、そこでゴー・ストツプの指揮臺があり、そこで日本軍と支那巡警とが一緒になつて交通整理をやつてゐる、まことにほゝえましい光景である。

中でも、これらの數ある街路の命名の中に『近衞道路』といふのが、そのわたりを、規則正しい、美しい一本の街路をもつて走つてゐるのを發見した時には、私は何となくうれしかつた。

『こゝに近衞道路がある』。それが、私のうれしい驚きの一つであつた。

やがて私たちの自動車は、『五條ケ辻』から、飯田道路を東北に走つて、飯田棧橋の方へと志

した。棧橋附近の高い堤防は、いふところの『軍工路』であつて、石疊をしいたデコボコの堅固な堤の兩側は並樹になつてゐて、これが黄浦江よりする上陸軍に對しては、一連のトーチカとなつてゐたのである。

軍工路を往く

軍工路の土堤の上には楊柳の並樹が規則正しい間隔で、ずつと兩側に植えられてゐる。春には早いこの並木が、美しいみどりの芽を吹くには、まだ間がある。これらの楊柳が冬のまゝに、さむ〴〵とした枯枝を、とけとげしく差し交して黄浦江の河風に慄えてゐるのが、私には恐るべき冬の脅威に感ぜられた。

江岸には蘆狄の洲がつゞいて、かれがれな焦茶色で、それがずつと飯田棧橋までつゞいてゐるのである。

飯田棧橋、それは、もと虬江碼頭とよばれた黄浦江岸の棧橋で、吳淞鐵道棧橋から、はるかに上流にあつて、そこからは新築の上海市政府へ、ずつと一路大道をもつて通ずるところの江岸にある。その道路を飯田道路とよび、その棧橋を飯田棧橋と命名されたのは、いふまでもなく、こゝに上陸した飯田部隊の上海戰における勇ましい奮戰を記念するためで、しかもこゝでは飯田部隊長をはじめとして、幾多の忠勇な勇士を喪つた。その勇ましく、悲しい戰勝を偲ぶための命名なのである。

一昨年の初秋九月六日の拂曉、わが飯田部隊は、このわたりから上陸した。そしてその明け方には滬江大學を占領した。大學の向ふ側には敵の飛行場がある。戰爭の初期において、飛行場を獲得し、それをわが軍で使へるやうにすることは初期作戰の遂行上、もつとも必要なことであつた。飯田部隊の使命は、この飛行場をわが方に確保することにあつた。その目的のためには、多少の無理をしても軍工路一帶の敵を驅逐しなければならぬ。滬江大學を占領した飯田部隊長は、そこの樓上から部隊を指揮し、軍工路にゞつく虬江碼頭には中村大尉の指揮する部隊が、敵前上陸の目的をもつて軍艦を棧橋に横附けにした。軍艦から棧橋に上陸しようとすると、敵はそこにある棧橋從業員官舍の窓から、機關統の一齊射擊でうつてきた。

そこで、一旦、兵をまとめて軍艦にのせ、四、五町下流にいつてそこへ上陸した。そこでも、

敵兵は頑強に抵抗したので、中村、梅田、松本各少佐（當時いづれも大尉）は、いづれも、奮戰ののち壯烈な戰死をとげ、大森大尉以下、多數の死傷者を出した。

この戰鬪において、飯田部隊長は、滬江大學の塔上から指揮をとり、部下の上陸軍が軍工路から斜めに進むよう指揮をしたのであるが、そこには大きなクリークが三つ四つもあり、葭、葦が密生してゐて、なか〳〵攻撃がはかどらぬ。そこで六日、七日のまる二日間を、彈丸雨飛する敵の抵抗にもひるまず、猛烈に攻め立てた。

八日の朝になつて、左翼第一線に進んだ森原一百大尉の部隊は、惡戰苦鬪の末、やつと軍工路の要點第一トーチカを奪取した。日章旗はサットと軍工路上の一角に押し立てられたのである。それは何といふ感激の一瞬時だつたであらう、實に三日間の連續不斷の攻撃ののちに獲得した、輝やかしい勝利なのだ。

しかし四周の敵は、そのために一層激しくうつて來た。森原部隊は、軍工路の土堤にへばりついたまゝ一步も進むことが出來ない。それが八日の朝から九日、十日と續いた。

飯田部隊は部署を變更して、八日の夜戰鬪司令所を敵に接近する虬江碼頭職員官舍へ移した。

九日の夜になると、敵が二百名ばかりて、この棧橋へ夜襲をかけて來た。

棧橋倉庫には、味方の戰死傷者を收容してゐる。そこへ敵彈をうちこまれては大變である。棧橋も大事だが、倉庫はなほさら大事だ

當時、棧橋を守つてゐたのは僅かに十八名てあつた。そこて棧橋の危急を救ひ、倉庫の安全を保持するためには、飯田部隊長はみづから手兵を揖げて敵陣に斬りこむより外に道がなかつた。

しかも飯田部隊長の左右には、僅かに十四名の傳令兵しかなかつた。

官舍に立て籠つてゐた飯田部隊長は、この最惡の狀況の中にあつて、九日の午前二時、十四名の手兵を率ゐて敵中に突いて出たのである。棧橋倉庫內に收容した死傷者を安全に守るためと、棧橋を死守する部下の死鬪を救援するために、まつしぐらに敵中に斬り込んて行つたのである。

飯田部隊長か、官舍を飛び出さうとしたとき、書記の橫田軍曹は驚いて隊長の腰にしがみついた。『こゝを出たら、アナタは戰死します。戰死は必定てす。部隊全般のために自重して下さい』

しかし飯田部隊長は、無理にそれをふり放した。『今さら何をいふか。碼頭（棧橋）にゐる梅田たち死傷者が見捨ててをれるか』

さういひ放つて置いて、部隊長は官舍を飛び出したのである。部下はクラガリの中をそれに續いた。

號泣と怒號

飯田部隊長は、官舍の煉瓦塀に沿うて、くらがりの中を、戰ひのもの音を尋ねて、一歩々々と用心ぶかく近づいて行つた。そのころ棧橋のあたりでは、敵味方入り亂れて格鬪を演じてゐた。その亂鬪の中へ、手榴彈がとび、小銃彈飛んだ、慘澹たる戰鬪が、幾時間續いたであらうか。戰場にありては一刻か永遠の長さに感ぜられるであらうし、また數時間がほんの一瞬時に感ぜられるであらう。

わが飯田部隊長は、部下を指揮して敵中に奮戰した。めざましく戰つた。しかし殘念なことには、敵の投げた手榴彈が、パッと火花のやうに、隊長の顏の前で炸裂したと思ふと、もう壯烈な戰死をとげてゐた。森田副官も手榴彈のために討死した。

こんな激戰に堪えながら、味方はあくまで棧橋と、倉庫とを守り通した。夜のあけ方になると

さしもに頑強な敵も、四、五十の死体を戰場にのこして、潮のひくがごとく退却していつた。これらの敵兵の死体は、いづれも十八、九歳の、若い、可愛い顏をした青年が多かつた。

翌朝、隊長の戰死を傳へ聞いた全隊の將兵は慟哭した。一死、弔合戰を誓つた。

てうど夜がほの〴〵と明け離れるころ、滬江大　の樓上には〇〇部と海軍の連絡、飯田部隊の作戰指揮といふやうな意味で遠藤參謀がゐた。參謀はそこで部隊長戰死の悲報に接した。

もとより指揮は一刻も空しくしてはならぬ。參謀はさつそく、唯一人の生存者である森原部隊長を、軍工路第一トーチカ陣地から呼びかへさうとして、手を換へ、品を換へて電話をかけたが森原隊長はどうしても歸つてこない。

『第一線〇隊長は、目下の情況上、斷じて部下を離れて、後方にさがるわけには參らぬ』といふ返事である。

そこで遠藤參謀は、隊長の嚴命だと稱して、やつと呼び歸した。

森原隊長は、澁々、前線から滬江大學の樓上に來た。遠藤參謀ははじめて『隊長が戰死した。貴官は部隊の指揮をとれ』と命令したのである。森原隊長はヂッと瞑目したと思ふと、やがてハラ

〳〵と涙を流した。歯を喰ひしばつて、一語も發しない。

遠藤參謀は、重ねて『何を泣くか、早く指揮をとれ』と怒號した。この場合、參謀は森原隊長の涙に負けまいとして、懸命に努力した、そして心を鬼にして怒號したのである。

森原隊長は、參謀の怒號をきくとともに、思はずわツとばかりに泣き崩れた。堪えに堪えてゐた感情が、堰を切つて一時にドツと溢れ出し、それが一切のコトバを超越して、一團の號泣となつたのである。

一團の號泣に、思ふまゝ泣き崩れた若いこの森原部隊長は、すゝり泣きの中から、やつと參謀にいつた。『私を前線に返して下さい、部隊の指揮は一時、參謀殿にお願ひします。私は部下と死を誓つて敵陣地に突入したいのであります。今から歸つたら、モウ一遍、敵陣地を斬りまくります。隊長の弔合戦をいたします』

しかし參謀は、その言葉を遮つた。

『泣くのはよせ。女々しい。おれのいふことを聽け、判らぬか』

參謀は相變らず怒鳴つてゐる。カンタンな單語を、ぶつきらぼうに千切つて投げつけるようなコトバだ。樓上には居合せた四、五名の將校が、ヂツと涙をのむでゐた。軍工路方面からは彼我の銃聲が盛んに聞えてくるが、この樓上は闃として聲がない。

森原隊長は、涙に濡れた眼を刮と見開いて、まともに參謀を見た。

『わかりました。しかし第一線に歸らして下さい』

さういつて、また面を伏せて泣いた。それを追かけて、參謀は

『馬鹿、分らん奴だ。飯田の後繼になれぬか』

と一喝した。

參謀の眼は光つた。燃えるやうに光つてゐた。參謀は、たゞ一人になつて生き殘つた隊長を、いたはり勵ましてゐるのだ。それは森原隊長にも分つてゐるのだ。分つてゐればこそ、あくまで第一線に歸してくれといふのだ。第一線には生死をともにした部下が殘つてゐる。そこへ歸つて行きたい。それが戰場における勇士の眞情なのだ。

てうど軍報道部の馬淵中佐は、この場に居合せて、この光景を最前からながめてゐた。『隊長の指揮をとれ』『とらぬ』の爭ひは、涙にぬれた隊長と、怒號をつゞける參謀の間で果しがつか

ぬ。見るに見かねて中佐は、遠藤參謀にいつた。

『遠藤參謀殿、ちよつと、私に委せて下さい』

『貴公は、森原を知つてゐるか』

『知つてゐるどころぢやない。森原は士官學校で、私の生徒でした』

『ソレナラ、賴む』

息詰つたこの場の緊張は、やつとほぐれた。

最高至純の感情

馬淵中佐は、遠藤參謀から、この場の處置を委されたので、立ち上つた。

『森原、ちよつと、階下に降りやう』

立つてゐた森原隊長は、馬淵中佐とともに階下に下りて行つた。二人は何もないがらんどうの一室に入つた。立つたまゝ向ひ合つたが、二人は何にもいふことがない、いふべきコトバがないのだ、

『森原、よくやつてくれた』

中佐はだゞさういつて一歩前へ出た。森原隊長も一歩前へ出た。二人はいつしかヒシと抱き合つてゐた。しばらく聲が出ない。悲しいのか、悲しいのでもない。傷ましいのか、傷ましいのでもない悲喜こもごもの感情を包んで、はるかにそれらを超越した人間感情の悲壯な感激に打ち慄えてゐるのだ男らしい男の涙だ。

『森原、もういふことはない。參謀のいふことを聞いて部隊の指揮をとれ。遠藏參謀の怒號は血と涙の結晶だ。飯田部隊の遺志をつぐものは貴公より外にない。うしろには遠藤參謀がついてゐる。しつかりやれ』

馬淵中佐は、相手の肩をたゝいた。

『判りました。やります』

森原隊長は、やつと決心した。

『それでよし、一杯のんで、三十分眠らう』

中佐は水筒の酒をすゝめた。しかし森原隊長は、

『かうなつては安閑と眠つては居れません。すぐ、遠藤參謀殿に會つて決心をのべます』

颯爽として森原隊長は樓上にのぼつて行つた。

『遠藤參謀殿の仰せに從ひ、部隊の指揮をとります。宜しく御願ひします』

森原隊長は、軍人らしい態度で自分の決心を迷べた。遠藤參謀は莞爾として、

『ようし、しつかりやれ、飯田も喜ぶぞ』

參謀の前に、不動の姿勢をとつてゐた森原隊長は、參謀のこのコトバにまたしても激動を感じたらしく、頬には涙が潸々として流れた。身じろぎもしない。不動の姿勢は、少しの崩れも見せないが、涙のみは、彼の姿勢を裏切つて、しとどに頬を傳つて流れた。

若い青年將校だつた森原隊長のそれからの隊長ぶりといふものは、實に水際立つてゐた。老練な部隊長の指揮すべき部隊を、沈着と剛膽さとて、キビ〳〵と號令し將校のほとんど斃れ去つた疲勞困憊の部隊を率ゐて健闘五日間、遂に九月十三日の朝、さしも堅固を誇つた軍工路陣地を突破した。

その晝には、早くも上海市政府を占領して、日章旗を樓上高く掲げた。

飯田部隊不朽の名譽を戰史に留めたのは、實に森原隊長の純情にみちた軍人らしい活躍によるところが多い。

さるにても遠藤參謀が、青年士官に花を特たせんと努めたこゝろやり、森原隊長が決死の部下と離れるに忍びなかつた心情、さては尊敬する飯田部隊長の遺志をついで、健闘善戰、あくまで敵陣を突破した勳功、いづれも日本武士の龜鑑である。

上海上陸戰に生きのこつた唯一の森原隊長は、その後、その部隊は大島部隊となり、それに屬して南京、徐州に轉戰し、さらに武漢攻略戰に參加して、つねに赫々たる武勳を示したが、惜しいかな大別山方面の戰線において、つひに華々しい最後をとげた。

去る三月三日、森原少佐以下百二十七柱の慰靈祭が、原隊營庭に行はれ、新らしい悲しみの涙をそそつたことは人々のよく知るところであらう。

上海の軍報導部にある馬淵中佐は森原少佐が大別山麓の戰ひに戰死するや、感慨にたへずみずから筆を執つて『大場鎭の陷るまで』と題する一篇の手記を綴つてゐる。

私は上海でその手記をよんで泣かされた。そして親しく軍工路の戰蹟を訪れて行つたのである。

戰爭は、すべてを超越して、人間のたましゐを清めてくれる。そこには人間の純粹感情が、もつとも高い姿で、美しく發揮されるからである。およそ人間が生死の一線を前にして向ひ合つた刹那ばど嚴肅なまじめさになる時はないであらう。それに觸れた時、私たちの心は清められ、高められる。戰爭が人間生活の最高道義を示してゐるといふ事實を私たちは忘れてはならない。

われ〳〵が上海の戰場を訪れてそこでわれらの受けるこの深い感動は、生死の一線を前にして發揮される人間の至純な感情に觸れるからである。この至純な感情こそ國民を永遠に高め、清めてくれる大きな力ではないか。

上海北部戰線

黃浦江の濁流は吳淞口において、揚子江に會流する。そのあたりは、江といふにはあまりに廣く漫々たる濁流が、海のごとくひろびろと開けてゐる。海潮の加減もあらう。强い海波の押して來るためもあらう。こゝは江波の逆流して、流れの方向を知らない。底の流れは海に向つて矢のごとく流れ、江上の波は風に押されて潮のごとく逆流する。

逆流するものと、正流するものとが、はげしく擊ち、激しく戰ひ目まぐるしく施回して江上に滔々たる渦の流れを卷いてゐる。一たび水に轉落したならば、とても助らないといはれる。おそらくさうであらう。

私たちは蘆狄の枯れ〳〵に萎んだ江岸を右手にながめながら、並木の軍工路を北上した。石疊を敷いた廣い堤上は、砲彈の雨にデコボコになつてゐて、まだ十分に修理されてゐないためか、自動車の行き惱む惡路である。やうやくにして堤を下りて、鐵道棧橋附近に出た。このあたりは○○基地となつてゐて。○○が連なり、糧秣が堆く積み上げられ、車馬絡繹として織るがごとき雜踏を極め、モハヤ一昨年の激戰を偲ぶべき何ものも殘されてゐない。

倉永部隊長戰死の碑は、これら○○の中庭にとりかこまれ、蜂の巢のやうに射ちぬかれた棧橋倉庫は、酒保となり、事務所となつてモハヤ何人をも立入ることを許されない。

黃浦江岸の岸壁は、昔のまゝであるが、岸壁上に掘鑿された塹壕は埋め立てられ、わが軍を阻んだ竹矢來の柵はとり片づけられ、そこに棧橋はふたゝび築造されて、何一つ、往年をしのぶよ

すがとなるべきものを見ない。まことに歳月は、痛ましい一切の記憶を、われらから忘却せしめようとするかに見える。

私たちが、この江岸棧橋を訪れたのは、てうど一月二十三日てあつた、二十三日、二十三日、月は異なるが、この日こそ、まさしくわが郷土部隊のこゝに敵前上陸を敢行した忘れることの出來ない記念すべき日なのである。

その日から、この江岸は鐵火の吼ふ巷となつた。いふところの上海北部戰線は、この日から二ケ月餘にわたつて鮮血の飛び散るすさまじい戰場となつた。私は帳然として、江頭を吹く河風に外套の襟を立てながら、その日のことゞもを思ひ描くのあてつた。馬淵中佐の、上海附近の戰況についての說明を、次に拔萃して當時偲ぶよすがにしよう。

八月二十三日、陸軍部隊が上陸したのは吳淞鐵道棧橋附近および川沙といふところてある。兵力が少かつたので吳淞鎭に上陸したわが軍は、敵から射擊を要けて、〇〇部も散兵もその危險の度においては變りがなかつた。どちらからでも擊たれる狀況てあつた。敵は非常に多く、二日から三日戰爭するとすぐ交代し、日本軍をして不眠不休に陷らせ、疲勞困憊させて黃浦江に陷し入れ

ようといふのが支那軍の作戰てあつた。もう一つの川沙といふ方面に上陸した部隊は、吳淞ほど敵が陣地を設けてゐなかつたので、その日のうちに中村大尉の指揮する工兵隊の一部は羅店鎭まで進出した。その時、敵はまだ羅店鎭にはゐなかつた。やがて敵の大軍が殺到してきた。中村隊は三十七名しかをらなかつた、そこてクリークに身を潛め、敵の砲兵が來るのを橫合から出ていつて格鬪し、その砲車をクリークに投げすてた。しかし兵力寡少のため、格鬪の末、全部枕をならべて戰死した。わが後續部隊がそこへかけつけた時には、もう敵が全部占領してをつた。そこて猛烈な戰鬪をやつて羅店鎭を占領した。中村大尉の戰死以下の戰死體は、奮戰した戰場附近に全部そのまゝ殘されてゐた。これは敵軍もわが勇敢な行動に對して敬意をさゝげたものだと思はれる。

はじめ上陸した部隊は兵力が少ないので、やつとその地點を確保するたけてあつたが、追々、後續部隊の增援を受けるやうになり、吳淞にあつた鷹森部隊は、八月卅一日から九月六日までの間に寶山城邊に進出したそこて六、七日から吳淞クリークを渡つて進擊がはじまつた。楊行鎭まては僅かに一里半か二里てあるが、その間、クリークといふクリーク、村落といふ村落が全部陣

地である。一つのクリークを渡り、一つの村落をとるのに非常な激戦をくりかへした。陣地戦が至るところにくりかへされた。

九月十一、二日に楊行鎭の線に到達した。一方、九月六日虬江碼頭に敵前上陸した飯田部隊は軍工路を越えて西進し、九月十三日上海市政府を占領した。この間、石井部隊のごときは、大部分をこの戰闘で失つた。しかし、かくして上海北部戰線は、ぢり〳〵と進捗し、雪崩をうつて大場鎭へ刹到すべき進撃路が開かれたのである。

二十二階から

上海北停車場附近一帶の市街戰跡は、郊外戰線の茫々たる枯れ野原の一大展開とは異なり、到るところに砲火に打ち壞され、兵火に燒き滅ぼされた家屋の殘骸が、今も當時のまゝで街上にのたうち廻つてゐる。それは、まことに茫漠無限に展開するところの燒跡の連續である。

一体、郊外の戰場では蒼い大空と、茶褐色の草原が、悠々とはるかなる地平の彼方で接吻し、それを背景として靜かな村落が、ぽつりぽつりと點在するだけであるが市街戰の演ぜられた上海市内では今も荒寥たる廢墟の痛ましさが、無氣味な姿で、いたるところに突つ立つてゐるのである。

私はそれを一日、蘇州河を橋向ふに越えたバンドの國際飯店（インターナショナルホテル）の二十二階の樓上から概觀した。こゝは一昨年の上海戰當時、上海側は外國記者團などをこの樓上に招いて、脚下に展開する市街戰を豪然指呼しつゝ說明してゐたといふし、また租界の第三國人は、毎日食事をこのホテルでとりつゝ、そこの二十二階から日々夜々の戰闘を高見の見物してゐたといふ。

大上海の全展望は、名古屋よりも、大阪よりも大きい。この樓上から見渡した鳥瞰觀からすれば、北停車場を中心とする虹口一帶の戰跡は全上海の大きさに比べて、廿分ノ一の小地域に過ぎないかも知れぬ。この狹小な地域一帶が戰禍に見舞はれても大上海の大きさからすれば、全体の生命に別條なき隻手隻脚を切斷された程度の損傷であるかも知れない。大上海の生命は、戰場となつた市街の部分的荒廢によつて、その呼吸の根を止められたのではない。むしろ、あの日の上海戰なるものは、わが方にありては、大上海の生命と健康とを現狀のまゝでつなぎとめんがため

の、部分的切斷作業として行はれたのであるから、市街の荒廢が、打ち見たところ相當程度の廣範圍にわたつてゐても、それは全体としての上海の呼吸を窒息死滅せしめるに至つてゐない。

いふまでもなく、上海の市街戰は、敵が、日本人の密集する租界をめあてとして行はれた攻撃に對抗したもので、從つて市街戰に充てられた戰場が、日本人のもつとも多く生活する方面であつたことは、自明の道理である。從つてこの戰鬪によつて享けたところのわが日本人の損害と苦痛とは並大抵のものではない。すなはち、われらはわが同胞のいふべからざる犧牲によつて、この戰鬪を遂行したものであるが、それをあくまで對岸の火災視して、のう〳〵と、ホテルの二十二階から見物してゐた第三國人と、支那側の、當時の小面にくい態度は、今思ふただけでも憤慨に堪へない。

わが國か、上海租界の安全を確保するために、それを直接には、わが三萬の在留邦人の生命と財產と、その權益とを防護するためではあつたが、しかし全体としては舊英租界、フランス租界を含めたる全上海市街の生活の安全を守るために、こゝに生死の苦鬪をつゞけてゐるにもかゝはらず、彼等第三國人は、蘇州河の橋一つを隔てて、日々夜々、官能的な享樂に打ち狂うてゐたのである。

砲彈の荒れ狂ふ暗黑の市街に隣りして、ネオンの輝やく歡樂街に彼等は夏の夜のそゞろあるきを享樂してゐたのである。何といふ無關心さであらう。それは彼等第三國人の單なる無理解、無反省からくる無關心さではなく、われに對して十分な惡意にみち、むしろ、わが國に對して敵意にすらみちてゐたところの無關心さであつたと思はれる。

上海を中心として、直徑二十哩の地域内には、支那兵を入れないといふのが、この前の上海停戰協定であつて、それには斡旋者として、イギリスも、アメリカも參加してゐた筈である。これは上海租界の安全と、繁榮とのためにはゼヒ必要であつたのだ、その協定を破つて支那側が上海に侵入し、どし〳〵防禦工事を構築してゐるにもかゝはらず、英米は何等の措置をも取らなかつた。だから、この戰爭の結果、彼等の租界か戰禍に見舞はれ、彼等の生命、財產、權益が危殆に陷つたとしても、何の不平をいふことも出來ない筈である。それをわが軍は、ひとり敢然として戰つた。これは彼等第三國の利益のために戰つたといつてもよいのである。

しかるに、彼等はこれに對して心からわれに感謝しないばかりか陰に陽に、妨害を加へて、今

なほ敵方に厚意を見せてゐる。まことに許すまじき彼等の態度である。

國際飯店の二十二階から、虹口一帶の荒廢したる市街を眺めてゐると、ソンな感慨がムラ〳〵と湧いて來て、こゝの華やかなバンドがむしろ呪はしいものにさへ思はれてくるのである。そして、またしても、『租界とは何ぞや』『支那とは何ぞや』といふ例の皮肉なリクツが、心の中でむしやくしや紛れに湧いて來て、何が何だか分らなくなつてしまふ。

租界の繁榮が、リクツ抜きにして、無性に腹が立つて來るのである。そこには『彼等は怪しからぬ』といふ一種の道德的非難の意味が、理論をなさぬまゝに、一つの直觀として、前へ、前へとのしあがつて來るのである。これが、およそ上海租界に對するわれら日本人の一般通念である。

三義里の戰跡

上海第一の高樓である國際飯店の二十二階から見下した虹口市街は、たゞほんの少しばかり戰場の燒跡らしい地域を見せてゐるに過ぎないが、脚一たび、荒廢したる戰跡の市街に入つて行くと、これはまた涯しもしらぬ荒寥たる破壞の連續である。

わが在留邦人は、さうした廢墟の中に、僅かばかり取り殘された市街に、ありし日のごとく店頭を飾り、商品をならべて、貧乏くさく、小さい商賣をいとなむでゐるといふ狀態である。なるほど、ここにも夜となれば、電燈は明るくネオンの灯も華やかに、活動寫眞館の大きな繪看板が人の眼をひき、しやれた日本風の料理屋が、そこ〳〵に散在してはゐるが、僅かに三万五千人の日本人と、まだいくらも歸つて來てゐない數萬の支那人との寄合世帶では、何としても河向ふの繁昌とはくらべものにならない淋しさである。

この寂寞たる日本人の居住地帶が、いつになつたら普通りの繁榮をとり戻すであらうか。上海の戰ひが、津浪のひくやうに引いてから、もう一年半近くにもなるが、まだ壞れた煉瓦の街々から、まづ煉瓦を取り片附けなければ、足のふみ場もないやうな家屋が、がらん洞のまゝで、ばつくりと口を明けてゐたり、脊柱ばかりを殘して屋根も、壁もない骨ばかりの家屋の殘骸が、手のつけやうもない有樣で、やけに立ちはだかつてゐたり、表戸を釘づけにしたまゝで、墓場のやうな市街がつゞいたりしてゐる。

私は、ある日のこと、郊外から上海市街へ歸つて來ると、ツイ『海軍陸戰隊路』といふのを、

私は自動車の疾走してゐる中から發見した。

こゝは、一昨年の十月二十五日、陸海軍が協力して突擊路を造つて突擊していつたところで、まだ新築後間もない上海商學院の、美しい大きな建築物は、蜂の巢のやうに穴があいてゐる。この商學院前の道路を隔て、彼我兩軍は九月中旬以來、一ケ月半にわたつて對峙しつゞけてゐた。しかし上海北部戰線が動いて、わが大軍が潮のごとく大場鎭に殺到すると、敵は全面的に支へ切れなくなつて、こゝの商學院の敵陣地も動搖したそれに附け入つて學校の南側空地を沿うて突擊して行つた跡が、今もあり〳〵と殘されてゐる。こゝはもう上海市街に近い。

それから私たちは寶山路を走つて、三義理へ出た。海軍陸戰隊では、この附近を上海戰跡として永久に保存しておくつもりで、事變勃發當時のまゝて、すべてが殘されてゐる。

あの有名な上海商務印書館や、三義理の狹隘な路上に設營された掩蓋や、趙岐公義學校の三階までぎつしりと土囊を積んで、その中に立て籠つた敵の頑強な抵抗ぶりなどが、世にも凄慘を極めてゐて、てうど地獄の底にても陷ちていつたやうな、恐ろしさを感ぜしめるのである。

海軍では、これらの家屋をA、B、C、Dなどと假稱し、たとへば假稱D家屋、假稱K家屋などと名づけて、一々、激しかつた當時の苦戰と、それを突擊していつた決死隊將兵の姓名と奮戰の概要を記した表札を立てて、當年を偲ぶものの資料に供してゐる。

【假稱D家屋】 佐野部隊今井隊小西小隊以下二十三名、昭和十二年九月三十日決死隊となり、第四大隊後藤山砲小隊長以下十三名これに協力、午前十一時二十七分突擊を決行、これを占領、戰死一等兵曹林田辨藤

【假稱K家屋】 佐野部隊今井隊寺本小隊以下二十三名、昭和十二年十月一日決死隊となり、特砲隊石井小隊長以下八名これに協力し、午前十時十七分、突擊決行、これを占領

自來陣地戰として、晝夜の別なく、手榴彈戰を展開、十月十四日午後七時陣地前に殺到せる敵大逆襲に對し二時間半に亘る猛烈なる戰鬪を敢行しこれを擊退

かうした標示板の文字が、當時の痛ましい激戰を回想せしめるのである。そして前にのべた三義里の公義學校は、これの家屋から、つい目と鼻の間にある近距離で、ホンの二十間にも足りぬ街の中央にあるのであるが、それを奪取するにも、前後二十七日間を要した。すなはち十月二十七日佐野部隊の田口隊、阿部隊、井口隊などが、一戸々々の壁を拔き、階上と地下とからする敵

の攻撃を壓倒して、遂に三階のこの校舍を占領したのである。

十月二十七日といへば、陸軍が大場鎭の攻略を完成した翌日である。大勢モハや挽回すべからざる最後のその刹那になつてまで、なほ、敵はこの市街の家屋を頑強に死守してゐたのである。

北停車場に近い三義里の戰跡は痛く私の心をひきつけたものと見え、私は二度、そこを視察した。誰一人通るものもない廢頽した小路を、とぼ〳〵と歩いて、公義學校の三階までこつ〳〵と上つて行くと、まことに、鬼氣人に迫る凄壯の感がする。

もし窓の外に、太陽の温かい光りがさしてゐなければ、私は暗黑の地の底を潛つて行くやうな錯覺に落ちたであらう。

ゼスフイールド

「犬と支那人は入るべからず」といふ制札はもう、今日の上海の公園では見かけられなくなつたがその代り、公園は一定の入場料をとつて、支那人の入園を事實において制限してゐるのである。

フランス租界公園は、電車の終點、靜安寺附近の、愚園路を行きつくしたあたりの、靜かな一境を占めてゐる。ゼスフイールド公園とよばれてゐるのがそれである。入園料廿錢は、支那民衆の生活にとりては二日分の生活費に當る驚くべき料金であるので、うす汚れた支那の難民たちがこゝを屈竟の避難場所として雪崩こむには、あまりに高價すぎるのである。

從つて、ゼスフイールド公園は支那人に汚されざる清淨な、純淨な美しさを程よく保つてゐる公園である。

私は、日曜日の午後、この公園を散步した。上海の猥雜な、汚濁した空氣からのがれるには、この公園は、上海にある他のいづれの公園よりも都合がよい。

早春の、うす曇つた、まだ寒い日であつたためでもあらう。園内にはほとんど人がなかつた。

「入園料の二十錢」といふ制限は、こんなにもこの公園を、支那人の汚濁した混雜から保護してくれるのである。

「犬と支那人入るべからず」といふやうな非人道的な、非難に値ひする制札をつけて置くよりも、この方がどれほど合理的で、かつ有効的であるかも知れない。

私は、おかげて、日曜の午後の數時間を、靜かにこの公園で、ほしいまゝな散策を享樂したものである。フランス流の造園術とてもいふのであらう。わが日本におけるゴタ〳〵した花壇の逍遙路や、子供の遊園地や、運動場や、そんなものは、何一つ見かけられない廣い園内の中央に、泉水を掘つてその周圍にはなだらかな平面の芝生が、心地よいほどの廣さて、赤色の毛布をしきつめたやうに展開してゐる。これは遮ぎるものもない廣さの展望から來る快感である。枯々になつた美しい樹林をもつた逍遙路が公園の端を緣ごつてゐるながめもすばらしく美しい。ベンチに腰をかけて、編ものをしてゐる女の脚を組合せた裾から青いスカートが、少しばかりのぞいてゐるのが、あたりの茶褐一色の芝生に青一點を點じてゐて、そこだけが際立つてなまめかしく見えるのも色彩の配合のよさである。遠くからこれを見てゐると、それが支那人だか、西洋人だか分らないが、黑い上着に青いスカートは、恐らく支那婦人であらう。

こゝには小さな植物園もあり、動物園もあり、いづれも貧弱ではあるが、そこにあつまつて來る見物人はかなり多い。垣根越しにイギリスの兵舍があつて、二人の姑娘が、イギリスの兵士と日曜日の媾曳をやつてゐるのも微笑ましい光景である。兎の小舍が、寒さを防ぐために藁束て屋

見根と、壁とをとりまいてゐるのは、田舍小屋をゐるようで、鄙びたおもむきがある。

むかし、ゼスといふ奴隷の少女があつた。主人の支那人に大道で虐待されてゐるのを、一人の外人がみるにみかねて制止した。すると「おれの買つた奴隷を、ごうしようとおれの勝手である」と抗辨した。その外人は「そんならその娘を僕が買はう」といつて、大金を出して少女を解放した。それをアメリカへやつて、學校に入れた少女は聰明で怜悧てあつた。そして玉のやうに美しさを加へていつた。その外人は獨身の老人であつた。彼はいつしか全身、全靈をあげてこの少女を愛戀するやうになつた。この公園附近一帶の地は、この外人の所有地であつた。それをゼスがものにしてゼスフィールドと稱した。二人の戀の形見のゼスフィールドが、今、かくしてフランス租界の公園となつてゐるのである。

私は枯れた芝生のひろ〳〵とした美しい眺望とともに、上海にもこんな美しい國際的なローマンスのあることを、ひそかにうれしく思つた。

一歩、公園を外に出ると、愚園路上には、汚ならしい黃包車と、自動車と苦力との混雜であるたゞ自動車のドアーをあけるだけのサービスでチップを請求する蟲のよい苦力が、うるさくつき

まとつて來るのである。

公園内では、しばらく忘れてゐた上海が、また現實に執拗く私を追つかけまわすのである。

私は、こゝで上海案内記をものすることを目的としない。たゞ舊英租界と、フランス租界を點描することによつて、繁榮する租界の一面を見たいと願つたに過ぎない、そして廢墟になつた戰場の上海とを對照することによつて、上海にはハツキリと二つの上海の存在することを讀者に報告したかつたのである。

すなはち、滅びるものと、滅びざるものとの二つがこゝに存在することを讀者諸君に讀み取つて頂きたいと考へたのである。果して何が滅び、何が滅びざるか、それは日本國民の意思が決定するであらう。

楊州は昔の上海

南京の東北に江を隔てゝ楊州といふ小都會がある。楊子江の名稱は、この楊州から生れて來たもので、揚子江といふのは、嚴密にいへば、南京より下流の大江に命名されたものが、今日では

この大河の全体を總稱する名稱となつたものである。

蓋し、楊州は、古く隋の煬帝時代から、離宮を設置されてゐたことがあり、風光の明媚、氣候の温潤をもつて知られた都會であつたが、唐代になると、廣東とともに支那に來泊する異國人のための貿易港として殷賑を極めたものらしい。

從つて、楊州の地は、早くからペルシヤ、インドから、ヨーロッパにも知られてゐた。いはゞその時代の楊州は、今日の上海のように、揚子江上の船つき場として太平洋の怒濤に洗はれてゐた海港であつたのである。

そして、今日の上海には、各國人の集まる租界なるものが發生して、外國人の樂土が、そこに建設されてあるように、唐代にありても、楊州には、外國人のための租界的な性質をもつた特別な安全地帶が設置されてゐたのであらう。

わが國でも越前の敦賀には松原の海岸に、外國人を宿泊せしめるための公館が、一千何百年以前から設けられてをり、鴻臚館といふ外賓公館が難波の津にも、九州博多にも設けられてゐたことなどを考へると、楊州にさうした租界的な地域と設備とが古くから設けられてゐたことは、別

殿怪しむに足りない事實であらう。

全体、支那人といふものは、遠く何千年の昔から、異民族との交通來往が頻繁であり、北方では、つねに武力的侵略をうけて、漢民族は次第に追はれて揚子江沿岸に進出し、南方からは貿易通商を目的とする平和的な商業民族が不斷に支那にやつて來た。この北よりする武力的な侵入民族は、漢民族の生活の中に、その血液を交へて、たび〳〵支那の支配的地位を把握したが、南方よりする商業民族には、さうした支配的勢力を支那に確立するまで深入りすることがなかつた。揚子江が漢民族の樂土として、そこに彼らの文化を建設することが出來たのは、南方よりする侵迫が、ひつきよう平和的な性質のものであつたからだと思はれる。

黄河の中流に發生した漢民族が黄河の流域をすてて、次第に揚子江沿岸に蕃殖していつたのは最小抵抗線を選んで、水の低きにつくがごとく流動していつた結果にほかならない。そこには支那における民族移動の原因がある。

この事變以來、われ〳〵日本人にあまねく知られるに至つた山西省の大同は、その昔、北魏拓拔氏の都するところであつて、これは漢民族でなく、胡人であり、胡種であつた。

隋の支那も、彼は純粹の漢民族ではなく、胡種、胡人であつた。唐の高祖も、また漢民族ではなく、胡種、胡人であつた。

かくして、支那の文化が漢人種の手によりて建設、開發されたといふべきよりも、むしろ漢民族以外の、異民族によつてのこされたものが多く、今日東洋美術の一大殿堂といはれる雲崗の石佛のごときも、支那人、すなはち漢民族の創造した事業ではなくインドおよび西域地方に發達した佛教藝術を、胡人の北魏氏がその手によつて支那に移したもので、これは漢民族自身の藝術ではなく、異民、異種族の藝術に過ぎない。

これら、外國文化の移入に當つて、漢民族は手を拱いて傍觀し、たゞそのできあがつたすばらしい成果に感歎し、やがて時代を去るに隨つて、あたかもそれらの藝術文化を、漢民族みづからの創建であるかに考へて來たに過ぎない。

これを半面からいふと、漢民族といふものは、ふところ手をして爪を長くのばしながら、悠々と遊んでゐることを優秀民族のほこりとし、それを長者の風格と考へる民族であつて、極度に勞働を卑しむ氣風をもつた民族なのである。

従つて、支那における土木事業や、建築や、美術工藝の發達は、苦力を驅使し、胡人を追ひつかつて成し遂げた事業で、かの萬里の長城も、大運河の開鑿も、大同の石佛も、その他の莊麗な宮殿建築も、胡人か、苦力か、奴隷かを使役してできあがつたもので、支那の文化建設の事業は漢民族自身のなしとげたものではないといふことが斷言できるのである。

従つて彼ら、漢民族は、さうした點からも、異民族をつねに國内に抱擁してゐなければならぬ必要があつた。すなはち、支那文化が外來人に依存してゐるといふ事實は、古今を通じて一貫してゐるのである。

この事實を認識するのでなければ、支那事變の處理といふものを滑らかに運ぶことはできないであらう。

どうも、私はリクツをのべ過ぎたやうである。それでは、これだけの前提をかゝげて、南京を見よう。

落ついた南京

上海は猥雜な、雜音の多い都會である。近代人の若い青年たちは、上海のこの猥雜にたまらない魅惑を感ずるものらしい。

しかし、上海は決して人間のたましひを休息させる都會ではなくつねに何ものにか追ひ立てなれるやうな、いらだゝしさを與へる。

第一、そこには何等の文化といふものがない。人間を向上させるような、清純な文化がない。ひつきよう、上海は人間を金と、物と官能的な、享樂に引づりこんでしまふ墮落の都會なのである。

近代人が上海に魅惑を感ずるのは、その意味においてのみ、無理のないことだと思はれる。けれども、この都會を、ものゝ十日間も歩いてゐると、アタマが混亂してしまひ、たましひが失はれてしまつて、物欲的な感覺ばかりが働いて、こゝに住んでゐることが苦しくなつて來るであらう。

貧乏の苦痛にかけては、相當、内地で修養させられてゐる日本人も、上海に來ると、みんな眼の色を變へて、物價高な生活に日々を脅かされる。

しかし、一たび上海を離れて、蘇州から杭州、南京へと、奥深く入るに從つて、はじめて支那に來たといふ落つきを發見するであらう。私は南京に入つて、靜かな大路を、自動車で走りながら、この都會が、私にはとても住心地のよい街であることを直感した。

一千年の古い傳統をもつた美しい都會の靜けさが、戰後の激しい變動の中でも、しみ〴〵と感ずることが出來るからであらう。

上海では、その存在をハッキリと認め得られなかつた維新政府も南京に來ると、實に堂々たる威容をもつて、この都會に君臨してゐる姿が、まことに賴もしく私たちに映じて來る。その上にわが皇軍の各部隊が、全市に存在してゐて、どつしりと落ちついた威嚴を街の隅々にまで、太陽の光りのごとく投げかけてゐる。

アノ上海の外國租界の中では、一人の武裝したる日本の兵隊さんをも見かけることが出來なかつたのに、南京では全市が、わが兵隊さん達の遊歩場のようだ。

私は南京に來たといふ感じよりも、むしろ、日本へ歸つて來たといふ心安けさを、この都會で感じたのかも知れない。日本軍の威力のおよぶところでは、かうも、われ〳〵は安心した生活ができるのである。

月光のほの白く空にかゝる南京の夜、淋しい裏街を、腕車で走りながらも、私たちの心には、少しの不安もない。むしろ。微笑ましい得意さで、支那車夫にものをいひかけたい誘惑にかられる。こんな時、私が不自由なく支那語がしやべれたら、どんなにこの支那人と親しく話し合ふことだらう。

黄包車（人力車）の走つていく兩側には、爆彈を食つた建物が、屋根を打ち落とされて、ぱつくりと大きな口を空にむけてあけてゐるのもある。砲彈でぶち壞された煉瓦の壁もある。人通りのない荒寥たる夜の淋しさが、月の光りで一層もの凄く見えるけれども、そこを私たちが走つてゐても、少しも不安といふものが感じられない。

これは、私の主觀的なこゝろのせいばかりではあるまい。この市街全体が、治安の上にもう何の心配もないといふ事實が、私たちをこんなにも大膽に、安心して深夜の街を散歩させるのであ

らう。

支那人の遖げて行つた飯店のアトを、日本人が引受けて經營してゐるのが南京ホテルである。コンクも、給仕人も、もとのまゝに支那人を使つてゐるらしい。食事はすべて日本食で、ミソ汁もあれば、タクアンもある、室のボーイが、英語で話しかけてくる。こちらは支那語が通じないからである。しかし日本の娘さんたちが、支那の娘たちと入り交つて、日本服のままで、日本内地のように、サービスしてくれるので、英語でボーイと話すよりも、日本語で日本の女中さんたちに話した方が便利である。

私はホンの一泊がけのつもりで南京へやつて來たが、ホテルの一室に落ちつくと、もうゆつくりと南京に腰をするつもりになつてゐるのである。

南京へやつて來た社の小島君は一昨年、北京から張家口、大同へと約一ケ月間も一緒に旅行した間柄であるが、その後ずつと引續いて同君は中支戰線を歷めぐつて、今では一通り支那語の日用會話に、ことを缺かない程度になつてゐるので、私の南京案內役として特に一緒に來て貰つた。

『僕は、これでもう南京へは百回ばかりも來てゐますよ』と、小島君は、からだは小さいが、ホラはなか〳〵大きい。それに私は安心して、とにかく深夜の南京を不安なく見て歩くことになつたわけである。

玄武湖の朝

玄武門を潛つて城外へ出ると、朝靄の立てこめた玄武湖が今、眼をさましたばかりの、あでやかな姿で、岸の楊柳の、寢くたれ髮を水鏡にうつして、さばさばとしてゐるやうな美しさである。薪を負うた老人が、よぼ〳〵と湖畔の鋪裝道路を、向うからやつて來る。南畵にありさうな點景である。

湖岸につないだ漁舟を、楊柳の汀から解いて漕ぎ出していく漁人もある。湖面には、もう例の盥舟にのつた漁師が、長い水棹で、びしや〳〵と水面をたゝいて、左右に飛沫をあげてゐる。

水面を水棹でたゝくと、水の中の魚類は、面喰つて、あわてふためいて、ぽつかりと水面に浮いて來るものださうである。そこをすかさず、饅頭形の大きな籠でふたをするやうに押へて、手

づかみにするのである。これは一種、原始時代の漁獲法なのである。

盥舟は南京や、蕪湖では乞食たちの乗る船で、揚子江岸の船つき場では、これらの盥舟の群が汽船の周圍に群れ集まつてきて、棹のさきに袋をつけて、それに錢を入れてくれといつて差し出すものださうであるが、玄武湖の盥舟は必ずしも乞食の群ではあるまい。とにかく、かうした盥舟が點々として湖上に浮び、それを漁夫は立つたまゝで腰のひねり具合一つで、自由に湖上を遊弋することができるのは、恐ろしい熟練といはねばならぬ。

これらの盥舟の群に交つて、普通の小舟もある。小舟の胴の間に椅子を据ゑて、アゴヒゲのある老人が悠然とそのイスに腰かけて、あたりの風景に見とれてゐるのもある。いかにも支那人らしい閑人風景である。

紫金山の山影が、玄武湖の水に落ちて、ところ〴〵、敗荷の朽ちた莖が、水の上に頭を出してゐる。さゞ波が水の上を走つて、山影が小皺を刻むで動く。朝日がまつ赤に水を染める。まことに美しい景色である。

湖畔には五洲公園が一つの島をなして、それが石橋をもつて繋がれてゐる。その島に渡る石橋のほとりには、特にミゴトな楊柳の並木があり、その並木の樹影に、儼丈な枕木のやうなベンチがある。十七、八歳の姑娘が五、六人湖上の景色を眺めながら、大きなドンブリ鉢で、朝飯をかきこんでゐる。平和な、幸福らしい朝飯である。

彼女たちの朝飯は、飯ばかりで何の副食物もないらしく見えるが、他目にはおいしさうに見えるのも微笑ましい光景である。

彼女たちが、こちらに尻を向けて、湖の景色を眺めながら、どんぶり鉢の御飯を食べてゐるその前面には、朝日がキラ〳〵と水に輝いて、五色の光焔が、ゆら〳〵と搖れてゐる。

姑娘たちは、いづれも美しく、健康さうに見える。身裝は、支那一流のむさくるしく、貧乏くさく見えるが、うすよごれた服裝に、ハチ切れるやうな肢體を包んで、部厚の感じのするところが、支那娘の特長であらう。

五洲公園を一巡した。公園築山には蠟梅が、幾株となく、黄色い花をつけて、今をさかりと咲きみだれてゐる、鼈甲でつくつた造花のやうな感じである。先日、上海の宿で、はじめてこの花を見てこれはいかにも支那らしい花だと思つた。それが南京のこの公園では、築山の傾斜面一パ

イに咲いてゐるのである。

しかし、所詮、梅花の清純さは白梅に盡きるであらう。紅梅はいやらしい女のようであり、蠟梅は感情の硬化した年増女のようである。

私は、この蠟梅をめづらしいとは思つたが、美しいとは感じられなかつた。支那の大地を表象した花だとはいへるが、何だか、梅の花らしい感じがしなかつた。

私たちは一旦城内へ戻つて、それからぐるぐると南京の街を廻つて、今度はふたゝび中山門を城外に出て、城壁に沿うて北の方へ走り、そこから天文臺のある山上へのぼつて行つた。自動車道路はずつと山上までつゞき、それは峰つゞきに紫金山へと走つてゐる。明の孝陵と中山陵との二つをとりまいて造られたドライブ・ウエーなので、これを『環陵路』とよぶのである。

私たちは、その『環陵路』をグルグルと帶のごとく、巡り廻つて山上へ出た。南京城を一望の下に展觀するためと、もう一つは、こゝから揚子江の大觀をほしいまゝにしたいといふ希望で。

明の孝陵

天文觀測臺のある山上には、わが歩哨が、儼然として南京市街を俯瞰して、銃劍を脇ばさんで立つてゐる。たゞ一人の歩哨が全南京城を壓して立つてゐるやうなたのもしい姿である。

眼下には、城内の廣場に、蔣が自慢をしてゐた飛行場がある。それをこちらの山上からみるとホンの小さな廣場とより見えぬ。それほど山上の展望は大きい。

丘陵の起伏するパノラミックの景觀の彼方に、ぎんより油を流したやうな揚子江が流れてゐる。近づいてみると黄色ににごつた濁流であるが、かうして山上から遠望すると、不思議にも、それは乳白色の水の流れが、うねうねと帶びのごとく流れてゐて、對岸は雲に入つて見ることが出來ぬ。

私たちは、やがて山を下つて、畠を耕作する農夫のむれを眺めながら、明の孝陵に詣でた。

明の孝陵は、はじめ南京に設けられたが、永樂帝の時、都を北京に移してからは、北京の北方十餘里の昌平州に築いて、いつしか南京は荒廢していつた。しかし支那における陵墓としては、これはもつとも大規模なるものである、この陵墓は、龍脉が二つに分れて平野に落ちこんでゆくその挾間に靜かに眠ることをもつて、萬代の幸福とし、それで子孫が繁昌すると考へて、こゝに

今日設營されたのであるが、今は、どこに萬代の幸福があり、どこに子孫の繁昌があらう。

蒙古から起つた先代の元では、皇陵といふものを營まなかつた。明代になると傳統的な文化を復興し、ことに皇陵の制度においては唐宋の陵墓を參酌して、さらに一層大規模のものを經營したしかしながら今や、誰一人弔ふものなき荒廢の陵墓となり終つてゐるではないか。

その明の孝陵に隣りして、更にやゝ一層高見の展望の利くはれやかな山腹に、新らしく中山陵が設けられてゐる。元來、支那では、宮闕の屋根瓦は黄色にふき、國旗も黄色であり、帝王の服裝も黄色であり、何から何まで黄色をもつて第一とした。これは支那の大地の色からとつたもので、黄色は一般平民の禁色とされてゐる。

しかるに中華民國になると、この黄色をすてて、屋根を青色し旗を青色にした。だから中山陵の屋根瓦は、青一色で葺いてゐる。いはゆる青天白日をシンボルするための青色であらう。

明の孝陵が唐宋以後の傳統的文化を參酌して、大に漢民族のために文藝復興の氣を吐いてゐるのに反して、中山陵はそれらの支那の文化を反撥して、近代洋式の設備にいさゝか支那式を、加味したゞけで、陵墓の規模設營は二者全く相反してゐるところがある。

ことに支那歷代の陵墓は、土饅頭式の山陵であるのに、孫文の中山陵は、孫文の遺骸をミイラにしてそれ等を身大の臥象の中に横たへて、いつても彼の死顔をガラス張りの蓋の上から見ることの出來るやうにしてゐる。これもモスクワにおけるレーニンの墓を模倣したもので、支那式傳統をはるかに超越したものである。

明の孝陵はまづ第一門を入り碑閣をすぎて、橋を渡ると石獸參道がある。臥獅、立獅、臥駝、立駝、臥象、立象、臥麟、立麟、臥馬、立馬が各一對づゝ相次第して立つてゐる。いづれもまのぬけた、滑稽な顔つきをしてゐて、一種の親しみを感ぜしめるのであるが、製作としては、むしろ稚拙て、博覽會などで見かけるまねきの製作とたいして變りがない。

それから石柱が一對、武石二對、文石二對がある。これらを過ぎて石橋三道があり、稜恩門、碑閣、稜恩殿を經て、靈臺に至る。

靈臺、すなはち大規模の墳丘は圓形の土墳であつて、雜樹がその丘上に叢生し、外周には搏壁および御溝が繞らされてゐる。赤壁の搏壁には、こゝを訪れた日本人が無數にらくがきを試みてゐる。おそらく、これほど拙い書はないと思はれるほどの惡筆で、壁全體を樂書してゐることて

ある。

日本人のこの「らくがき癖」はこゝばかりではない、支那の名所舊蹟、到るところにそれが何等の反省もなく展開されてゐる。同胞のこの惡癖は匡正されねばならない。

中山陵所感

中山陵は『博愛門』から、ずつと墓前まで五、六町の前面廣場を青いスレートを敷きつめて、爽快な參道をなしてゐる。それが緩い傾斜をもつて、陵前の高い石段にまでつゞいてゐる。

石段を上つて鐵門がありその中に中華民國十八年六月一日中國々民黨葬をもつて總理孫先生をこゝに葬つた旨の金字塔が建てられ、それの背面に、ミイラにされた孫文の遺骸が葬られてゐるのである。

こゝには『天下爲公』といふ扁額が掲げられてゐる。遺骸を納めた殿舍の左右は杉鉾、丸い灌木、ヒマラヤ杉などが段々の棚をなして趣を添へてゐるのは墳墓といふ感じではなく、しやれた果樹園か近代的な植物園の設計を見るような趣である。そしてこれは國民黨總理の墳墓といふよ

りも、むしろ中山公園の一點景としての記念堂のやうに見える。

揚子江岸の下關から蜿蜒三里の美しい鋪裝道路をこの中山陵までずつと開いた大工事といふものは並々ならぬ努力であつたであらう。紫金山麓の松林に沿うて、これらの鋪裝路が白く伸び、その兩側には鈴懸の並樹が植えられて、すべ〳〵した人の肢體を思はせるような面白い枝ぶりを縱橫に差し出してゐる。それが最後に行き盡した、廣場にこの中山陵が、胸のすくような朗らかさで立つてゐる。まことに近代支那における士木、建築の粹を鍾めた設計であると思はれるのである。

中山陵の東側には、枯林の谷がふかく、そこには革命殉難烈士の墓があり、靈谷寺といふ寺院があり、それらの谷を一望に見下した一つの丘陵には、絢爛たる五彩の柱、屋根をもつた國民政府の首席林森の三階建の別莊が建つてゐる。

しかしながら、私たちは、かの明の太祖廟や、この中山陵などを見物しながら、つく〴〵と考へたことは、支那における帝王の覇業といふものが、いかにはかなき一朝の夢に過ぎないといふ事實である。

明の太祖が、萬世の榮を願つたにもかゝはらず、今日その祖廟を守る一人の支那人もないではないか。蔣介石の國民黨が、いかに雄大善美の結構を極めた中山陵をこゝに造營してみても、十年後の今日は、たゞ一人この中山陵をまつる支那人がないではないか。こゝに至つて、私は『英雄の覇業すべて空し』といふ感慨に打たれざるを得なかつたのである。

まことに支那においては、たゞ一人の英雄が花々しく歴史の舞臺に活躍する場面も少なくないしかしそれはたゞ一人であり、しかも一時的な光耀である。二世、三世にわたつてその花々しさを傳へることはむづかしく、萬世の繁榮を願つて、つひに悲慘な一代の榮華をとゞめるに過ぎないのが、支那歴史における英雄の姿ではないか。

古い明の太祖廟、新らしい中山陵も、今は隣同士にこの支那歴史の悲慘なる沒落のうめきをかこつてゐることにおいては、同一である。

蔣介石一代の覇業も、こゝに孫文の中山陵を造營した時代が峠であつたと思ふ。この中山陵の造られた民國十八年は、今からてうど十年前の昔である。そのころの蔣介石は、潮のごとき勢ひをもつて支那を支配することができた。けれども十年後の今日、彼はもう南京の古都をすてゝ、

奥深く遁竄しなければならなくなつた。それはまことに夢のような、はかなくも短い覇業ではないか。それが支那における歴史の運命であり、支那における英雄の宿命なのである。

支那においては、『ひつきよう人間の事業は短い一代である』といふ道理をもつともよく知つてゐる。さればこそ支那における英雄といふ英雄は、その短い一代を壯嚴するために、もつともはなばなしい木工事業や、建築事業に手を出すのである。

秦始皇が萬里の長城をつくつたり、あるひは阿房宮を造營したりしたのも一代の花々しさを覗つたのだといへるであらう。隋の煬帝が運河を開鑿して悠々舟あそびに興じたといふのも、英雄のはかなき一代の夢を誇つたためだとも思はれるであらう。蔣介石の中山陵造營も、その規模の雄大さにおいては、とうてい秦始皇の阿房宮や、隋煬帝の運河のそれにはおよぶべくもないが、短い一代の夢を滿足させるための覇者の事業として考へるとき、はじめて支那の歴史中における人物の運命なるものがそれと想像されるであらう。

これはこの記者が南京に來て、明の孝陵と、中山陵に遊んで得たところのひそかなる一つの感慨である。

偶像となつ孫文

私は、民國十三年の冬、孫文が廣東から上海を素通りしてわが神戸に來朝し、そこから近海郵船の北攝丸で、始めて北京入りをする時、その一行を、神戸から門司まで見送つたことがある。

國民黨總理として、革命の元勳として、首都北京に乘りこむ彼はおそらく一世一代の得意であつたであらう。若い宋慶齡夫人は、細い華者なからだをぬく〳〵と、長い毛皮の外套で包み、始終、彼の傍にゐた。中將李烈鈞が精悍な顏つきで、甲板を散步してゐたし學者肌の戴天仇君は、リスの樣に小柄なからだを飛び廻つてゐた。

孫文は容貌、風采すべてわが尾崎咢堂先生を一まわり輪廓を大きくしたような男で、激しい革命家の意氣といふものは、どこにも感ぜられなかつた。

一行十餘人、一等船室を全部占領してゐて、私の入るべき室はなく、食事の時だけこの一行と食卓をともにしてゐたが、何しろ船は小さな北攝丸のことゝて、ゴタゴタと混雜し、革命の元勳としては極めてみすぼらしい北京入りであつた。

彼は北京に入るや、まもなく病床に臥し、翌年遂に北京に客死した。私が、孫文と一日一夜を船中でともに暮したのは、私にとつても深い思出であつた。しかし今から十五年前の私には、孫文は革命黨の一亡命論客に過ぎない人物で、貧乏書生に毛の生えたくらゐにしか評價してゐなかつた。宋慶齡夫人に對しても『何だ、孫逸仙は若い秘書ともつかず、夫人ともつかぬ女を連れてゐる』くらゐにしか考へてゐなかつた。

それがどうだ。彼か北京に入つて、あまり好運でもない地位に置かれ、結局、旅先きで窮死したゞしか思はれなかつた孫文が、その死後、俄然として孫總理として金箔附きの崇敬を支那民衆からかち得るやうになつた。これは偏へに蔣介石が、孫文の後繼者として表面に乘り出して來てからのことで、いはゞ孫文は蔣介石に、できるだけ利用されることによりて、蔣介石の立身出世を促進することになつたに過ぎない。

私は神戸から門司の船中で、意氣甚だ振はざる革命の一論客としての孫文を見てゐるだけに、今、南京に來て、中山陵前に立つて、豪壯華麗な彼の墳墓を見て、支那のことは一に宣傳によつて、こんなにも豪くもなるものだといふ皮肉な實例を見せつけられた感じがする。

おそらく日本人として、最後の孫文に親しく出逢つたのは、私位のものであらう。彼はその船で天津へつくなり、まもなく病氣になつて、枕頭にはたゞ宋夫人のみが淋しく侍してゐて、何人にも面會しなかつたのであるから、私は、日本人としては、孫文の最後の旅を見送つた一人である。

そして、十五年後の今日、蔣介石がみづから選定した南京の首都を落ちて、遠く重慶に沒落してしまつた今日、とりのこされた孫文の墳墓には、ミイラになつた彼の遺骸が、ガラス越しに、紫金山にかゝる白雲を眺めてゐるのかと思ふと、多少の感慨なきを得なかつた。

私は、出來るものなら、堅く閉されたこの鐵門を潜つて、孫文の遺骸にアイサツをしたかつたのであるが、往年、瀬戸內海を北攝丸のデッキから眺め渡したやうに、私はモハヤ孫文の傍に近づくことができないのである。何となれば往年の革命亡命者であつた孫文は今日では全くの偶像にまつりあげられて、すべての人間的な交涉を斷ち切つて、この山腹に靜かに眠つてゐるからである。

それが果して孫文にとつて幸福であるかどうかは別問題として、彼は偶像として、蔣介石一黨のために、利用されるだけ利用されたのちに、今では、誰一人、彼のために花をさゝげ、香を燒くものもなく、淋しく古墳の底に眠つてゐるのである。

支那では王侯將相あに種あらんやで、氏も素姓もない無賴漢や、泥棒の類でも、一朝、風雲に乘ずれば天下をとることが出來る。從つて一たび獲得したる覇業を、永久に傳へたく執着するのが、彼等覇者の心理である。しかしながら支那の歷史は、皮肉にも、彼等覇者たちの希望を裏切つて、萬代はおろか、一、二世にして沒落するのが通例である。孫文はその點では、生前中遂に一日も革命總理らしい華やかな生活を經驗することなしに死んでいつた。そして偶像として、彼の生前、夢にも考へたこともない莊麗、豪華な尊敬をかち得たものである。だが、それも今や全く空し。

春は土饗から

一昨年十二月、敵はいよ〳〵、南京城をすてて、落ち去つていく時、蔣介石の居室の壁には、何人とも知れず『一去何日來』といふ感慨を書き遺していつたといふ事である。『一び去らば、

何の日にか來らむ』まことに蔣介石が胸中の感慨、さこそと思はれるものがある。

私は、中山陵附近の枯林を一めぐりして、谷底になつた殉難烈士の墓に行つてみた。中山陵は紫金山の中腹に、見はるかす展望の美しい一境を占めてゐるのに、革命殉難烈士の墓は、わざ〳〵谷底の、つつましやかに目立たぬ枯林の中に、人知れず設けられてゐるのであつた。

孫總理は偶像として大に宣傳さるべきであるが、革命殉難の烈士は、なるべく目立たぬ程度に祀られてゐるべきだといふ意味があるのかも知れぬ。

しかし、私にとつては、これらのものは、すでにぢれもこれも、沒落し去つた過去の歷史の遺物にしか過ぎない。五百年前の明太祖陵も、十年前の中山陵も、ともに支那ではもう歷史の過去の中に沒落してしまつたのである。蔣介石そのものが、もう過去の歷史の中に沒入していつたのであるから、支那革命の理論も、現實も、一切をあげてすべてが『一去何日來』の一片の感慨になり終つたのである。

谷底の枯林の中から、私たちの自動車は、セリあがり裝置の舞臺のやうに、ぬうと見はるかす高見の展望臺へと出た。そこには國民政府首席林森の三層樓の別莊があつた。

私は、この五彩絢爛を極めたけばけばしい、美しい建物が、蔣介石夫妻の別莊であつてくれた方が私の夢を充たすに都合がよいのだが、あの溫厚の林森の別莊では、どうも仕方がない。

破壞ののちの、足のふみどころもない混亂を極めたこの邸內を土靴のままあがりこんで行つたが、そこには壞れた寢臺の破片や、白磁の湯船のカケラや、滅茶々々になつたスチームの殘骸が淺ましく取り亂されてゐるだけであつた。これらのカケラをいくら寄せ集めて、この邸內で行はれた豪華な生活の全體を、夢に描いてみても、主人公が蔣夫妻でなく、溫厚な林森では、ハナシにならない。

丘陵の突端に、ぽつんと建てられた豪華な、痛ましい建物を見て廻つて、もとの中山路へ出て來ると、この合流點に形ばかりの土囊が、一昨年の儘に、この建物を守つてゐる。見ると、古びたその土囊からはみ出した黑土から、一、二寸ばかりのびた麥の芽が、にょきによきと、まばらなアゴ髯のように出てゐるではないか。

春は土囊の中から芽ぐみそめてゐるのである。

一昨年、南京のこのわたりの、敵の建物や、住宅や、別莊などには、急造の土囊が設營せられ

た。

土嚢には附近の麥畑の土をシャベルですくつて無雜作にどし〳〵と詰込まれた、農夫の蒔いた麥種ぐるみ、畑の土は土嚢につめこまれたのだ、去年の春にも、おそらくこの土嚢は、麥の芽を吹いたであらう。今年も、春が來ると麥種をもつた土嚢は、みごりの若芽をヒゲのごとく吹き出して來たのである。大地から切り離された一塊の土嚢からも、かうして麥の芽がのび、春の生命が吹き出して來るのである。

私はヂツと、しばらくは、腐れかゝつた土嚢の堆積から、やはらかい、青いみどりをふいてゐる麥の芽に對して、いとおしむやうな心でながめてゐるのだ。それは私にとつて、生命の强靱さを思はせるよりも、むしろ生命の不思議さにうたれたのである。一粒の麥種は、かくてもなほそのみどりの生命を伸ばしてゆくのである。

春が來ると、荒涼たる戰場にも不思議な姿で、生命が若返つて來るのである。事變以來、やがてもう滿二年にもならう。百萬のわが外征勇士は、國を出たその日からふとんにくるまつて寢る夜は一夜もなかつたであらう。漸く大地に藁を布いて寢れたなら、それが無上安樂なベッドなのである。野に臥し、山に寢ね、大地の呼吸を直接に感じつつ、土とともに生きて來た。その大地に春が芽ぐみそめて來ると、將兵の心にも不思議な生命の躍動を感ずるであらう。私は暗然とした。

光華門外の春

光華門、中華門、雨花臺など、あの日の戰蹟を二日間にわたつて訪れた。

光華門を訪れた日は、春光柔かく、野外の土堤には枯草が温かさうであつた。土堤に兩足をふみのばし、ごろりとあふむけになつて青い大空を眺めてゐると、恐ろしい戰蹟を訪問してゐることを忘れてしまつて、私は春のピクニックに出かけてきたやうな錯覺にすら陷るのである。

歩兵伍長鈴木秀吉郎君、彼は、今どこにゐるかを知らない。彼は南京光華門の一番乘りに屬する部隊に從軍してゐた。そして南京占領第二年目の記念日に當つて、軍事郵便を私に寄せて、當時の感慨を傳へてきた。

『南京陷落の一周年が來ました。私は去年のあの日、光華門に一番乘りをやりました。そして城

門の上で、私たちは男泣きに泣きました』

彼は、名古屋新聞の社員から應召して、脇坂部隊に從軍したのである。この短い軍事郵便をうけとつてから、間もなく、私は中支方面の旅に出て來たのである。出發に際して、私は彼に返事をかいた。

『僕は近く、中支方面へ出かけてゆく。そして、ぜヒ南京を訪づれるつもりである。君が壯烈な戰鬪をやつたその南京は、私にもなつかしく思はれる。そして一年前君が男泣きに泣いたといふ光華門上に立つて、私は遠く君を偲ぶであらう』

實際、私は支那に來て、江南各地を旅行しながら、つねに私の知つてゐる周圍の人たちが、兵隊となつて轉戰してゐる姿を、毎日心の中で描いてゐるのであつた。

私の村の青年は、父の職業の大工と百姓とをやつてゐて、優れてよい青年であつたが、南京城外のある地點で、十二月十四日戰死してゐる。私はこの青年が、村の小學校に通つてゐるコドモの頃からの成長の姿をずつと見つゞけて來た。白茆口上陸軍に參加し、北支から揚子江南を每日進軍した途中の行動を、斷片的なハガキのたよりで聞き知つてゐるので、それらをつなぎ合せて

この一人の上等兵が、最後に戰死するに至るまでの狀況を、いろ〳〵に思ひ綴つてひそかなる哀愁の涙にくれるのであつた。彼が每日ふりつゞく雨に苦しみ、泥濘の惡路を進軍しつゝあつた姿が、私にもハツキリと思ひ浮かべられた。

汽車で私が無錫を通過した時、沿道に、青い野菜畑がつゞいてゐるのを見て、私の村の青年はこの橋のわたりに焚火しながら、濡れた戎衣を渴かしてゐたのだと考へた。そしてこの野菜畑のホウレン草を摘むできて、夕餉のおかずにしたのだと考へたりした。彼は一個のキヤラメルを頰張りながら進軍また進軍、追擊また追擊した。そして怒濤のごとく打ち寄せる大軍の激流中に、たゞ一個の粟粒のごとき姿で、彼は紫金山麓に進出した。そして彼は、南京城に入城する一寸前になつて、城外で戰死した。

私は、紫金山麓の梅畑の、あちらこちらに塹壕がうね〳〵と蛇のごとくのたうち廻つてゐるのをみて、彼はおそらくこの邊まで進出してゐたかも知れない。いや、モツと後方、句容の山中であつたかも知れないなどと考へた。

とにかく、私の鄕里の一青年がこの聖戰に召されて、若い一個の兵士として、南京附近の戰場

に埋もれていつた事實は、私が南京に來て、美しく襟帶する山河を眺めるに及んで、湧然として一種の哀感を私に喚び起させるのであつた。

光華門内の城壁下には、鐵條網を張りめぐらして五、六坪ばかりの黒土の堆土を、嚴重に守つてゐる。

堆土の上には、彼我の種々形式の異なつた砲彈が置かれてゐる。壞れた鐵兜がある。白骨になつた大腿骨らしいのが二、三、土の中からはみ出してゐる。軍服の一片と思はれるものが腐つたまゝで堆土に交つてゐる。この城門における壯烈な戰闘を記念するために、特にわが軍憲によつて戰跡記念として保存されてゐるのである。

城門と城門との間に、城壁にかこまれた空地がある。光華門は内外二重の城門になつてゐて、外城をくぐつてすぐに内城門がある。それを兩翼で連絡する城壁が堅固に突つ立つてゐるので、門内の空地は四角なポケット地帶になつてゐる。

脇坂部隊の伊藤隊は、外城から突入して、このかこまれたポケット空地に出た。敵は城壁上の四方から、谷底の空地に向つて猛烈な攻撃を加へた。サンタンたる戰闘が展開された。この空地に伊藤部隊長戰死の碑が建てられてゐる。香煙縷々として、賽するもの相次ぐ。

雨花臺の雨

中華門外の雨花臺には、雨が降つてゐた。江上を吹きあげる風が雨が含むで、横なぐりに頬を叩くので、外套の襟を立て、帽子を押へて、山上のこゝかしこを歩き廻つた。累々たる白骨が、群をなして山上のそこゝに、散らばつてゐた。凄慘の限りである。

この山上からは、中華門が脚下に展開してゐて、味方の攻撃には屈竟の足場であるべくみえた雨に煙つた南京城は、微茫として、はてしなき灰色に包まれてゐる。

中華門の内外は、密集した支那人家屋が多く、雨中を雜踏する支那人の往來は驚くばかりに多い。城内にはカラカサ屋があり、米屋があり、問屋があり、酒屋がありたいして賣れさうもない店舗が、左右にぎつしりと軒を並べて、のんびりと店の中に立つてゐる。赤玉のかんざしをさして、よち〳〵と蟹股に歩いていく支那女も、南京らしい光景である。一石もはいるかと思はれる青磁色の大きな酒壺を三つも並べて、布帛をかけ、その上に朱塗りの盆で、蓋をした酒屋の店が

いかにも支那らしく『信大長酒莊』といふ酒家の金看板も堂々たるものである。

私たちは吉田初三郎畫伯ものするところの南京域の鳥瞰圖と、それに刷りこんだ案内記をたよりにして、秦淮河のほとりへ出た。

揚子江の水をひいた秦淮河は、廣い堀割をなして、域内の一角に、昔ながらの歡樂境をつくりあげてゐる。堀割の行き盡くしたいきあたりの廣場に、小さい六角堂があつて急傾斜をなした屋根が軒先きまで、下つて來て、その餘勢で、ぴんと空へはねあげてゐる屋根の具合が、この建築を、いかにも巧みな、好もしい構造に見せてゐる。それを背景にして二、三枚の記念寫眞をとつて貰つた。

南京のかねもちが、この秦淮河に船を浮べて遊興するのが、こゝの名勝の一つになつてゐるが水に臨むだ大小の妓樓も、今は敗殘のあはれな姿をとゞめるばかりで畫舫を浮かべる游客もなく黑ずんだ、淀んだ惡水に、塵芥が一杯に浮かむでゐるやうな、汚ない堀割では、絃歌の水に、さんざめくなどは、とうてい想像もされない。それでも表の大道には、兩側にぎつしりと妓樓が軒をならべ、二、三の戲場（活動常設館）などもあり、油臭い飯店などもあつて、さすがに、さかり場らしい雜踏を見せ、その間に、化裝の支那女が、客を引いてゐる景色も、歡樂境らしい。

饐え、腐つてどろ〳〵に汚れた空氣の中をゆくことは、潔癖な日本人には、とても鼻もちのならぬ醜穢なものに思はれ、そこ〳〵にして遁げ出していつたが、南京情緒の一面をのぞいただけに、結局よい見學をしたといへるであらう。

あくる日、南京を立つた日は、朝から雪であつた。珍らしい牡丹餅雪が、忽ちのうちに滿都を埋めて、ふりかへる紫金山上は、時ならぬ雪の上衣を着て、みちがへるばかりの、美しい眺めである。

春光の柔かい一日をゆつくりと南京に遊んだ翌日は雨であつた、雨のすぎた翌日は雪がきた。私の僅かな南京滯在を、いろ〳〵な氣象の變化で、莊嚴してみせてくれたことを、私は心から喜んだ。

下關の港にきて、揚子江の濁流をみた。こゝから對岸の浦口までは、船で十五分間位で連絡する。揚子江下流の流域では、こゝの下關と浦口間の河幅がもつと狹いといはれる。河口から二百

浬ものぼつた上流であるが、潮の干滿はここまで影響し、日々、潮流の加減によつて河水は一、二尺ぐらゐは上下するといふし、海から遡江する魚類は、タイテイこゝまでやつてくるといふ。鮫だの、鱶だのといふ恐ろしい海魚が、江上に押流される支那兵の死體を尋ねて、このあたりに出沒するのである。私の南京に關する印象は、まことに忘れ難い、なつかしいものであつた。

北京におけるあの落ついた美しさの味に似たものを、私はやはり南京において味はふことが出來た。それは古い特殊の文化をもつた首都の風物が、何ものにも損傷されないで遺されてゐるからであらう。あはただしい歷史の變化をうけて、南京は今新らしく立ち上らうとしてゐる。けれども、そこに住む支那人はあくまで悠然として、新らしい歷史の意義を、みづから體驗し認識してゐるとはいへない。こゝには歷史を超越したる民族が、悠々として、みづからの小さい平和な生活を營むでゐるのである。その無關心さが、あくまでのんびりしてゐる。それが好もしい支那の性格である。

隋煬帝と運河

鎭江から、江を渡つて、對岸の楊州へいつて見たいものだと考へてゐたが、目下、楊州附近は敵の敗殘兵が出沒して、ちよつと危險であらうといふものがあり、何となく心をひかれる思ひをしながら、遂に楊州行を斷念した。

江都縣城楊州の周圍は、內城と外城とがあつて、外城は延長十支里にわたり、その昔、倭寇に備へるために築かれたものであるといふ、目下人口十二萬、江北沿岸における殷賑の都會である。さきにもいふ通り、揚子江の名稱は、この楊州から來てゐて、楊州の名は、もつとも早くから外國人の間にも聞えてゐた。

けれども、私が楊州に心をひかれるのは、こゝが揚子江の船附場として、この港が、今日の上海のやうな地位を占めてゐたといふだけではなく、こゝが支那の二大土工事業である大運河の重要な基點であるといふ事實に關してである。

江南の鎭江から運河は南にのびて杭州へ達し、江北の楊州からその運河は北にのびて洛陽、長安に達し、さらに北京へ通じてゐる。すなはち運河はこゝで揚子江を南北に橫斷してゐるのである。それが今から一千二、三百年の遠い昔にこの運河が開鑿されたといふ事實に、私は驚嘆する

のである。

隋煬帝が即位した大業元年には南方の林邑には珍らしい金寶器物があるといふので、歩騎萬餘を遣はして林邑を經略せしめてゐる。

林邑は今日の海南島附近からインド支那にわたる地方で、正月、隋の軍隊はその海口を占領してゐる。そしてその三月には都を洛陽に移して、そこに東京城を造營した。この洛陽の東京城經營のためには、二百萬人の土工を驅使し、天下の富商數萬戸をこゝに强制的に住居せしめた。天下の人材と富豪とを都城に集中せしめることはいつの時代にありても支那における帝王の覇業を成就するための第一要件であつた。

今日の支那事變では、支那の人材と富豪とはいづれも蔣政權に從つて奥地に遁竄したり、あるひは香港、上海などへ遁げてゐる。これらの人材と富豪とが、汪政權下に蝟集するのでなければ東亞新秩序の創建は緒についたとはいはれない。

三月、洛陽都城を建設するとともに、大江の南、五嶺の北から奇材異石を洛陽に集めたり、海内の嘉木異草、珍禽奇獸を求めて、宮廷に植物園や、動物園をつくつて、それらを樂しんだ。煬帝のかうした帝王の權力慾がます〳〵盛んになつた揚句が、例の運河開鑿の大事業となつたのである。

まづ淮南、淮北の郡民數百萬を徴發して通濟渠を開いた。この時洛陽の東京城には思ひきつて廣い庭園の周廻一百二十六里の間に、垣根を造りその園内に水をひくために運河を開鑿したものであるが、遠い昔、禹の時代に一旦、開鑿してそのまゝ土砂に埋もれてゐた刋溝をひらいて長安から洛陽へ通水せしめ、それをさらに掘り續けて江都縣の楊州まで通じた。

この通濟渠の運河の河幅は、廣さ四十歩といふのであるから、十三、四間はあらう。運河の兩岸には掘り上げた泥土を築いた廣い堤防を造つた。堤防の上には立派な道路を通じこれを『御道』と稱し兩岸に楊柳を植ゑた。かくして長安から揚子江の江都（楊州）に至る數百里の運河がひらけ、その間に四十餘の離宮を設け、さらに煬帝がみづからの乘船『龍舟』をはじめとして雜船數萬艘をつくらせて、運河に浮かべることにした。彼の遊覽癖は、帝王の權力を背景として、あくなき賦役を人民に課し、その課役に徴されるものが數百萬人の多きに達したが、あまりに工事の督促が嚴しいので、十中の四、五は苦役に倒れて、死者道に溢れるといふ慘狀を呈した。これら

の死体は車にのせて鄭州の東、城皐といふところへ運び捨ててしまつた。

私がナゼ、こんな支那の古い歴史の一片をとりあげて、こゝに管々しく運河開鑿のいはれを書くのかといへば、支那にありては古往今來、その帝王といふものが、いかに自己の權勢と享樂とのために人民を搾取誅求するかといふ一例を隋の煬帝に見出さうとするからのことに過ぎない。そしてその結果は、いふまでもなく悲慘であつた。サンタンたる英雄の末路とゝもに、ここに遺されたのが、偉大なる運河であつた。

資治通鑑

私は、快走する列車の座席から稚移する窓外の景色を眺めながら膝の上では、取りとめもない書册を、あれこれと走り讀みをしてゐるのである。讀みながら眺め、眺めながら讀んでゐるのである。

疎林が層々として重なりつゞく廣い大野のはてに、一條の糸のごとく、白い揚子江が流れ、その上には白雲が亂れとんで、鈍い光りが江上をほの紅に染めてゐる。近くの野良には、驚が一羽

沼に下り立つた。白い翅をすぼめて悠々と大きく旋回しながら、ふわりと沼に舞ひ下りた。それを見つけると、私は、ばたりと讀むでゐる書物を膝の上に伏せた。そして、ぢつと移りゆく窓外の景色を眼で追ひながら、心は、書中の記事に吸ひこまれてゆく。それが今、こゝに書いてゐる隋の煬帝の、通濟渠開鑿に關する記事なのである。

私は廉價本をもつて有名な上海商務印書館藏版の『資治通鑑』の卷一百八十『隋紀』を讀んでゐるのである。

そも〳〵揚子江を語るためにはそれを南北に貫く運河を語らねばならぬ。運河を語るためには隋の煬帝におよばねばならぬ。そこで私は、資治通鑑の隋紀を特に車中で讀まねばならないといふわけであつた。

大業元年八月煬帝は、洛陽から運河によつて江都、すなはち今の楊州に遊んだ。けしからぬことには『資治通鑑』は『上行幸江都』といふ文字を用ひてゐる。『上江都に行幸す』と讀むべきであらう。『上』といひ『行幸』といひこの暴虐飽くなき帝王に對して、この記者は無上の敬語を用ひてゐることである。

『私は日本人的な潔癖性で、ひどく、この僭上な文字が、けしからぬものに思はれてならぬのである。しかし、そればかりではない。その次ぎには『王弘遣龍舟奉迎』とある。かねて煬帝の命によつて造つて置いた乘用船を、王弘がひき出して『奉迎』するといふのである。『龍舟』といひ『奉迎』とひ、われら日本人の皇室に對し奉る場合にのみ、特別に用ふべき最上級の文字を資治通鑑の記者は煬帝に對して、實に無雜作に驅使してゐることである。

さらに奇怪なのは、その『龍舟』なるものである。『龍舟は四重高さ四十五尺、長さ二百尺』その最上層の上重は正殿、內殿、東西の朝堂があり、中の二重は百二十房があり、皆金玉をもつて飾る。下重には『內侍これに處る』とある。堂々として華麗を極めたものであつた。

この正殿といひ、內殿といひ、東西の朝堂といひ、內侍といひ、これらの文字を讀んでゐると私は日本書紀でも讀むでゐるような感じをうけるのである。これらの文字は、隋唐時代の支那からわが國に輸入されて、久しくわが國史の上に繰りかへされた文字で、それは日本的な特殊の尊嚴さをもつてゐる。そして支那の帝室などでは使用してはならないコトバだと考へてゐたのであるが、それが、支那の古典籍中に、かくのごとくザラに出て來るのを發見して、私は今さらのごとく唖然としていふところを知らない。

しかし、これを反面から見るとわれ〳〵が日本特殊の尊嚴さをもつたこれらの敬語、敬稱、または宮殿內のある宮室の名稱が、いづれも、ある時代に支那から輸入されたことを實證するもので、日支文化の交涉の甚だ悠久であることを知るに足るであらう。

そはとにかく、煬帝は、かうした壯麗な乘用船にのり、皇后、後宮、諸王、公主、百官、僧尼道士、蕃客を夫々の船に乘せて、數千艘の船を並べて運河を下つた。その船頭、船夫だけでも八萬人に達したといはれるから、この舟遊びが、いかに支那式のトテツもない大がゝりなものであつたかゞ分るであらう。これらの舟が舳艫相接すること二百里、赫耀たる光りを放つて運河をすべつて行くと、兩岸には騎乘の兵士が、旌旗をひるがへして華やかに警備の進軍をする。その旗が山野を蔽ふといふのだから實にすばらしい光景であつたに違ひない。

しかしながら古來、支那の帝王といふものが、いかに自からの生活を享樂するためには、人民を誅求したかといふ事實を、煬帝をかりて、もう少し述べて見る必要がある。

實に支那的性格を如實に把握するためには、それはもつとも必要なシゴトと信ずるからである

煬帝がこの運河の舟遊びをやるためには、過ぐるところの州縣五百里内の地方に命じて山海の珍味を献上せしめた、それがあまりに豊富で、遂に食べきれなくなり、しまひには見るのにも飽きて出發の際にはみんな棄てゝこれを埋めたといふ。まことに勿体ないゼイタク沙汰であつた。

江都離宮の悲劇

煬帝は楊子江岸の楊州が、心から氣に入つたと見え、こゝに離宮を設けて、洛陽の帝都へ歸らうとはしない。長安には西の京があつたのを、それを捨てゝ、洛陽に東京を造營して移り住んだが移り氣の煬帝は、さらに南の江都に心を奪はれた。

當時、隋は、朝鮮の高麗征伐をやつたが、その結果は失敗で、煬帝は心面白からず、大業十二年の末つ方、幾たび目かの江都行を行つた。洛陽の帝都を出づる時、宮人に留別の詩をのこしていつたのも虫のしらせとでもいふべきものであつたらう。その詩には『われは江都の好きを夢む、征遼また偶然ならんや』といふコトバがある。江都は、いふまでもなく

楊州のことである。

煬帝は、わが國の推古朝の時代に當り、聖徳太子の攝政されてゐた頃であるから、一千三百餘年前の古い昔のことである。遣隋使小野妹子が『日出づる國の天子、日沒する國の天子に書を致す、恙なきや』といふ堂々たる國書を携へて煬帝の朝廷を驚かしたのは、有名な物語である。

しかし、大業十二年の煬帝は、全く政治に倦み疲れて、朝政をみるといふこともなく、天下は騒然として、盗賊横行し、突厥は侵入し、彼の左右の廷臣は悉く煬帝に背いて、西に歸らんことを願ふといふ狀態であつた。そして煬帝は全く自暴自棄に陷つてゐたらしい。『荒淫ます〳〵甚しく、宮中に百餘房をつくり各々供張を盛んにし、實に美人をもつてす、日に一房をして主人たらしめ』これを歴遊して飲み廻るといふしだらのない遊びぶりであつた。

江都の郡亟、趙元楷といふ男酒饌を饗應すると、彼は蕭后および幸姫と〻もに宴飲し『酒扈不離口、從姫千餘人、亦常醉』と資治通鑑の記者は述べてゐる。のむで〳〵飲みつゞけて、酒觴が口を離れたことがない、これに從ふ千餘人の後宮の美姫もまた醉つぱらひづめであつたといふのだから、その醜態もまた極まれりといはなければならぬ。

しかし、こんなだらしのない遊びをつゞけてゐる中から、フト、天下の危亂を見ては、ぢつとしてをれないで、何かしら不安にかられて、宮中をこつそり脫け出し、短衣に身なりを代へて、杖をつきながら、遍ねく臺館を歷つて、何か異變がないかとおづ〳〵と、深夜に至るまでうろつき廻ることもある。自墮落に身を持ち崩しながら、なほかつ小心翼々として、天下の異變、災害の到來に恐れおの〳〵いてゐるのである。

さうかと思ふと每晩、酒を飮みながら、獨り仰いで天文を視て、みづから悶々の情を酒に紛らしては泥醉したり、鏡をひきよせて自分の姿を映して見て、蕭后を顧みて『好い首ぢや、誰かこの頭を斬る奴がある』と、うめくようにいふ。はては、から〳〵と大笑して『貴賤苦樂は互ひに入れ代るのが世の中ぢや、何をくよくよ心配する必要があらう』。さういつてみづから平然とする。全くもつて普通の沙汰ではない。

揚子江上の濁波が、江都の離宮からみると、いつもの通り、けふも、もの憂げに流れてゐる。冬のある一日、晝昏く、風のない午後はたして叛亂が、その左右から起つた。

煬帝は衣服を易へた。スバやく變裝して西の殿閣へ遁げた。叛徒は兵を率ゐて左の殿舍を押開いて進入した。魏氏といふ後宮の美姬を囚へて、煬帝の所在を聞くと、美人は指さして敎へた。叛徒の行達といふ男は拔刀して直進する。扉の窓に煬帝の影がうつる。行達は刀を提げて、さらにその影を追ふ。ふりかへつた煬帝は、愕然として、そこに立ち止まつた。『お前は、わしを殺すつもりか』。突き刺すやう鋭い聲である。行達は、思はずハツと立ちすくんだ。

とにかく、その場から煬帝は、再び寢殿に連れ戻され、虞通、德戡等の左右のものは、白刃を拔いて侍立する。煬帝は『わしに何の罪があつて、こんなことをするのか』と歎ずるが、もうおよばない。

愛子の趙王杲といふのが、當年十二歲であつた。恐怖のあまり、父の傍らで號泣してやまないので虞通は白刃を揮つて斬つてしまつた。その血が煬帝の服にしぶきかゝつた。さらに煬帝を弑しようとすると、『わしの死にはおのづから法がある。鉾刃を加へてはならぬ。鴆毒を持て、毒酒をもて』と呼んだ。

だが、賊黨馬文擧はこれを許さない。やむなく帝は、練絹の布を腰からぐる〳〵と解いて、それを行達に授けた。行達はそれを煬帝の首にまきつけて、力に委せてぐつとつよく曳いた。

煬帝、時に年僅かに三十九歳。この悲劇の後にのこされたのが今も長江を南北に横斷する一千數百里の運河である。

水郷蘇州

揚子江の水は黄濁してゐるので有名である。この水が、このやうに黄濁してゐるのは、もちろん上流から多量の泥土を運んで來るためであるが、この泥土は宜昌上流における破壞作用によつて造られたもので、それより下流においても、多少の泥土は削り取られてあらうが、それは極めて微量であつて、ほとんど影響はない。揚子江の濁流をなすところの泥土は、四川省の成都平原を形成する土壤である。われ〳〵は揚子江の濁流を見て、それが四川高原の土壤であることを考へるとき、實に不思議な驚異に打たれざるを得ないのである。

黄河沿岸の黄土層は、風につれてそれがこまかい粉末となつて、濛々たる砂塵をなして、天空に飛散するのであるが、揚子江沿岸には、さうした黄塵萬丈といつた景色がない。空氣があくまで清澄であつて、天空はつねにからりと晴れ渡つてゐる。たゞ長江の流れる水は黄濁してゐるが

大小幾百の流れざる沿岸の湖沼は、水の青さで、美しく澄むでゐるのである。つまり流れるものは濁り、動かざるものは澄む、これが支那における水である。

揚子江三角洲地帶の中央に、支那第一の太湖がある。面積は二千二百平方キロで、わが琵琶湖の三倍ほどの大きさである。湖上には洞庭山をはじめとして、幾多の島があり、湖には魚介類が多く、漁業は盛大である。太湖沿岸の農業は、かゝる肥沃な農土の上に、多くの農作物があつて米だけでも三千萬石から四千萬石の收穫がある。全日本中の米産額の五割から六割に達するものである。

が、この太湖沿岸の、つまり江蘇、浙江兩省から生産し、その上にまだ三百萬ピコルの棉花が生産される。これら農産物の輸送のために、太湖の水運がひらけ、それから縱橫するクリークの水路が發達して來た。するとまたこの豊饒なる農産、水産物の掠奪をめあてとして湖上には昔から湖匪が生れ、海賊が住み、今度の事變以後になつてからは、沿岸の村落を根據とする敗殘兵が根を下して、もう三年さきの租稅までも徵發してゐるといふのもある。すなはち太湖をめぐる東、西、南の地域は、敗殘の敵中央軍數箇師團新編第四軍をはじめとして、多數の敗殘兵、遊擊隊がウヨ〳〵と蠢動してゐるのである。

私たちは一日、上海から、その太湖の東北隅の一角にある蘇州をガソリンカーによつて訪れた。上海から蘇州を經て嘉興まで、毎日上下三回づゝ、ガソリンカーが往復してゐる。それに上海から蘇州までは、約一時間四十分の短距離で、一日の野外散歩としては、もつとも好適な地位にある。私たち一行は、宇崎、堀場、小島など、上海支局の諸君を動員して、水入らずの樂しい早春のピクニックを蘇州にこゝろみたのである。

慾をいへば、蘇州からもう少しく脚をのばして『吳江』の都にいで、そこで太湖の風光を滿喫し、さらに行く〳〵、湖畔の水をすぎてガソリンカーの終點嘉興まで行つて見たかつたのであるが、上海からの『日がへりの旅』にしては、これはちよつと遠きに過ぎ、途中で一泊するにしても、蘇州以外の地では不自由でもあり、ことに私のそこに行つた頃は、嘉興西北方の敗殘兵が、ソロ〳〵動き始めて、毎日、敵襲があるといふので、多少危險に感ぜられるふしもあり、結局、上海からの日がへりの旅としては蘇州を見て廻るだけで止めておくのが一番安全なプログラムであつた。

支那にいつて、しばらくすると私たちはいつしか水の水らしい美しさを渴望する、それが一つのたまらない欲望となつて、次第に抑へ難いものにまで募つてくる。これは無理もないことで、明けても暮れても、どろ〳〵に濁つた水ばかりを見てゐると、いつとはなしに美しい青い水を見たいといふ鄕愁に似たものを感ずるのであらう。しかしこれはひつきやうわれ〳〵のやうな、まだ初步の支那旅行者の、誰でも感ずる第一印象らしいのである。そこで蘇州に來て、太湖の青々と湛へられた水を見ると、はじめて日本らしい水の美しさに接して、われ〳〵はぼうとうれしくなつてしまふのである。

蘇州は大運河と、蘇州河との分岐點になつてゐて、昔は吳の國都であつたので、こゝの別名を『吳都』ともよばれてゐる。人口は約三十五萬、支那美人の產地として天下に有名である。上海の中央を流れる蘇州河は、こゝから發源してゐることはいふまでもあるまい。

寒山寺の鐘聲

流れるとも見えぬ、緩やかな水に抱かれた古い水の都が蘇州である。橋から橋へと狹い路に架けられた太鼓橋は、姑蘇三千六百橋といはれてゐる。少し大げさすぎる形容ではあるが、水路が

多く、橋の多いことは事實である。何しろ今から二千年前の、春秋時代からこゝに吳の都があり、さらに南方杭州附近の紹興には越の都があつて、互ひに覇を爭ふたり、あるひは『吳越同舟』で、このわたりの水路を漕ぎ渡つてゐた風景も、なつかしく偲ばれることである。

しかしながら古都としての蘇州は、すでに早くから荒廢に歸してしまつた。唐の李太白がこゝを訪れた時には、もう舊苑、荒臺はあれるがまゝに荒れはてて、楊柳のみが新たに春の芽を吹きクリークには菱の實をとる農夫の歌がのんびりと聞こえて來るといふだけであつた。唐詩選の中には、李太白の蘇州に遊むだ懷古の情が彼一流の哀傷にみちた美しい詩になつて殘されてゐる。

黒い瓦をもつた屋根と、風雨にさらされた、汚れた白壁との櫛比する間を、狹い水路が貫いてゐて河には荷船が密集してゐる。さうした街を西南にはづれて、驢馬のひく古馬車にのつて郊外へ出た。寒山寺へ詣でるのである。

姑蘇城外の寒山寺は、支那人よりも、むしろ日本人の間に有名である。『月落ち烏啼いて』のアノ寒山寺の古詩が、日本人の間では特に有名だからである。

今の寒山寺は、明治四十四年に江蘇の巡撫、程德全が重修したもので日本の遊覽客が多く、荒廢に歸せしめるのも惜しいといふので伽藍を新築したものである。だから寺觀の俗惡なことは申すまでもなく、詩心を動かすほどのものはない。たゞ、こゝでは庭の槐樹に、烏の大群がとまつてゐて、それが庭全面に、パッと一時に飛びちるのは、いかにも烏の寒山寺らしい趣きがあつて珍らしいと思つた。

南京では黒い翅のまん中に、白斑のある烏があつて、それがパッと翅をひろげて、空に飛び立つ時には、てうど蛇の目傘をひらいたやうな美しさであつたが、こゝの寒山寺の烏は、日本と同樣、黒一色の烏で、別段變つたところはないが、それが、無數に群棲してゐて、庭を離れないのが特色である。

しかしこの寒山寺は、日本人に剔染のふかい例の石ずりの張繼の詩から生れたもので、しかも寺が最初からこゝにあつたわけではなく、蘇州には、別にこゝから一里ばかり隔たつた府城の西に、楓橋鎭といふ宿場があつて、そこにも寒山寺がある。楓橋鎭にある寺だといふので、その寒山寺は一名楓橋寺ともよばれてゐるが、何の景色もない田舍の宿場で、わざ〳〵見に出かけてい

くほどのこともなく、行つて見てかへつて失望する位なものである。そこでそちらの方の寒山寺は、そのまゝにして、いつしかこゝにも寒山寺ができてしまつたのである。寺の前にはクリークがあつて、それに石の高い太鼓橋がかゝつてゐて、これが今日では楓橋といふことになつてゐるこの橋のわたりに漁舟をつないで夜半に寒山寺の鐘聲を聞いたなら、月落ち烏啼く情景が、まざ〳〵と浮むで來るかも知れない。いづれにしても名勝舊蹟などといふものは、どこが本家本元であるか、それがほんものので、どれが模倣であるかが分らぬ。もし、まじめに詮鑿して行けば、本ものも、模倣もなく、すべてが空虛に歸してしまふであらう。こゝの寒山寺も、その一つで、アテにならないものの代表的な見本ではあるが、もと〳〵、張繼夜泊の詩から生れた詩人の夢が、文學的な興味をよむで、寒山寺が生れ、鐘樓が生れ、楓橋が生れ、烏までが飼養されて來て、それらをもとでにして、石ずりのみやげものに價格が發生して來るのである。

とにかく、私は、烏の群棲する寺の庭を横切つて鐘樓にのぼり、綱を曳いて、靜かな白晝に一つ、ぐわんと鐘を鳴らしてみた。それが高塀を越えて、陰々とうなりながら、遠い野面の彼方に消えてゆくので、いかにも詩趣らしいものを覺えた。この寺は、ほんものの寒山寺ではないと思

ひながら、鐘の音はたしかに美しかつた。落葉に埋れた寺の庭にはカサコソと枯葉が舞ひ、裏の畑には白菜が青く肥えてゐた。

寒山寺の鐘

寒山寺の古鐘は唐の張繼が夜泊の詩の中で詠じてゐるやうに、まことに印象的なよい音であつたに違ひない。孫覿や、陸放翁なども、やはりこゝの古鐘を、詩中に詠じてゐるところをみると夜半の鐘聲が、殷々として、野面を渡り、クリークを越えて響いて來るのは、甚だ詩的感興の高いものであつたであらう。しかしこの古鐘は、いつの時代にか、日本に渡つて來て、行先が不明になり、山田寒山といふ坊さんが、その行方を探すために、日本中を廻國して、隈なく尋ね歩いたが、どうしても見當らないといふことである。日本へ持つて來て、鑄潰してしまつたものか、それとも今もなほどこかの山寺の梵鐘として吊るされてゐるか、それは分らない。

私がものずきに撞いてみた寒山寺の現在の梵鐘は、伊藤博文公が、明治二十八年四月、日清戰爭の講和談判が成立したころ、新たに鑄造して寄進されたものである。日清平和の手打ちとして

梵鍾を寄贈されたのが、甚だ床しいことに思はれるのである。今度の支那事變が、いつの日にか終結したなら、平和記念の大梵鐘を鑄造し、上海の古戰場あたりに一寺を創建して、そこに吊して朝な、夕な鐘の音ごとに、戰場に倒れた勇士を偲ぶといふやうなくわだてをする優しい政治家や、武將がないものであらうか。伊藤博文公が、寒山寺に梵鐘を寄附した因緣を思ひ出して、さしむき近衞文麿公あたりが、この事變のために、一つ梵鐘を鑄造するの大願を起して貰ひたいものだと思ふが、どうであらうか。

蘇州の郊外は、ひろ〳〵と農地が展開されて、その間を縱橫に水路が走つてゐる。その水路には帆船があり、苫船があり、岸に繫いでゐるのもあれば、全く平和な水鄕である。それらのクリークの岸には、藁をひろげて、せつせと馬糧をつくつてゐる。皇軍部隊に納入するための支那農夫のいとなみである。廣い練兵場には、日本軍が教練をやつてをり、土饅頭の起伏する郊外にはわが日本兵が、のどかな日光の下で、野外演習をやつてゐる、もうこゝが支那だといふ感じがなく、日本內地にゐるやうな安心さである。

大體、上海から蘇州までは、一望遮ぎるものゝない平野が展開してゐて、山もなく、丘もない昆山といふ驛外には、一握の土塊を摘み捨てたやうな小丘があるが、この小丘が、たつた一つの山らしい山で、例の支那人はこの山が餘程珍らしかつたとみえて、命名するにことを缺いて、支那第一の名山昆崙山の名をとつて、これを昆山と名づけたのである。最小の丘に名づくるに、天下最大の名山の名をもつてしたところが、甚だ滑稽である。それほど上海附近は大平野の展開であつて、山といふものをみない。ところが蘇州まで來ると、さしもの廣い平野が盡きて、次第に山らしい山がみえ出してくる。一連の山々が重疊して、單調な平野の景觀を破つてゐるのである從つてこのわたりから江南の風光は、山と水との變化を加へてゆつたりと雄大さを示して來るのである。

私は、さうした蘇州郊外の坦々たる道路を、馬車を走らせて、突兀たる一つの丘の麓に來た。丘上には傾きかゝつた十三層の石塔が立つてゐる。虎邱寺といふのである。

虎邱のある麓の街は、狹くして細い。そこに一軒の茶館があつて煤びた黑い家の中一杯に、卓子を置いて、數人の游閑子が、悠々と茶を飮みながら、行人を眺めてゐるのに、何かしら、心をひかれるものがあつた。小さい、平和らしい幸福が、しつくりと彼らの生活に一致してゐると思

はれたからである。およそ、支那人の幸福といふものは、終日、なすこともなくして、茶館の倚子によりかゝつて、悠々閑々、太平樂をならべてゐるところにあるのではないかと私には思はれる。彼等は活動の幸福よりも、休息の幸福に、より多くの生甲斐を見出すのである。無爲、寂靜虚恬といつたあらゆる消極的な幸福の中に、人生の意義をみてゐるのが、彼等支那人である。だから支那の民衆ほど、非活動的にみえるものはない、彼等は自分といふもの以外のものについては何等の興味を感じないのである。從つて支那事變の渦中にある彼等民衆なるものは、この戰爭について何のかゝはりも感じてゐないのである。茶館の卓子によつて、終日をのんきに話し暮らしてゐることが出來れば、彼等はそれで十分仕合せなのである。

蘇州城門の敬禮

虎邱の丘上にある古塔を仰いでゐると、支那といふ國の古び、よごれた歴史を、痛ましく私に感じさせるのである。こゝには秦始皇を繞る、さまざまな怪奇的な傳説はあるが、私には一向興味のないものであつた。

こゝの庭一杯に『千人岩』といふのが横たはつてをり、懸崖の下には『劍池』といふのがあり巨大なる岩石をもつた庭の風趣もまんざらではないが、むしろそれよりも、支那の子供の乞食のむれや小娘の客引きや、もの賣りの執拗な、うるさい襲撃にうむざりしてしまつて、支那では名勝風景を訪れることの嫌惡な、厭はしさで一杯であつた。

支那の民衆が、いかに低い、貧しい生活のどん底に喘いでゐるかは、これらの子供の押賣りによつても想像することができる。彼らは日本人とみれば、忽ち蠅のごとく、どこからか集つて來るのである。

ちよつと、よい顔をみせたが最後、あくまで執拗につけ廻して、貧しいタバコの二三や、ミカンの四五を容れただけの手籠の商品を押しつけて來るのである。遁げても、避けても、何町でもついてくるのである。この支那人の押のつよさと、あつかましさは何千年間の難民的生活に鍛錬された結果の民族的性格で、氣の弱いたいていの日本人は、結局、彼らに壓倒されて、根まけしてしまうのである。

これが支那人の商賣の上にも、政治の上にも、外交の上にも、現れるところの民族的特長なの

である。そしてこれはまた、偉大な、逞ましく、強靱な生活力を、支那人に植えつけてゐるのである。

・

從つて外交的に鍛錬されてゐないわれ〳〵日本人のごとき、氣の短いものは、かんしやく玉を破裂させて、鐵拳をふりあげてなぐりつけるか、ステッキで追つ拂ふか大聲でどなりつけるか、さうした手段にでも出なければ彼らを擊退することはできぬが、もつとも要領のよいのは、彼らを一切相手にしないことである。

『國民政府を相手とせず、蔣政權を相手とせず』といふわが對支方針が、蔣介石政權に對しては、もつとも有効適切であるやうに、うるさいものは、相手にしないのが、もつとも賢明なやうに思はれる。

しかしながら日支の關係は『蔣政權を相手とせず』と突つぱねてしまつても『支那人を相手にせず』といふわけに行かない。われらは今後ます〳〵支那人を相手として、これを自家藥籠中にまるめこむだけの根氣が必要なのである。鐵拳をふりあげて、執拗きもの賣りのコドモを追つ拂ふことは、必ずしも支那人を抱きかゝへてゆく道ではない。

私は日支親善の前に横たはるところの、多くの苦難を考へると、思はず暗然とならざるを得ない。

しかし、蘇州城內外の支那人はわが軍の嚴重な威力の前には、敬服し、畏怖して、默々としてひたすら日々の生活の安全を喜んでゐるもののやうである。蘇州の城門にはわが歩哨が、支那の巡警とともに出入を警戒し、女の巡警は支那婦人の、男の巡警は、支那の男子をカンタンに身體檢査してゐるのであるが、それを監視してゐるわが歩哨と、衛兵所の前を通過する男女は、一々丁寧に默禮しなければならないものゝやうに、おじぎをして行くのである。

これは中支方面の、どこでもかつて見なかつた光景で、このことは私を深くよろこばせたものであつた。相當身分のありさうな支那婦人でも、腕車をひいていく車夫でも、ものうりでも、五六歲のコドモでも、こゝの城門を潛るときは、必ずわが歩哨と、わが衛兵所に對してうや〳〵しく敬禮していくのである。かうした支那人の日本軍に對する敬禮は、たとひ形式的なものであるにせよ、それが習慣づけられていくうちには、ほんとうの尊敬、敬愛が生れて來るであらう。

私はしばらくの間、城門の一隅に立つて、通行人のこの敬禮ぶりを飽かず眺めてゐた。これは

蘇州といふこの城内外の、治安が、わが軍によつてもつとも安全に、都合よく運ばれてゐること
の何よりの證據であると、私には思はれた。
私はかうした習慣を、わが占據地域の、全支那民衆に強制しろとはいはないし、さうしたこと
を希望することは、可なり無理なシゴトではあると思ふが、占據早々から、この蘇州の民衆に、
かうした訓練を與へたこゝの部隊長には深い敬意を表せざるを得なかつた。
支那の民衆を駕御するには、かうした方法も決して無意義ではないし、それが將來、どんなよ
い習慣をこゝの民衆に植ゑつけることになるかも知れないと、私は、つくづく感歎したことであ
つた。

マルコポーロ

蘆溝橋、これは、日本國民にとりて、永久に忘れられない記念すべき橋の名である。このたび
の支那事變は、實にこの橋畔の一發の銃聲から起つた。
西洋人は、この蘆溝橋をマルコポーロ橋とよんでゐる。マルコポーロは、西紀第十三世紀ごろ

の、イタリー人であつたが、父と伯父に從つて一二七五年五月、まだ僅かに二十一歳の青年とし
て支那へやつて來た。そして元帝忽必烈（クビライ）に信賴せられて、十七年間の長い歳月を支那に生活した
支那で、マルコポーロの名を冠したものは、たゞ一つの北京附近の蘆構橋だけではない。崑崙
山脈の東部に當つて青海地方の中央を東西に走る一連の山脈がある。それはマルコポーロ山脈と
よばれてゐる。彼が父に從つて支那へやつて來た時には、オクス河上流、パミール高原、ロプ湖
畔、ゴビ沙漠などの陸路をとつたものであるが一二九二年、三十八歳にして北京から船で運河を
下つて揚子江に出で、鎭江から杭州の洪宸橋へ出たものである。
彼がこの歸國に際しては、忽必烈（クビライ）の女コカチン姫が、ペルシヤのアルグン汗との婚約が整うた
ので海路、この花嫁をペルシヤに送り届ける使命を負はされ、花嫁一行を案内して、スマトラ海
峽を通過し、印度洋を橫斷して、ペルシヤに行つた。もしこの花嫁護送の任務がなければ、忽必
烈（クビライ）はマルコポーロを手元に抱へて、決してイタリーへ歸國することを許さなかつたであらう。
マルコポーロの『東方見聞記』は、支那および日本の事情を、はじめて西洋人に紹介したので
有名な旅行記であるが、彼が忽必烈の左右に仕へてゐた期間は、てうど元寇のあつた時代で、前

後七、八年間にわたつて、日元の間に風雲すこぶる險惡をきはめたのであるから、それがマルコポーロの見聞に映せぬはずはない。けれども彼の『東方見聞記』は、彼自身の執筆にかゝるものではなく、獄中に囚はれの不自由の境遇の底にあつて、僚囚ルスチチアノに、談話の要領を筆錄させたものに過ぎないから、日本に關する彼の見聞記がきはめて表面的のものに終つたのは止むを得ない。

私は杭州に來て、西湖を美しいと思つたことは事實である。杭州の風光は、元來、支那的な雄大な景色ではなく、箱庭式な、日本人向のする景色である。雄大で、粗暴で、まとまりのない支那の景色ばかりを見てから、たま〳〵杭州に來ると、キチンと小さく纒まつたこゝの景色がサスがに珍らしく美しいものに映ずる。これは元來、日本人のよろこぶ風景なのである。しかしマルコポーロが、元のコカチン姫を送つて、杭州に來た時は、キンセイといふ記事をかき、こゝの景色を讃歎して『天國の都市』(The City of Heaven)といつた。これはマルコポーロが西洋人流の意味で杭州を『天國の都市』といつたのではなく、支那人の『上に天堂あり、下に蘇杭あり』のコトバを受け容れて、そのまゝ西洋流に表現したものなのであらうが、とにかくイタリー人たるマルコポーロにも、西湖の景色は、天國のごとき美しさに感ぜられ西湖をもつた杭州の街は、世界中で、もつとも善美を盡くした都會であるとまで激稱したのである。

もちろん、われ〳〵日本人が見て美しいと思ふ景色は、イタリー人にも美しく見え、支那人にも美しいと映ずるには違ひないが、西湖の風景美は、所詮、日本の箱庭式の、手のこんだ景色なのである。

新々旅館のバルコニーに立つてあけ行く朝の湖畔を眺めてゐると煙雨模糊として、箱根の蘆の湖か日光の中禪寺湖を眺めてゐるような、何ともも知れぬ、したしみぶかい日本的な美しさが感ぜられる。水にうつる一連のプラタナスの影が霧に濕んでゐるのもよい。まだ朝日をうけぬ水の色が、どんよりと乳白色に淀んでゐるのも、淡い旅愁をそゝる景色ではある。

しかしながら西湖十景などとピック・アップされて、みやげものの繪葉書にされてゐるやうなあり來りの景色や、名勝は、たゞそれだけのものであつて、必らずしもそれに心を動かされるといふものではない。西湖のよさは、さうした十景などに選ばれたもの〳〵外にあるのではないか。名勝ならぬ平凡な景色の中に、ほんとうの美しい景勝があるのではないか。

浙江の海塘

上海の吳淞から起つて、杭州に至る百八十餘マイルの海岸全體をひき廻した大堤防がある。それは江南の海塘事業なるものであつて、實に萬里の長城と、大運河とに比肩すべきほどの支那における大土木事業である。

黃浦江の石垣の護岸工事といふものは、まだそれほど目に着くものではないが、この海塘工事が杭州に近くなるほど、ます〳〵堅牢を加へて、すばらしい工事となつてゐる。

これは、いふところの揚子江デルタに打ち寄せる高い海潮を防いで、安全な農業地をつくるためのいとなみであつて、それがいつの時代にできあがつたといふのではなく、隨分古い昔から次第に着手されたもので、無論、唐代以前から、すでに幾分か築造せられてゐたものと思はれる。すなはち一千二、三百年から、これらの防波堤築造工事は、次第に築造されてきたものである。

さきにもいつた通り、揚子江の本流またはその支流が、太湖に注いでゐた時代は、太湖以東の地はほとんど潮水の奔流に委せて顧みられなかつたものであるが、いつの時代にか、揚子江と太

湖とが斷絶して、はじめて三角洲地帶の開拓がはじまり、周から秦、漢へかけて、國都縣城が設置されるとともに、江南一帶の三角洲地域に、海塘が築造されるに至つたものと思はれる。

當時の海塘には石造と、土造とがあつて浙江省にあるものは大概石造である。これは寧波灣や錢塘江の有名な高潮を防いだものであらう。

しかし、江蘇省におけるやうな高潮は稀であるから、全部土堤にして、嘉江、松江上海一帶の低地に潮水の侵入するのを防ぐ程度のものにした。これがいふところの江南の海塘事業なるものである。

杭州の西湖は、浙江海岸の有名な、高潮が年々襲來して、都市、農村を荒して廻るので、それを防ぎ、かつ緩和するために、沼澤地帶となつてゐた湖沼の一つに、人工的土工を加へたものであつて、自然と人工との調和によつて生れ出でた風景美なのである。

沼澤の水を拔くために掘つた路や、沼地を埋めて乾田となすために掘られたアトに出來あがつたクリークや、その他潴水の整理と利用とのために、無數の水路が作られていつた。そしてはじめて江南の地に水災なく、今日見るがごとき支那國内無比の豐穰、富裕な地域となつたのであ

る。

これは農業民族としての漢民族が、自然の悪條件を克服して、次第に美地良田にまで發達せしめたところの長い努力によるものであつて、つまりは大地を愛する支那農民のつよい民族性の勝利をもの語るものであると思ふ。

杭州は杭はクイであつて、最初の都城を建設するために杭を打ちこんで、地盤を堅牢にし、海波の襲來を防いだ由來が、杭州といふ文字の上に殘されてゐるのである。

『盧山は煙雨、浙江は潮』といはれ、盧山の漠々たる煙雨に對して、浙江の潮は、支那にあつても昔から有名なものとされ、今も舊曆八月十五日の高潮の襲來する日は、上海、蘇州よりわざ〳〵見物に出かける觀光客があり、そのために觀覽列車を特別運轉するといふことである。

浙江は一名、錢塘江で、杭州の下流だけをさす場合には特に錢塘江といひ、河の全流を總稱する場合にはこれを浙江と稱するらしい。

史記の秦始皇本紀に『三十七年江（揚子江）を浮かむて下り、丹陽を過ぎて錢塘に至る。浙江に臨むて水波惡しく、すなはち西百二十里、狹中に從つて渡る』とあるから浙江の潮がつねにいかに荒れてゐたことを知るに足るであらう。

『風あれば七里、風なければ七十里』といふような險灘も、浙江の航路中に橫たはり、水路の航行は、必らずしもらくではない。

一昨年の十一月、わが『皇軍百萬杭州灣に上陸す』といふアドバルンをあげて、敵膽を寒からしめた金山衞城は、その昔倭寇の來襲を防いだところとして有名であるが、灣の西岸は悉く沙洲から出來てゐて、めぐらすに海岸をもつてし、煉瓦造りの部分をもつて築造された蓮花塘のごときは百四十支里の長きに及んで堅牢無比を極めたものである。

こゝは詩人白居易や、蘇東坡が役人としてやつてきて、錢塘江の治水に成績をあげたところで西湖の湖中にある白公堤はこれら詩人兼役人の築いた防波堤の名殘りなのである。

詩人としても、かれらは空想的詩人ではなく、きはめて堅實な實際家であるところに、支那的性格の現實性がある。これは誠にわれ〳〵に興味ふかいことに思はれる。

梅の林和靖

杭州を訪れるものは、西湖の景色の美しさに心をひかれると同時に、この湖中を横斷して築堤工事をやつた白居易と、蘇東坡といふ二人の偉大な詩人について、今さらの如く認識を新たにせざるを得ないであらう。

白居易は『郭を遶る荷花三十里城を拂ふ松樹は一千株』などといふ詩をよんで、西湖の蓮の花が三十里も咲きつゞき、城内の松樹が一千株もあると數へ、甚だしく數字的な對照の妙をこらしてゐるがそれで立派に詩になつてゐるのである。

支那の詩は、數字即詩、現實即詩であるところが面白い。この數字の巧な對照を缺いたところの詩には、漢詩の妙味といふものが感ぜられない。

だから、もしこの手法でいけばわが豫算數字百億が、たゞちに雄大な漢詩となり、人口一億の統計數字も、現實をうたつた藝術的な優れた詩となるべきはずであるのに、日本にはさうした數字を詩に活かすといふ工夫はかつて成功したことがない。この白居易の有名な詩に『白髪三千丈憂によつてかくの如く長し』といふのがあるこれも數字の詩化であり、現實の藝術化である。

蘇東坡もやはり西湖の湖中にある孤山の柏堂をよむだ詩の中に、例の通り數字を巧に驅使してゐるのである。『双幹一たび神物に先だつて化す。九朝三たび見る大平の年』といふのがその一例である。

これは白樂天のやうに『白髪三千丈』と大げさに出ないで、一二三九などといふ小學一年生のやうな數字を取り扱つてゐる。それでもやはり蘇東坡なるがゆゑに、有名な詩である。

序であるが、西湖の孤山に孤山寺といふのがありその孤山寺に『六一泉』といふ池がある。六一居士といふのは東坡の友人歐陽公のペンネームで、彼には『六一詩話』といふ著書がある。東坡が友人歐陽公を記念するためにつけた池の名が『六一泉』である。こゝにも數字の羅列がある。この六一の數字までも支那人の現實的な、實際的性格を表現するものだとはこぢつけぬつもりであるが『數字と詩』との關係は可なり支那では密接してゐることは事實であらう。

孤山には放鶴亭といふのがあつて、そこには、これも有名な林和靖が、廬を結むで隱遁してゐた。彼は純粹な詩人的生活をこゝで送つてゐたので、支那人にしてめづらしく恬淡で、利慾のすくない男であつた。

彼は人生の意義は『適意』といふのにあると信じ、毎日、西湖附近に氣に入つた樂隱居所をさ

がし廻つて遂に孤山に尻を据ゑてしまつた。孤山は鏡を磨いたやうな湖水にのぞみ、四面の山々はさながら畵屛風をひき廻したやうである。それに四面を湖水に圍まれてゐるから、一切の俗塵に近いやうで遠く、竹林の小路が盡きたかと思ふと、忽ち石橋がつゝて行先きがある。淺からず深からず、大いに彼の氣に入つた。

そこで孤山に孤庵を結むで、家のまはりに梅を植ゑた。多くはこつてりとした紅梅を植ゑたが白梅も黃梅も交へた。實に三百六十といふ梅樹を、キチンと植ゑた。そして鶴を二羽飼つて、二十年間、一度も城中にはいらなかつた。春には梅の花が咲くと、一ケ月餘も門を閉ぢて、ひとり梅林の間に詩酒をたのしみ『疎影橫斜水淸淺、暗香浮動月黃昏』といふ例の日本でも有名な詩をよんだ。

しかし初夏、梅の實が熟する頃になると、それを賣つた。花をたのしみ、實を賣つた。こゝにも支那詩人の實利主義的な性格がよく現れてゐる。

三百六十本の梅の樹からは、何十石の梅の實がとれたであらう。その梅の實の收穫利得はみな紙袋に包むで、瓶の中に投げこんで置いた。三百六十本の梅の實の賣却金を、一本々々、別々に

ちやんと區分して三百六十包みのお金を瓶の中に投げこんでおくのである。それを每日、一包みづゝとり出してはその日の費用にあてた。一家の經濟はすべて梅の値段の多寡で計算し、それでくらしを立てゝゐた。だから多い日には、一圓二圓といふ日もあるし、少い日には十錢、二十錢にも足りない日がある。梅樹の大小、梅の實の多寡によつて、日々紙袋の中の金が違つてくる。けれども林和靖先生は平氣であつた。

今日のこよみでならば三百六十五日であるから、もし日本で林和靖を學ぶなら、三百六十五本の梅の木を植ゑねばならぬし、鶴の代りにニハトリを三百六十五羽飼つて見るもよい、

とにかく支那の詩人は、うき世をすてゝゐても、食ふことだけはチヤンと自分で處置していくのである。數字的、經濟的な生活力を心得てゐるところに、支那的性格があるではないか。支那を指導するものは、この邊のところを、しつかり摑むで置くべきであらう。

盡忠報國

『盡忠報國』といへば、わが大和魂の結晶である。支那には『盡忠報國』といふ文字もなく、

コトバもないと考へてゐたら、豈計らんや、杭州の西岸湖畔の岳王廟には岳飛みづから揮毫するところの『盡忠報國』といふ文字が、壁に刻まれてあり、それの石刷りが、いくらでも廟前のみやげもの屋に賣られてゐる。これには驚いた。

さらに驚いたことには、岳飛の母は、彼の背中に『盡忠報國』といふ文字を、いれずみにして彼の忠節を勵ましてゐたといふのである。氣節の高く、志操のはげしい岳飛の母の教訓には、つくづくと頭が下がる。

借問す、この事變に際して、わが日本の母や、妻たちは、出征する勇士に『義勇奉公』の文字をいれずみして送り出す婦人は、もとよりあるまい。しかし、その胸にしつかりと『義勇奉公』の文字を刻みこむでやる婦人が、それほどあるであらうか。私は岳飛の母の健氣さに敬服する。

二十年來、私の家には『觀文相公』にあてた岳飛の手紙が小さき篇額として掲げられてゐる。この南宋最後の忠臣の書いた筆蹟を眺めてゐると、その雄渾な文字が、彼のハツラツたる氣魄とともに、自分に迫つて來るやうな氣がする、岳飛の母が彼をいましめ教へた盡忠報國の精神が、脈々として彼の手蹟の裡に一パイに躍つてゐるのである。この岳飛こそ支那のために、いくら讃美してもよい英雄なのである。

岳王廟は、宋の忠臣、岳飛を祀つた廟である。世に忠烈廟とも稱へられてゐる。廟中に遺像を刻み四面の壁には岳飛の書が刻されてゐる。廟の左には南向して、岳飛の墓がある。俗に岳墳とよばれてゐる。墓は、しつくゐを塗つた土饅頭で、かなり大きい。墓をめぐる土塀の上を栗鼠がするノ〳〵と走り、土塀の外は荒涼たる裏山につづいてゐる。空林と、空山とを背景として、こゝに岳飛は永久にねむつてゐるのである。

墓前に立つて、あたりの景色に眺め入つてゐると、はてしらぬ空虚な寂莫に似たものを感ずる岳飛の孤忠をあはれむ孤墳が、ひそかに胸の中に醱酵してゐるのであらう。

『岳王墓上に草、離々たり、秋日荒涼として石獸危ふし、……水光山色、悲しみに堪へず』といふ趙子昂の古詞である。子昂ならずともまことに水光山水、悲しみに堪へざる風致である。

宋が、揚子江を南に渡つて臨安（今の杭州）に都したのは、北方よりする『金』の壓迫に堪へかねてのことであつた。岳飛は宋朝に仕へてあくまで主戰論を主張し、寡兵をもつて强敵を破つた高宗もその忠勇を賞して『精忠岳飛』の四字の宸筆を『旗』に賜ひ、錦旗の向ふところに敵はな

かつた。しかし秦檜は、ひそかに、敵の『金』と通じて詔をもつてまづ張俊の軍を召還し、岳飛の軍をも班さしめようとした。すなはち秦檜の主唱する和義說が、遂に朝議を壓したのである。

岳飛は『あゝ十年の心力、一日にして廢む、如何せむ、如何せむ』といつて悲憤慷慨したが、全くそれは如何ともすることができなかつた。

それのみではなかつた。彼は秦檜のために、父子ともに捕縛されて獄に下された。その時に、衣を脫いで獄吏に背を示した。そこには母がいれずみしてくれた『盡忠報國』の四字があり〳〵と書かれてゐたのである。彼に二心なきことは明らかであつたが、彼の反對派なる秦檜は、遂に彼を刑場に屠つた、時に岳飛は三十九歲であつた。

雄氣堂々として、斗中を貫ぬくがごとき彼の氣魄も、意氣も、膽力も、忠誠も、時に利あらずして一切を泥土に捨ててゝ惜しくも非業に死んでしまつたのである。

岳飛の書は、實に遒勁といふべきものである。書のうまい支那人の中でも、岳飛の書のうまいものゝ一つであらう。書のうまいよりも、その人物のうまさが、もつともよく彼の書に表はれてゐる。その人物のまじめさ、書のよさとともに、また彼の詩は、高い香氣ある氣品をもつてまさり、その間、正氣の磅礴するところが見える。

『頑惡を斬除して車駕を還す、問はず登壇、萬戶侯』といふ彼の詩に岳飛の面目が、あり〳〵と露呈してゐるのである。すなはち自分の願ひは頑强猛惡な奴どもを斬り除いて、天子の車駕を舊都に還し奉ることができればそれで十分だ、勳功を立てて萬戶の封地に大名になるやうなことは、一つも問題としてゐないといふことを彼はこの詩に披瀝してゐるのである。

『不問登壇萬戶侯』ほんとうに岳飛は忠義に徹した英雄であつた。

大地の母

黃河と揚子江は、一つの崑崙山の南北に發源して、支那を橫斷するところの二つの大河である。しかし黃河と、揚子江は、一つの水源から發生した兄弟でありながら河の性格は、全然違つてゐるのである。黃河はつねに激しい男性のいかりを思はしめ、揚子江はいつでも甘い女性の乳房を思はしめる。黃河は四千二百キロ、揚子江は五千二百キロであつて、その流程に長短があるばかりでなく、水勢においても、黃河は急激で、揚子江は緩漫である。黃河、一たび怒れば、河水

は漲溢して、平野といはず、村落といはず、大蛇の狂ふがごとくのた打ち廻つて、つねに水路を變更するのであるが、揚子江はたとひ氾濫しても、概ね一定の水路上に、ぢり〳〵と增水するだけであつて、黄河のごとく亂脈を極めない。

それで西洋人は、黄河をよんで『支那の悲哀』といふのである。もし黄河を『支那の悲哀』といひ得べくんば、揚子江は『支那の母』とでもいふべく、あるひは『大地の母』ともいふべきであらう。黄河は支那の農生を荒らし廻り、揚子江は支那に豊饒な農土を與へるからである。

揚子江デルタの、江南一帶の地方は、支那第一の肥沃なる農土である。この地方の農民生活は支那のいづれの地方の農民よりも豊裕である。家々の構造をみても、墓地の土饅頭の結構をみても、農家の庭に積みあげた藁塚群をみても、鷄、犬、牛、豚の豊富さをみても、いづれも江南の農民生活はが底ぶかくしつかりしてゐることを知るであらう。

所詮、支那は農民に依存する社會である。支那の實力は都會にあるのではなく、農村社會にあるのである。支那の農村社會には、豊かな五穀がみのり、棉がとれるし茶が出來るし、絹が生産される。揚子江流域の農地は、一定のモンスーンが襲來して、適時の雨と風とがある。揚子江はかくして悠々五千二百キロを流れ、その流域に二億の人口を養うてゐるのである。揚子江はこの意味からいつて、支那の生命線である。

さきにもいつた通り、黄河は、激しい急流によつて泥土を押流すので、この泥土量は揚子江のそれよりも、はるかに大きい。揚子江も、海口に流出する泥土量は相當に廣大であるが、年々二十五フイトの海面を埋めるにすぎない。それにくらぶれば黄河の押し流す泥土量は毎年二百九十マイルの海面を埋立てると計算されてゐる。從つて揚子江は處女のごとくおとなしく、黄河は暴君のごとく亂暴である。

そこで、支那事變の處理についてであるが、支那の建設は、要するに揚子江を中心として行はれるべきであり、黄河建設だけにとゞまつてゐてはならないといふことである。

試みに上海、南京、漢口を一直線に貫く東西線を中軸として、即ち揚子江の本流を中軸とし、漢口から北へ北京までの一線と、漢口から南して廣東までの一線とを南北に引いた以東の支那が大體現在のわが皇軍占據地域で、これに蒙疆地方と山西省が頭の如く乘つかつて西へ延びてゐるいふところの東亞の新秩序とは、今のところ以上のごとき形體内における新支那の建設をめざし

て進んでゐるのであるが、その中心をなすものは、揚子江の東西線である。これは人間でいへば腹部で、漢口はまさにヘソに當るであらう。

かつて事變の初期には、北支五省の工作といふことがやかましく唱へられたが、その後、事情は變化し、事變は成長して、問題は全支那に延長擴大されてゐる。從つて黄河中心の經營から、揚子江中心の經營にまで推移し變遷してゐる。すなはち新しい東亞秩序の建設には、揚子江がおのづから中心とならざるを得ないのである。かくして揚子江を握るものは、結局支那を把握したのである。今後ます〳〵政治的に、經濟的に、文化的に、揚子江の把握は徹底、强化されねばならない。支那の母であり、大地の母たる揚子江よ、永久に滅びざるものを支那の大地に打立ててくれ。

黄河

これは私の支那觀察の乏しい報告書である。こゝではそれをたゞ素描するだけにとゞめるであらう。しかしながら私はこの中で、支那のもつ本來の性格を、ひそかに見届けたいと念願する。支那事變を內面的に深く理解するためにはそれが何よりも必要だと信ずるからである。

支那の大地

晩秋の、よく晴れた日が、幾日もつゞいた。私の長い汽車の旅は輝やかしく祝福されてゐた。八達嶺を越えて、康莊から懷來の盆地に出た時は、サスガに胡地深く來たといふ感じであつた車窓の左右に展開する美しい砂山には、終日、温かさうな日の光りが降りそゝいでゐるし、蒼穹をかぎる遠い山脈が、高原をとり圍むでゐた。山は低かつた。

康莊驛で、白壁をもつた街の民家が、一直線に正しく驛外に並むでゐるのを見た時は、新鮮な

フレッシュな感じだつた。その一列の民家を越えて、低い山脈が、遠くの方に青々としたスカイラインを曳いてゐるのが美しかつた。

その晩は、張家口どまり。

翌日は、張家口から大同へ。

汽車は、無限の單調をのせて、默々として走つた。窓外の風景は昨日も今日も相變らずの千篇一律ぶりであつた。疎林は空林につゞいた。かくの如くにして茫々漠々たる荒野は、はてしなく、いつこまでも展開してゐる。しかしながら落ち盡くした疎林を透して、荒野の彼方を、南陽河が、あるひは桑乾河が白銀の帶をのべたやうに隱見するのである。これは景色ならぬ景色である。眺望を超越したる偉大な眺望である。美しいといはむにはあまりに粗雜な偉大さである。

思ふにこのわたりの風光は、油繪のごとく框の中にはめてみるべき小さな景觀ではない。人爲的に纏めようとして纏まりのつかぬ景觀である。近づいてこれを見る時には、何の感興もないところの索寞無味の風光である。しかしながらこれを遠望大觀する時には、はじめてナミはづれた雄大な美しさを感ずる。

支那の風景は、音樂についていへば、疳高いソプラノの獨唱ではない。幾百千人の合唱する低い男性的なバスの津波のやうな感じである。これは世にも大きな音樂の合唱である。幾百千人の一大合唱を貫いて流れる一本の太い調子、それがこゝにいふところの黃河である。

支那には揚子江と、黃河とがある。南には揚子江、北には黃河。たとへば葉脈のやうに縱橫に錯綜する大小の河流は、北方においては、たゞ一本の黃河の主流に統制されてゐる。黃河を王座にあふぐ大小の河流は、いづれも『河』の字をもつて呼ばれる。だから北支を一貫する大きな歷史的、經濟的、政治的文化の諸勢力、諸要素は、これを黃河流域の文明とよむで差支へないであらう。

黄河は蜿蜒五千里、日本の里數にして八百餘里の長流が、西から東に向つて無限に黄土を押し流してゐる。たとひ甘肅省境ではそれが北流し山西省境ではそれが南して曲折迂回の流路をたどつてはゐるが、洛々として西から東に流れることには、古往今來少しも變りがない。この流域を中心として、興亡起伏きはまりなき人間歴史の變遷推移がくりかへされた。それが支那である。

かくのごとく支那の歴史をつくり上げたものは黄河である。黄河の流域を最初に支配したものは黄帝である。萬丈の黄塵が濛々として天空に舞ひあがる龍巻をシンボライズしたものは黄龍である。支那の宮室の屋根をおほふところの瓦は黄色である。かくして黄河黄海、黄帝、黄龍、黄瓦、何から何まで萬事が黄色づくめの支那である。この黄天、黄土で蔽ひつくされた支那は、畢竟するところ支那の大地を禮讃する思想のあらはれ以外の何ものでもない。支那はその意味で四千年來大地に生きる大きな農民國なのである。

天命論者

支那には變化はあるが、進歩はない。支那の歴史は進歩を記錄するものではなく、たゞ變化を叙述するにとゞまる。

支那は今でもヤハリ堯、舜、禹、湯、文武周公の國である、これらは四千年前に完成したところの理想國家の帝王である。今日の支那は、依然として堯、舜、禹、湯、文武周公を理想として強いあこがれをもつてゐる。二千年前に世に出でた孔子の時代にも、すでに進歩の理想はもつてゐなかつた。孔子は堯、舜、禹、湯、文武周公を理想とした。これはたゞ過去への懐古であつたツマリ支那は未來に發展しようとする國ではなく、過去へ遡上しようとする國であるといふことになる。

支那には昨日があつて明日がない。

漢民族が、いつの時代に、どこから現在の支那へ移住して來たものか、それは分らない。けれども漢民族は、昔から支那に土着居住してゐたのではなく、純然たる外來民族であつて、黄河の上流から次第に黄河にそうて、その沿岸に移住蕃殖したのだといはれる。しかも漢民族の支那内

地移住は、單獨に漢民族だけがやつて來たのではなく、その他の多くの異民族、異種族との間に不斷のはげしい競爭と對立とをくりかへしつゝ次第に今日の地位を占めて來たのだといはれる。この斷えざる生存競爭の試練がいふところの漢民族の性格を複雜多角形なものにつくり上げた。

漢民族の、第一にあげらるべき特色は、何といつても、旺盛な種族の蕃殖力であるといへるであらう、蕃殖力の旺盛であるといふことは、また生活力の旺盛であるといふことゝ同一意味でもある。そしてこれはまた漢民族が、自然風土に對する生活の適應性が屈伸自在であるといふ意味でもある。

記錄があつてから四千餘年、支那に文字が創始されてから何千年もうずつと古くから支那の文化は相當程度に發展してゐた。それが黃河流域からはじまつたのである。支那文明の搖籃地は、すなはち黃河なのである。

漢民族が、黃河流域に定着した時代には、それに競爭し、對抗して、ともすれば漢民族をその流域から驅逐しようとする種々の異民族との間に不斷の爭鬪をくりかへさねばならなかつた。秦始皇時代には、それらの胡人種が百餘國の多數に及むでゐたといはれるのであるから、漢民族がこれらの異種族に對する防禦的苦心と努力は一通りでなかつたと考へなければならぬ。

この百餘種の胡人種、胡民族との民族的鬪爭の舞臺は、四千餘年の昔から、引つゞいて今日に及びしかもそれが一日として休息した時代がなかつたといへるであらう。このことは漢民族をして、遂に自から守るに滿足して、進むで競爭相手を剿討しつくさうといふ積極的な氣勢を喪失せしめるに至つた、すなはち漢民族はあくまで防禦的の人種であつて、積極的に他國民族を攻擊することを知らない民族性格を植ゑつけてしまつた。これが支那人は平和的な民族性を有するものであつて、進擊的でないといはれる理由にもなるであらう。

茫々漠々たる曠野の中に立つては、一人の人間の力がいかに微弱で、はかないものであるかを顧みないわけには行かぬ。支那人はその意味では、もつとも眞實に、天地の無限大に驚歎し、自然風物の偉大の影響に從順であるといへる彼らは大地の力を信ずると同時に天命の肅然たる存在にかうべをたれる民族である。『天』といふ思想は、かくして早くから支那人を支配することゝ

なつた。『天』と『大地』とは、ひつきよう偉大なるこの力を兩面から觀察したものであつて、この兩者は支那人にとりては異名同義なのである。大地を鑽仰する支那人は、同時に忠實な天命論者なのである。

個人主義者

支那にありては、天と地とは、一つであつて二つではない。大地を禮讃する心も、天命に從順する心も、同じ一つの心であつて、二つではない。

『天の命、これを性といふ。性に從ふ、これを道といふ』

支那でいふところの道とは、人間自然の性情に從ふことなのである。それがすなはち天の命に從ふことなのである。されば『性、天、道』の三者は畢竟一つなのである。

かくして大地に從順なる心も、天命にスナホなる心も、道德に忠實であらうとする心も、それ〴〵別々のものではなく、たゞ一つなのである。

儒教も、宗教も、生活も、支那にありては、詮じつめるとたゞ一つに歸するのである。それは『大地』に歸依する心である。

黃河に押流すところの、滔々たる濁流、それは大地の生命が活きて流れてゐる姿なのだ。黃河こそ支那の根本生命の象徵なのである。

『天、性、道』の三者は、彼等にありては、たゞ一つなのである。從つて彼等は天命に對して全く無抵抗主義である。支那人の民族的性格はそこにある。

彼等は自己の運命を開拓しようとする努力を少しも感じないで、ひたすら無爲にして、運命のまゝに己れを委せようとする。それは消極的な人生觀といふべきものである。彼等はみづからをさうするより外に生きる道を知らないのである。われ〳〵日本人が、いかなる場合にも、積極的な感激で、進むで運命を切り開かうとする努力で奮ひ立つ場合に、彼等支那人は、たゞ消極的自己安易の生活に惑溺し切つてゐる。

何が、支那人をして、かくのごとく、消極的運命論者たらしめたのであらうか。いふまでもな

く、それは支那の國土が、度はづれに大きくて際涯を知らぬ茫漠たる無限大の大地の連續が、彼等をしてかゝる絶望感を抱かしめるにいたつたものである。

こんなにも廣々として、大きな國土を、小さな人間の力を以つてしては、どうしやうもないといふ事實。この事實が、支那の政治、經濟、思想、文化の一切を蔽うて消極的な宿命觀で彼等を塗りつぶしてしまふ。それが支那人のもつ民族的性格なのである。

だから古來、支那の帝王なるものは、決して力をもつて政治することをしなかつた。支那の帝王は『德』をもつて人民を支配することを理想とした。すなはち『德あれば興り、德なければ滅びる』それが支那政治の理想なのである。

しかしながら、かうした德治國の理想は、理念としては立派であるが、實際においては何らの統一支配を完成するものではなく、いはゞ、帝王の虛無的な、そして自慰的なナグサメのコトバにしか過ぎない。

かくして支那文化の奥底には、測り知られぬニヒリスチツクな寂寞が漂うてゐる。

これは人間の微弱なる省察の反映である。『弱きものよ、汝は人間なり』とは、支那人の宿命觀なのである。

かうした支那人（こゝに漢民族といふコトバで、支那人を代表させてもよい）漢民族の民族的性格、感情が、黄河の濁流とゝもに萬丈の黄塵とゝもに、廣漠たる黄天、黄土とともに發達して遂に拔くべからざる牢固たる運命となつてしまつた。

漢民族は消極的であり、防禦的であり、虛無的であり、そして樂天的である。つまり一言にしてつくせば、彼等は個人主義的享樂への徹底のほか、何ものもないのである。

白河の淨化

天津から汽車で、北京に向つて北上すると、やがて楊村のあたりから、一つの白道が窓外に走つてゐるのを見るであらう。それは通州街道である。

その通州街道を越えて、はるか前面に、一條の白い長堤が蜿蜒として流れてゐる。これは永定

河の濁流が、天津にそのハケ口を求めて流れて來るのを、この堤防によつて天津郊外へ押流さうとするための新堤防なのである。これを彼等は『白河の淨化』と唱へ、實に百萬圓の工費をかけて、この一大築堤工事を行つたのであるが、その結果は豫期に反して、永定河は依然として、その濁流を思ひのまゝに天津に押流してゐるといふことであつた。いふところの『白河の淨化』はかくして遂に失敗に歸し、百萬圓の新築堤のみが、白蛇ののたうち廻るがごとく、楊村郊外にその殘骸をとゞめてゐるのである。

支那では、何人といへども一應治水工事の必要を痛感せぬものはあるまい。しかしいざ、それを實行するといふ段になると、如何に勇氣ある政治家といへども、その實行には躊躇せざるを得ないのである。これは支那の國土があまりに廣大で、それを貫流する河水がはるかに人力を超越するところの長流で、かつその水量が無軌道的に無限に奔流するからである、

支那では、去年の夏、雨が多かつた。二十年來の降雨で、各川は氾濫した。それらの水流がほとんど天津にその河口を集中してゐるので、支那事變ありて以後の北支は騷然たる兵亂よりも、

むしろこの河川の氾濫により多く苦しめられたといつてよい。その氾濫區域は津浦線と京漢線の中間地帶、河北省南部の全体を蔽ふと稱せられ、被害區域はわが九州一圓にわたる廣さであるといはれる。それらの廣い、豐穰な河北平野が、すつかり浸水して、去年は何一つ作物の收穫を見ないのである。

支那農民にとりては、兵火よりも、この水害の方がはるかに恐ろしい。

はじめてこの事變で、北支に出かけた人々は、漫々たる水を湛へた一大湖水の展開してゐるのを見て、これは何といふ湖水かと尋ねる人がある。それが降雨による浸水地帶だといふことにちよつと氣がつかないほど、その浸水地帶は悠々として積水を湛へてゐるのである。

天津郊外、汽車で二時間ばかりといふものは、この浸水地域の連續である。あるところでは、農夫が小船を漕いで、僅かに水面に頭を出してゐる棉の穗を拔いてゐるのもあつた。ある村の土壁の中では、やつと刈り取つた白い棉の穗を晩秋の太陽に干してゐるところもあつた。農作物は全滅し、棉作は收穫不能に陷つて居るにもかゝはらず、なほかつ彼ら農夫は、水の底から枯れ朽